

料飲好之季四



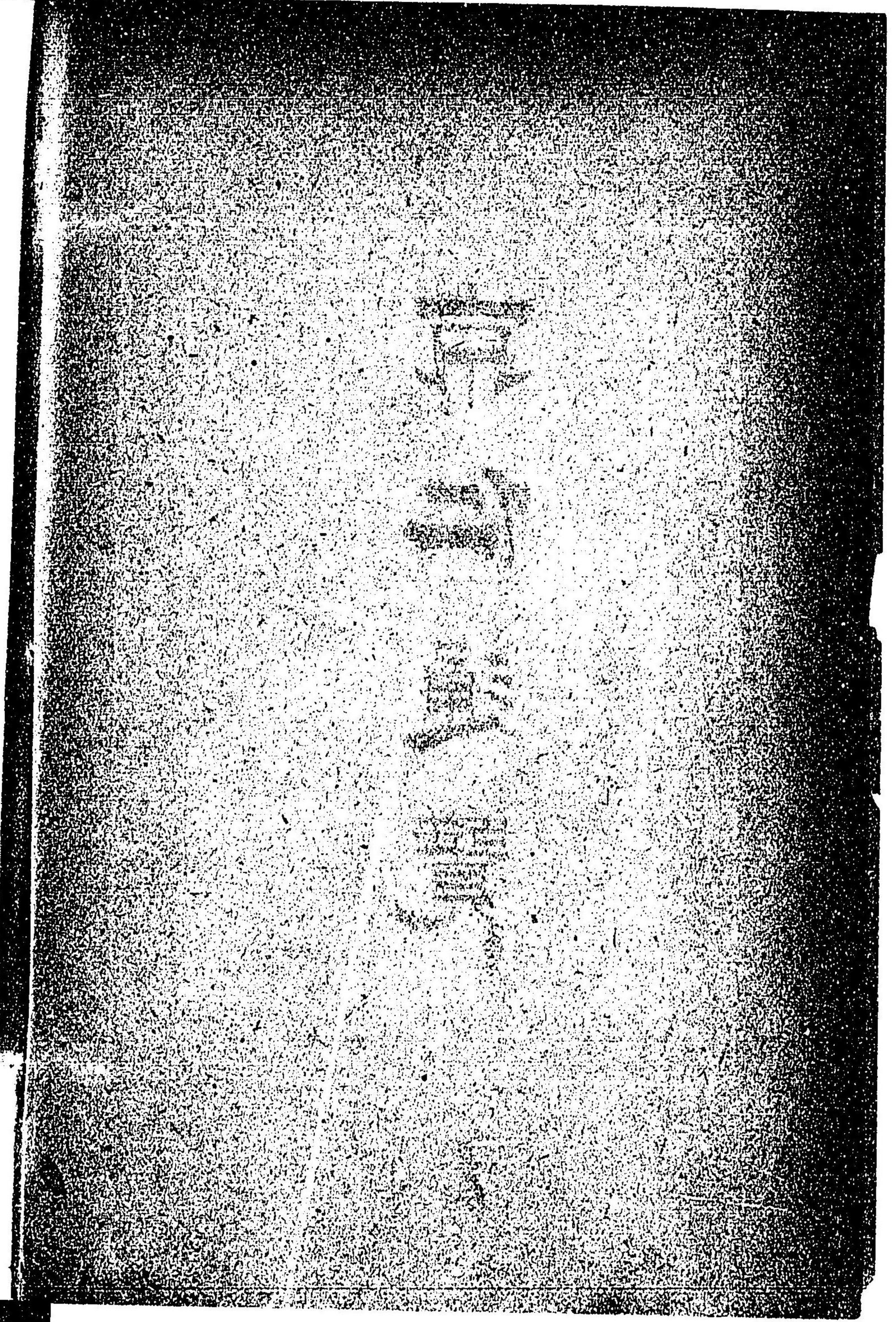
元 造 釀
社 會 式 株 酒 麥 本 日 大

京仁通覽

45. 7: 3
1935



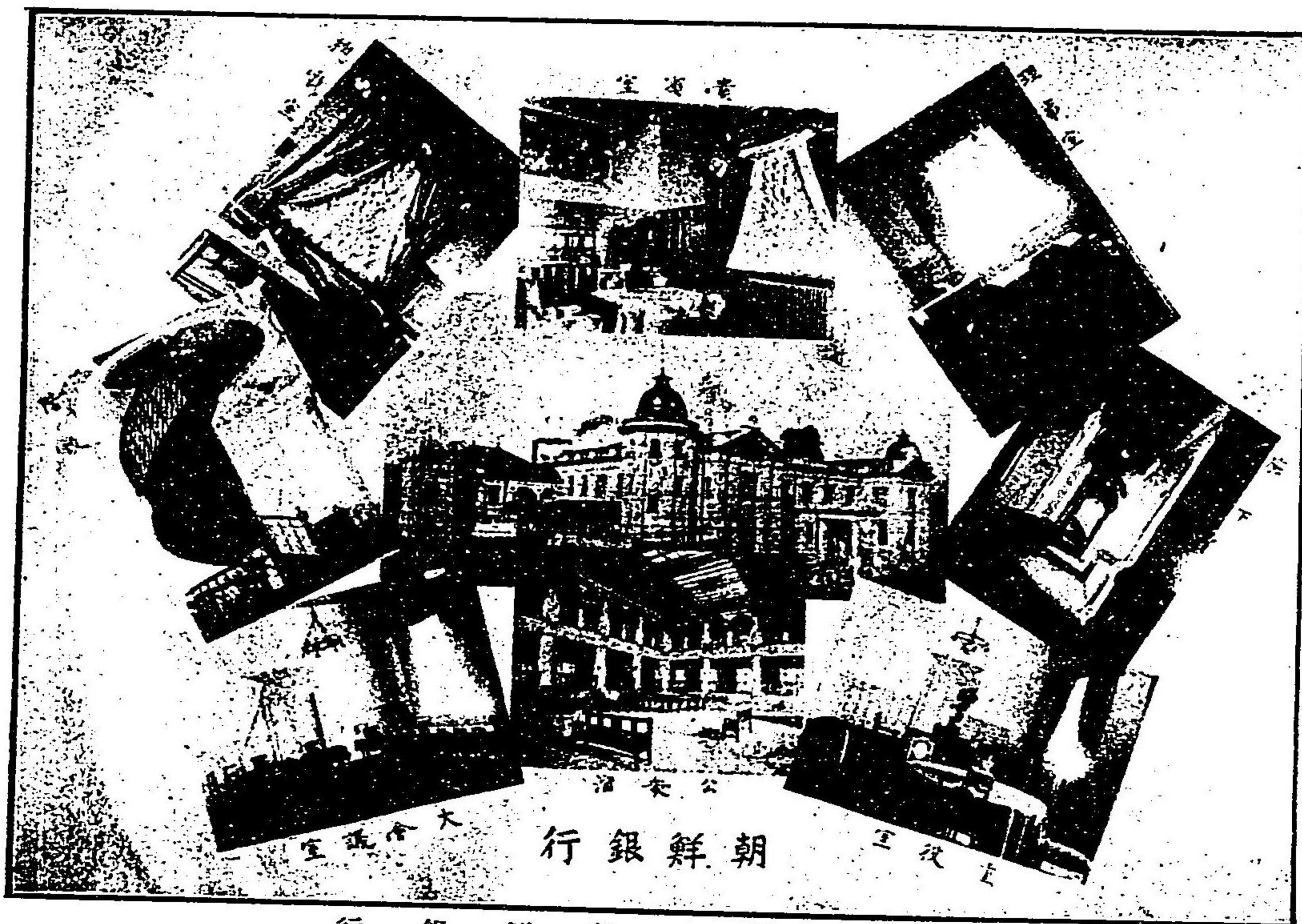
初野總督陸軍大將伯爵寺內正毅兵



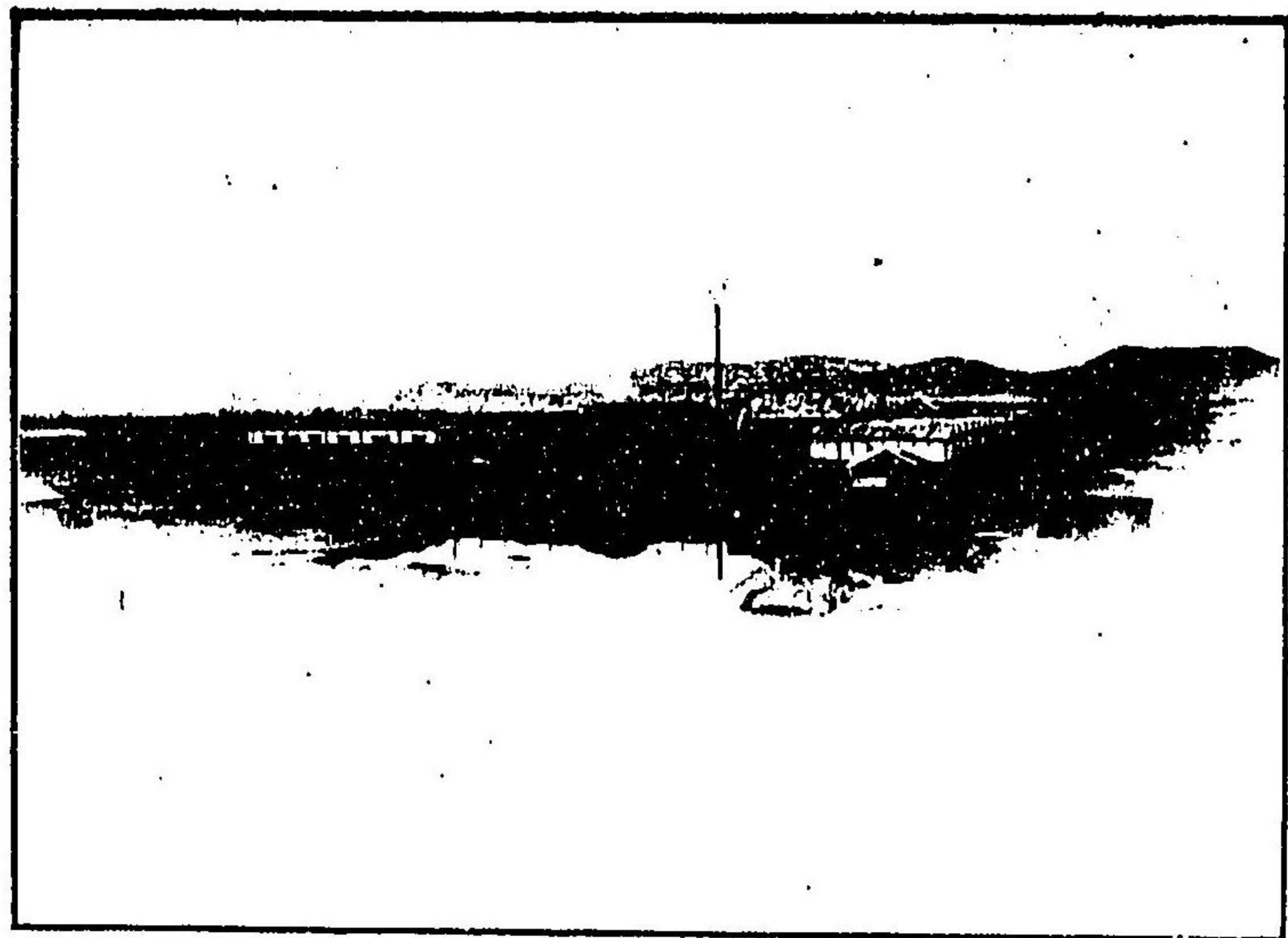


伯 爵 李 完 用 氏

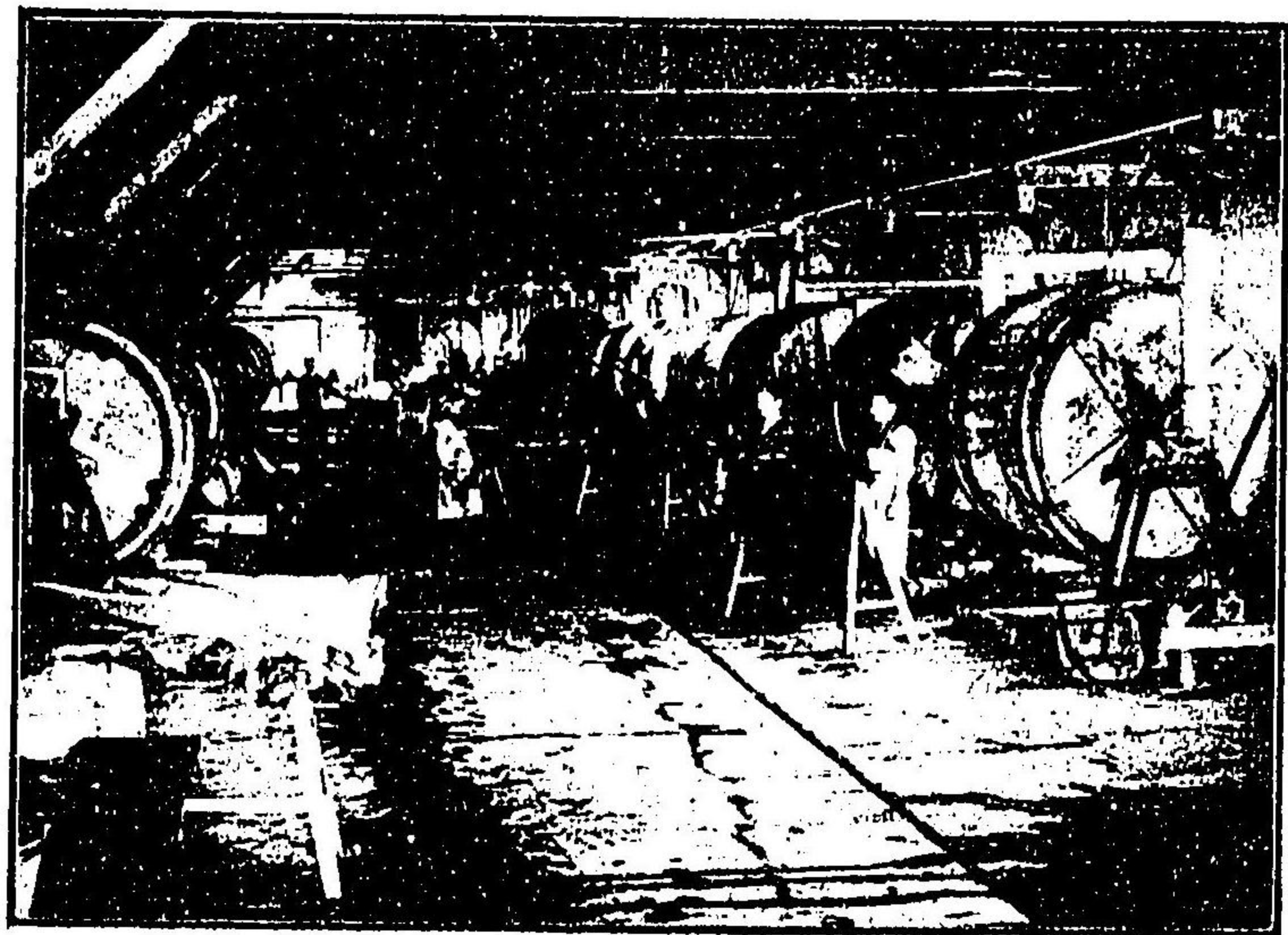
子 爵 宋 秉 畋 氏



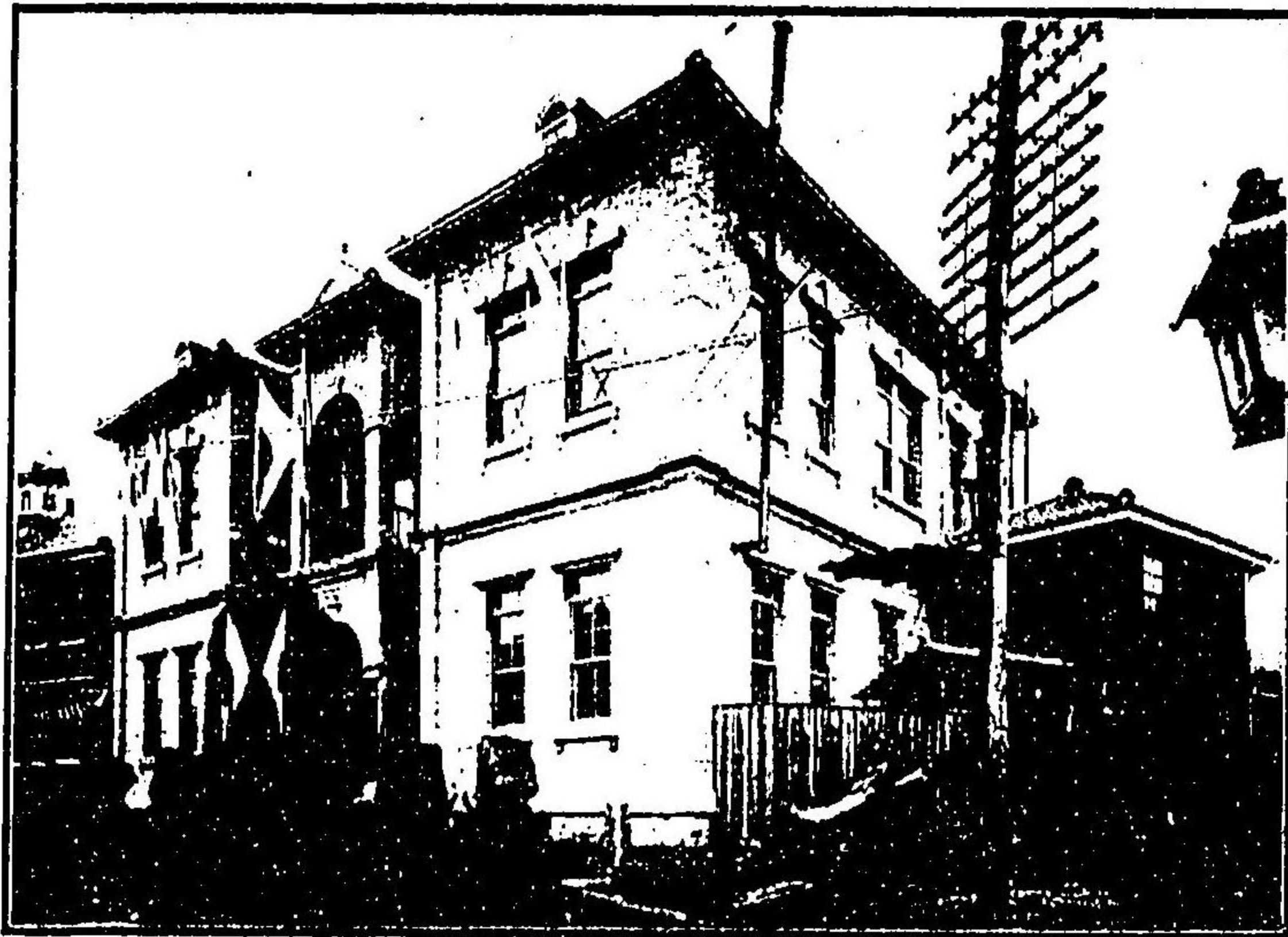
北京朝鮮銀行



永登浦 朝鮮皮革株式會社



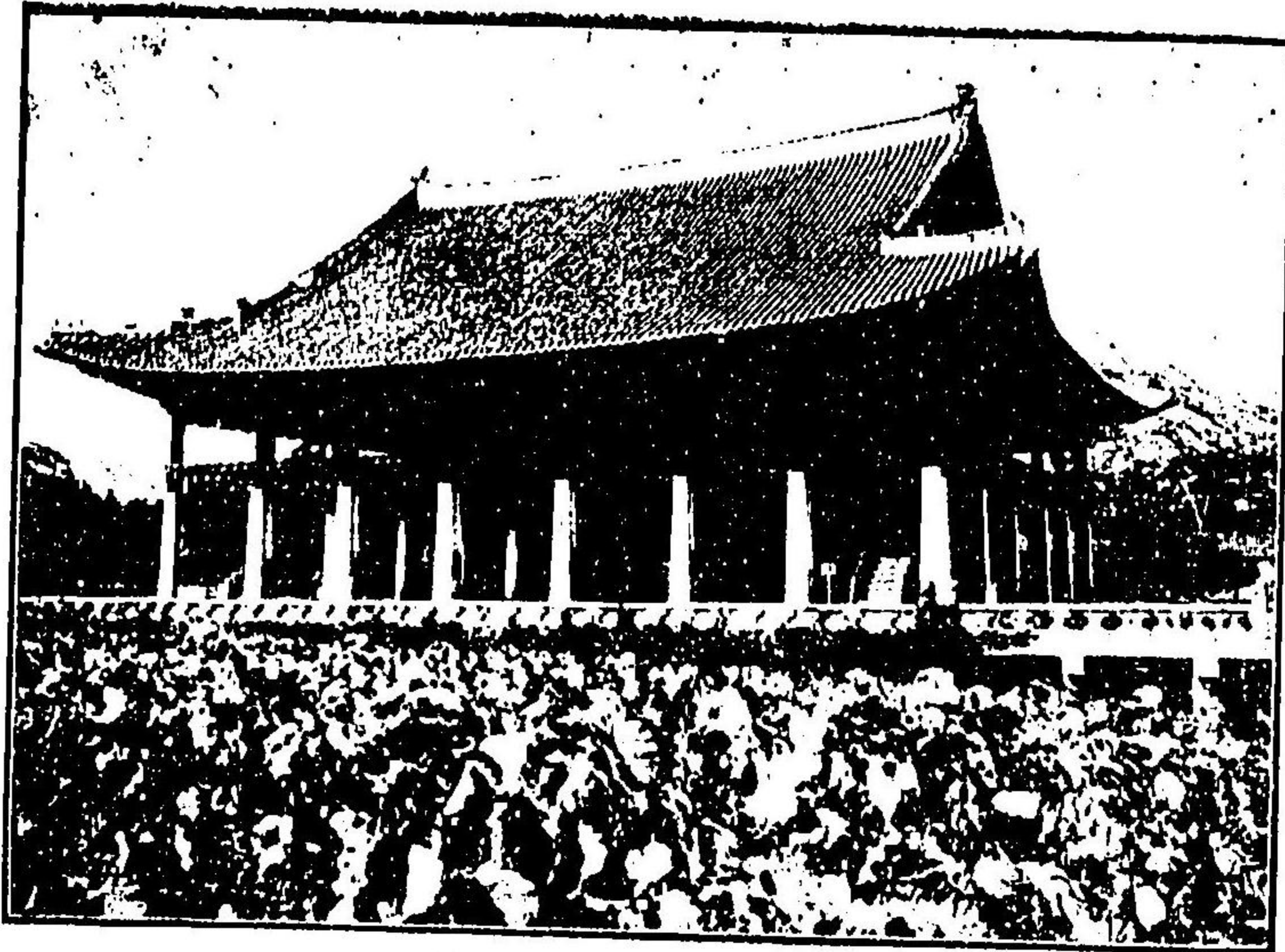
會社工場内の部



所 役 團 民 留 居 城 京



府 督 總 鮮 朝

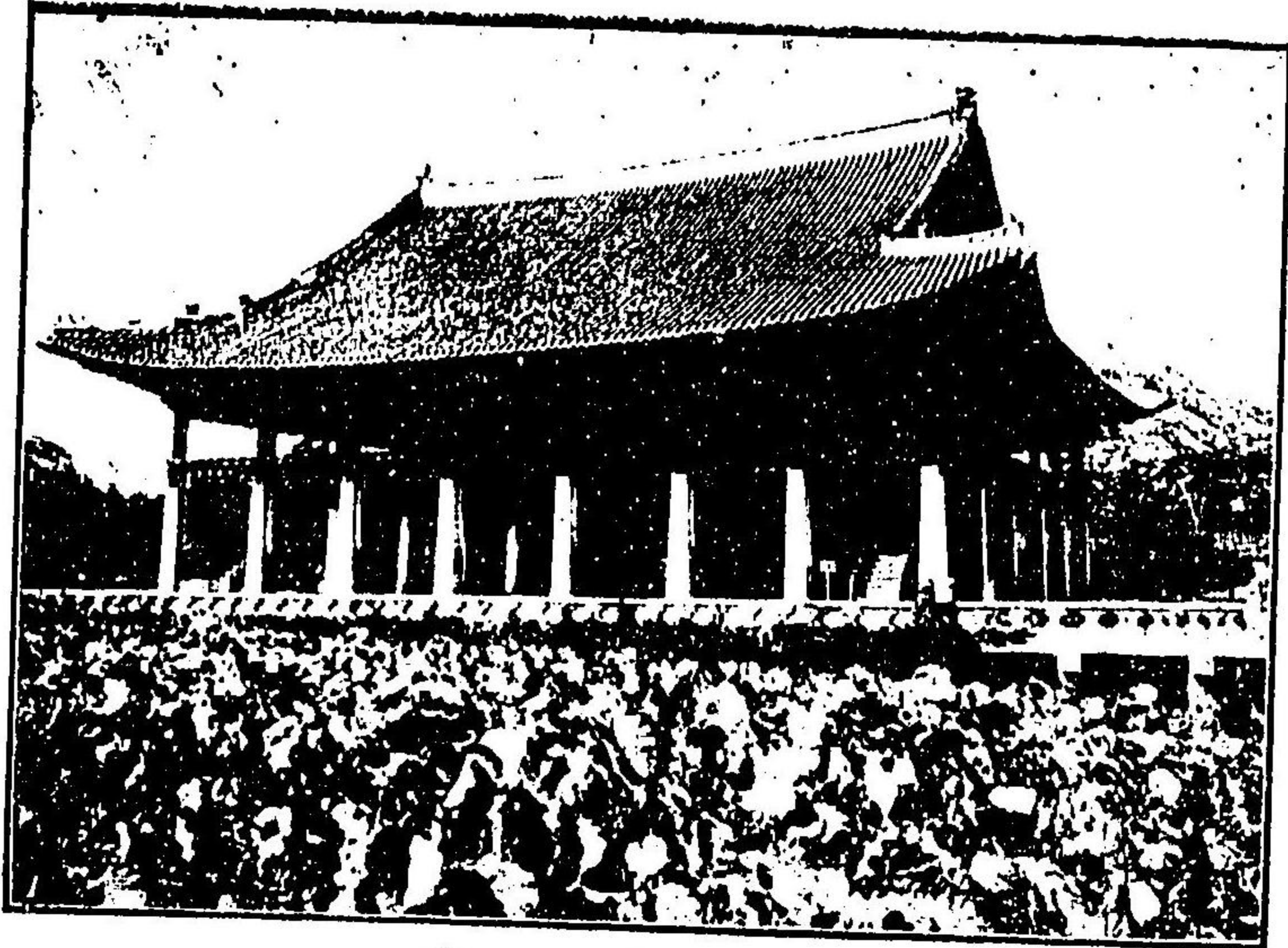


昌 德 宮



慶 會 樓

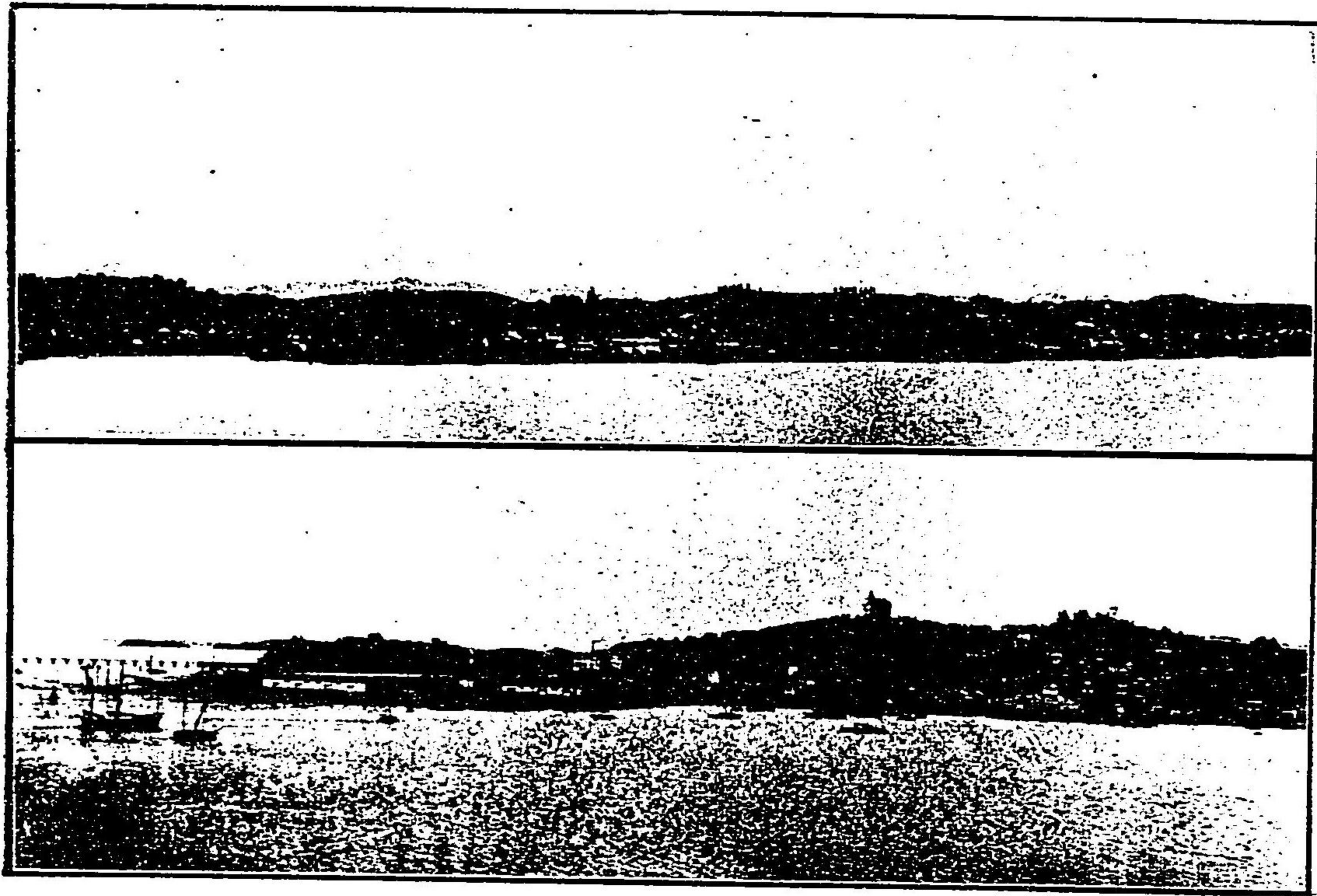
本寫
眞版文字正誤
正德宮、慶會樓ノ誤
慶會樓、正德宮ノ誤



昌德宮



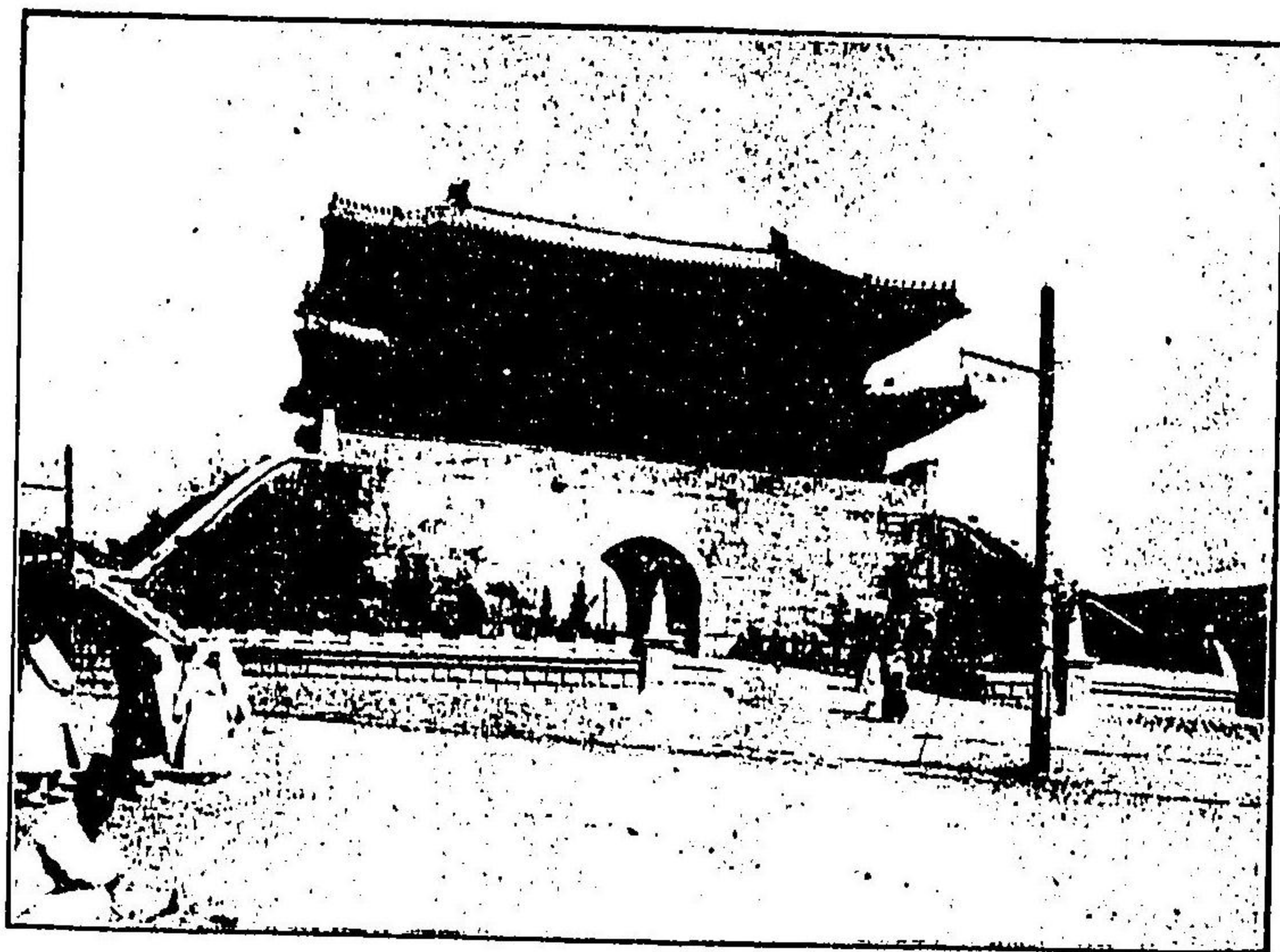
慶會樓



景 全 港 川 仁

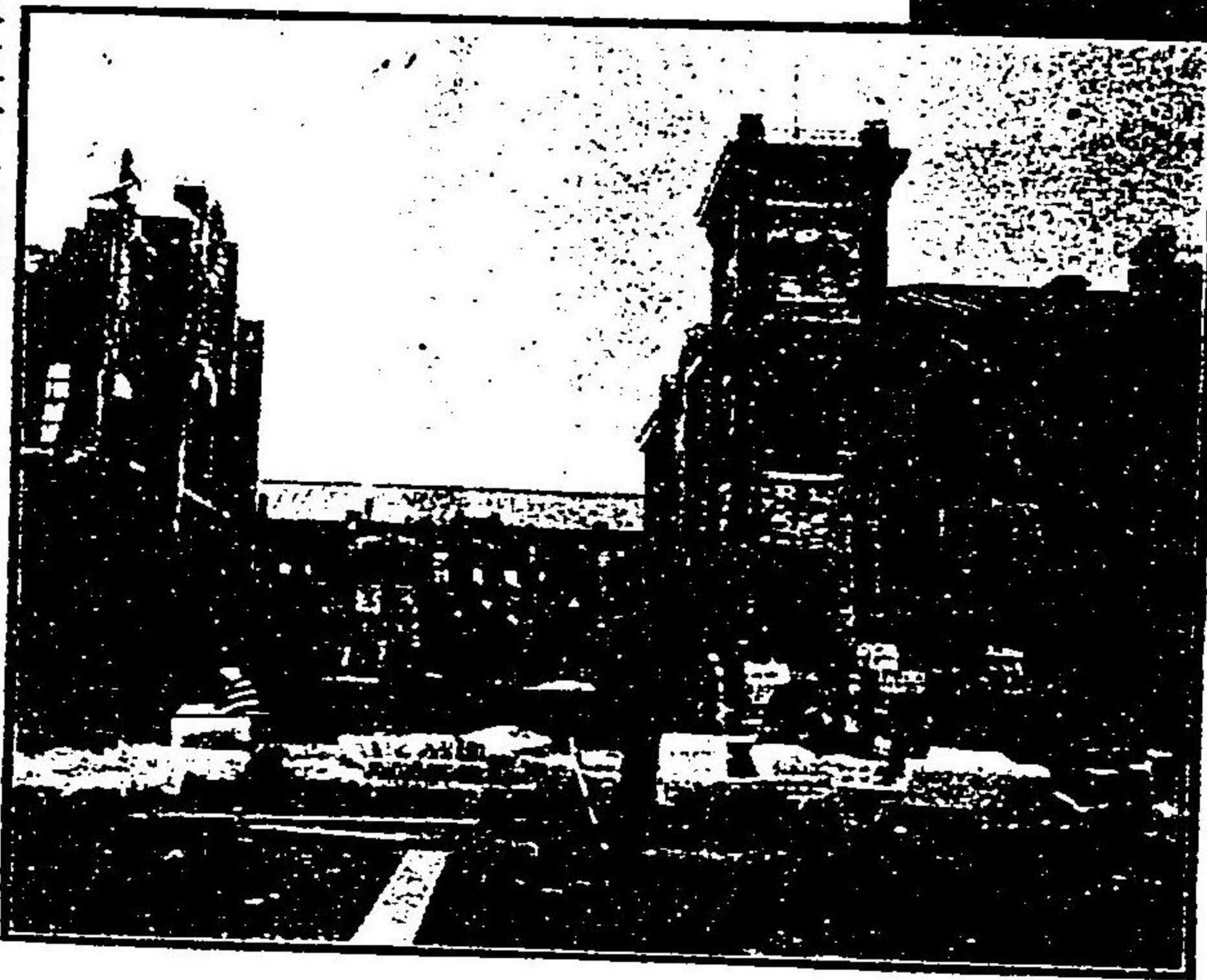


龍山 朝鮮駐劄軍司令部

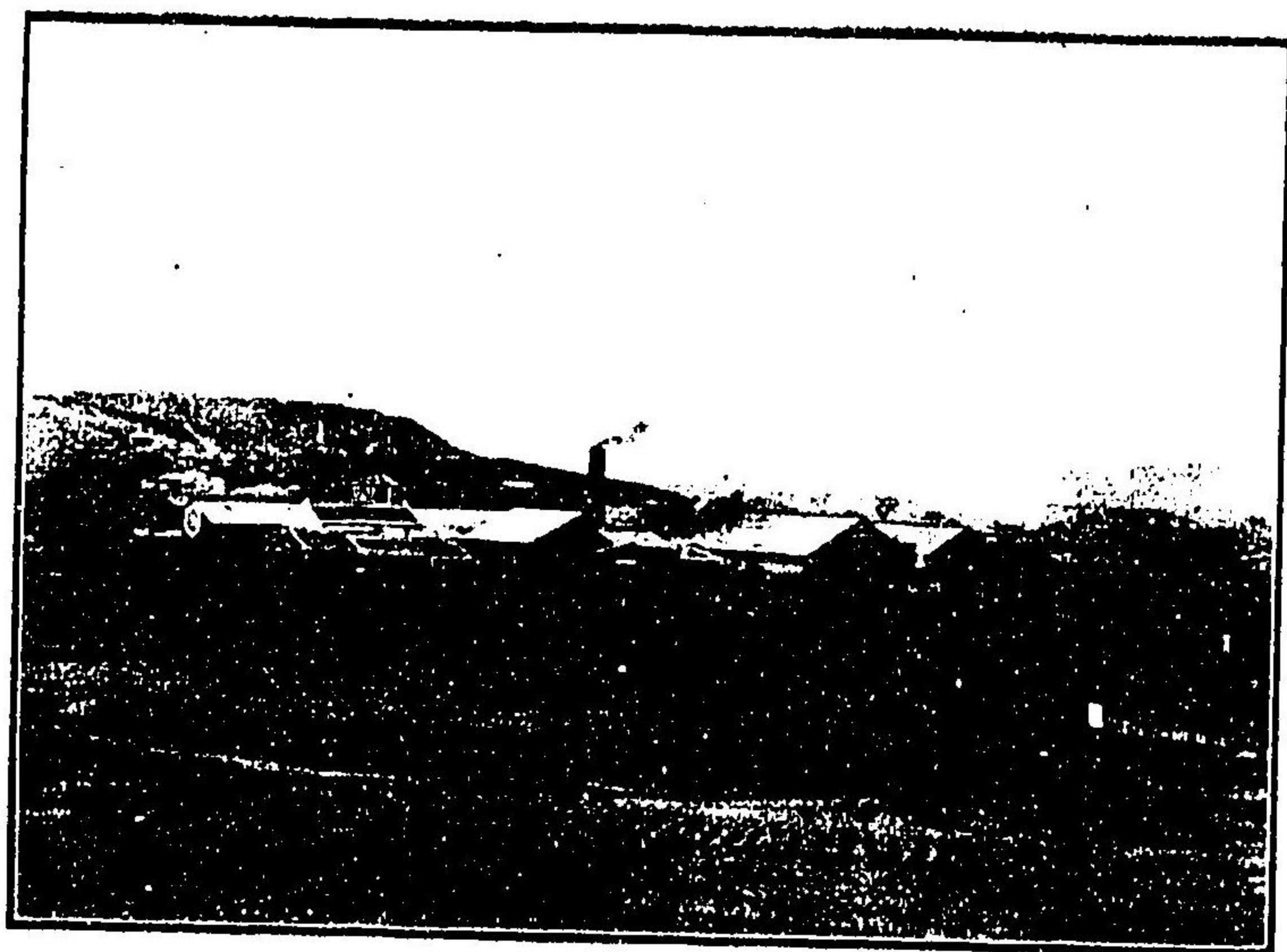


京城南門

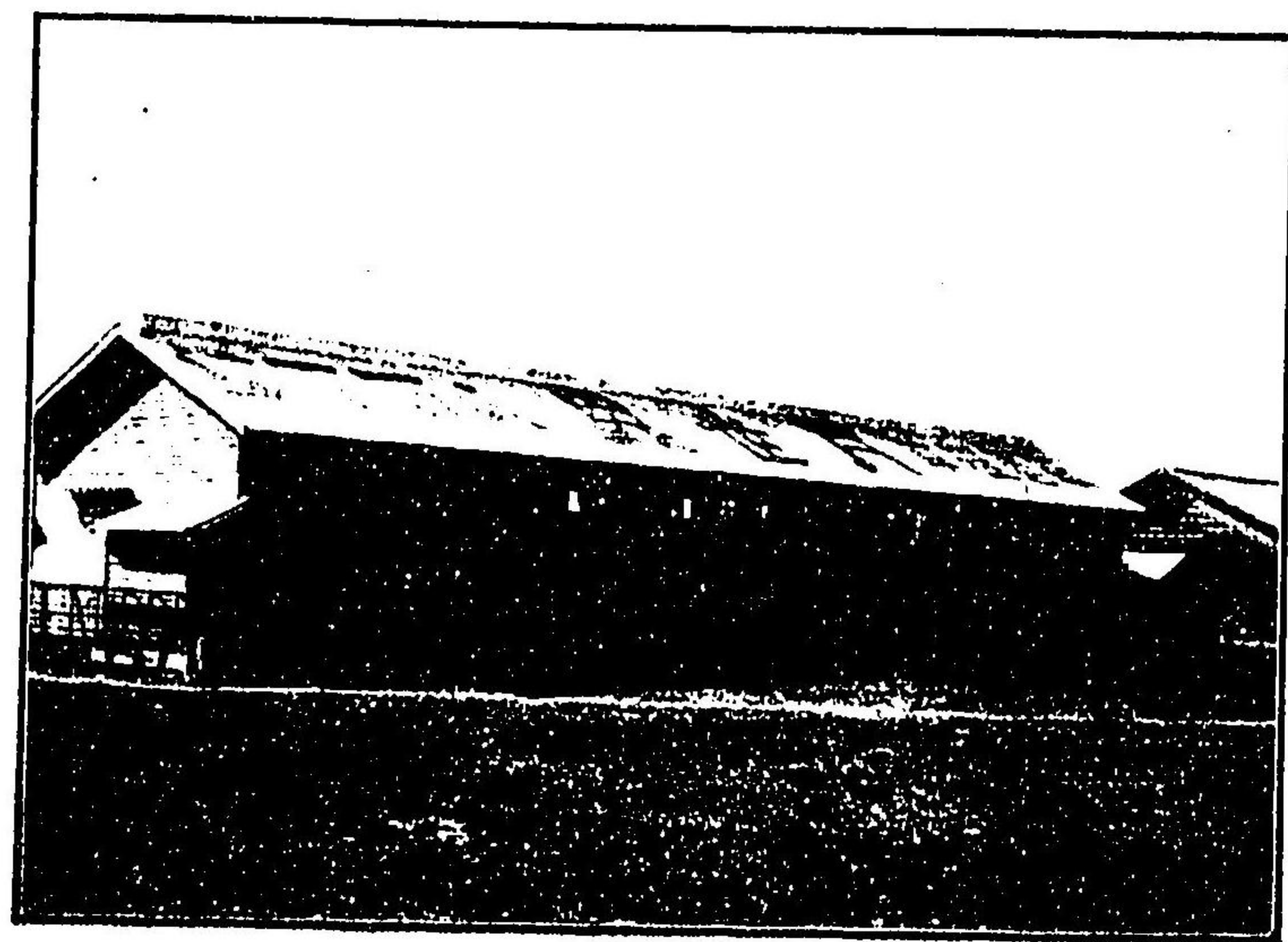
東亞會社正門内ヨリ工場ヲ望ム



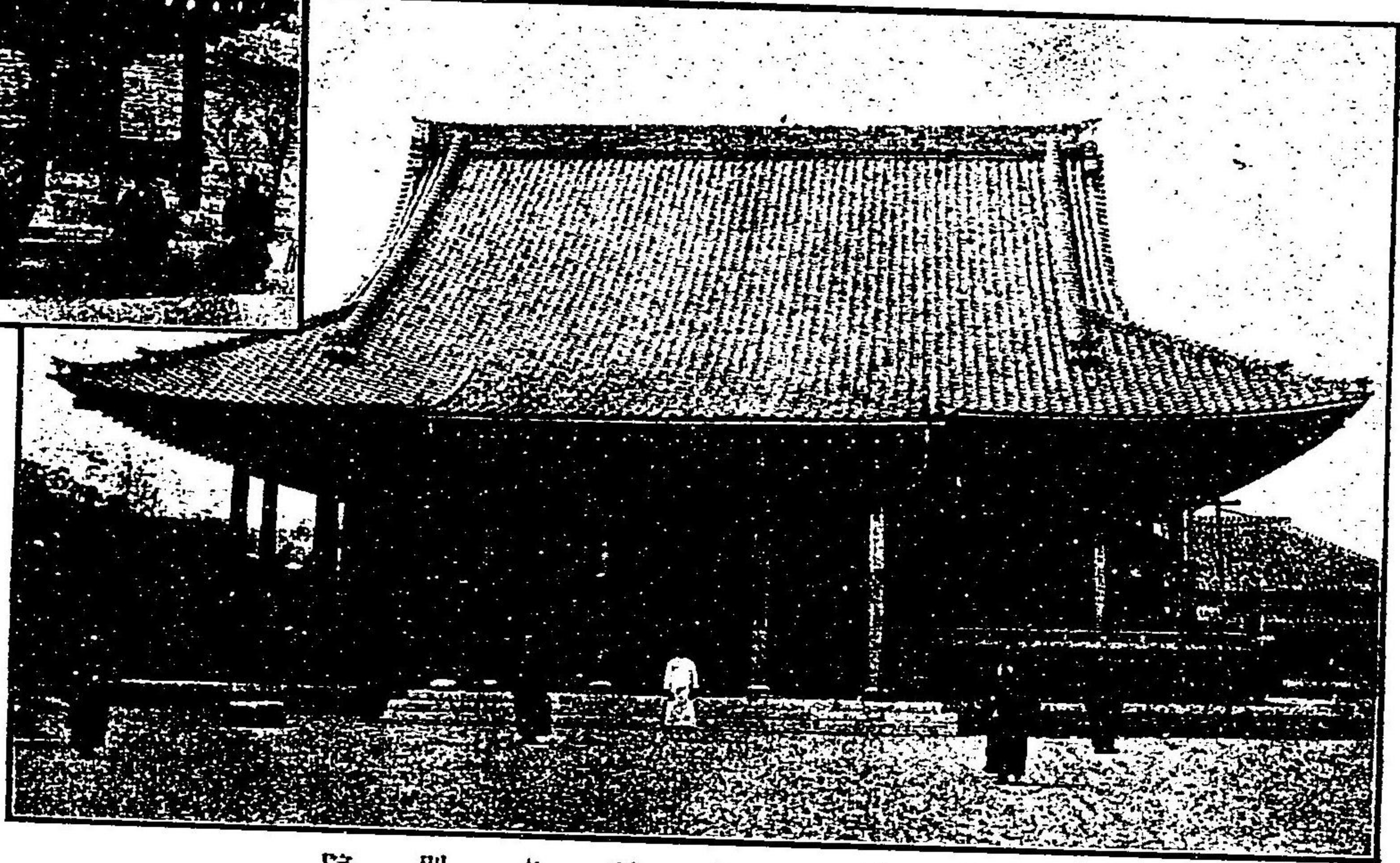
東亞煙草株式會社總販賣所



仁川港 日本醬油株式會社



大邱 大石商會煙草工場



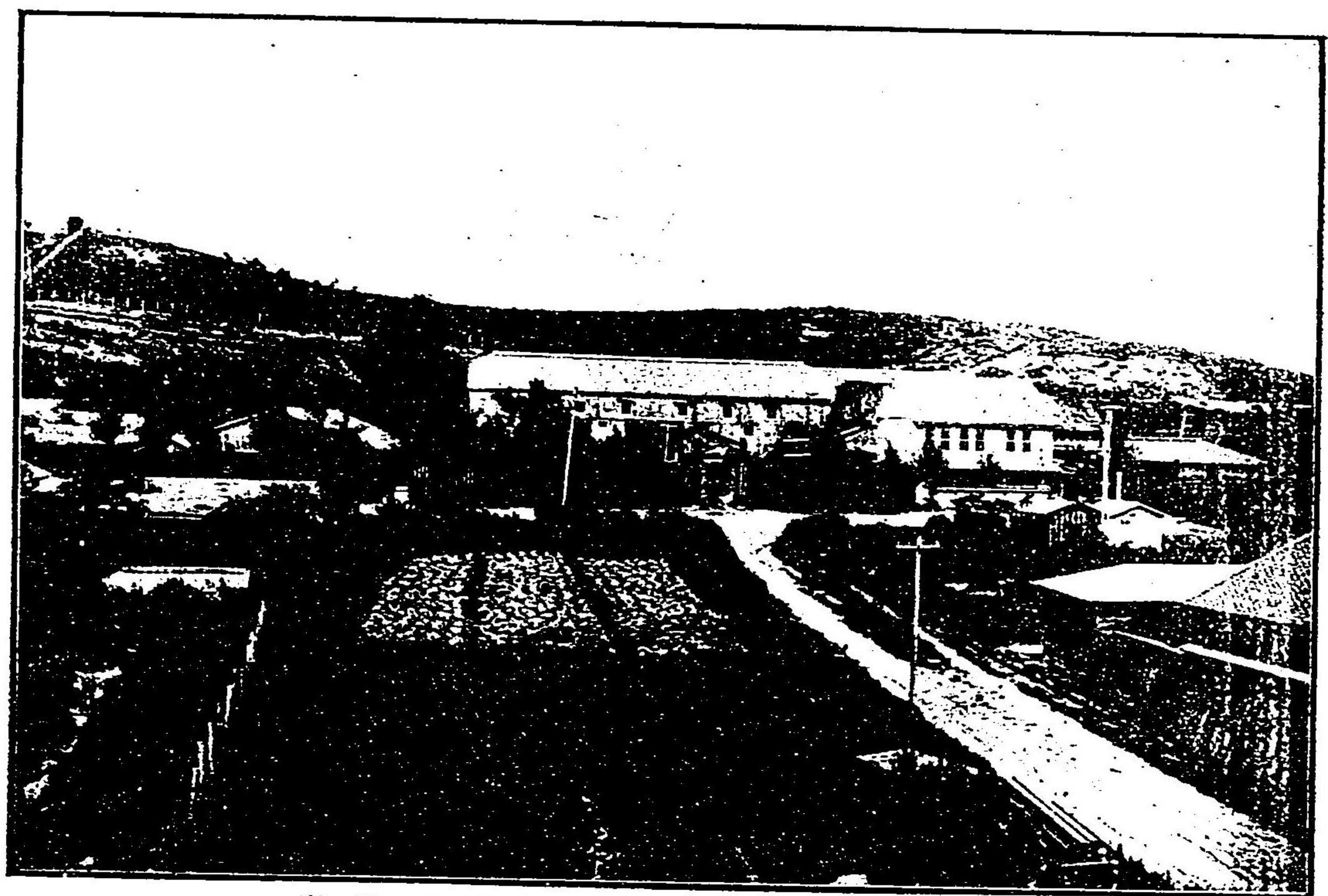
京 城 本 願 寺 別 院



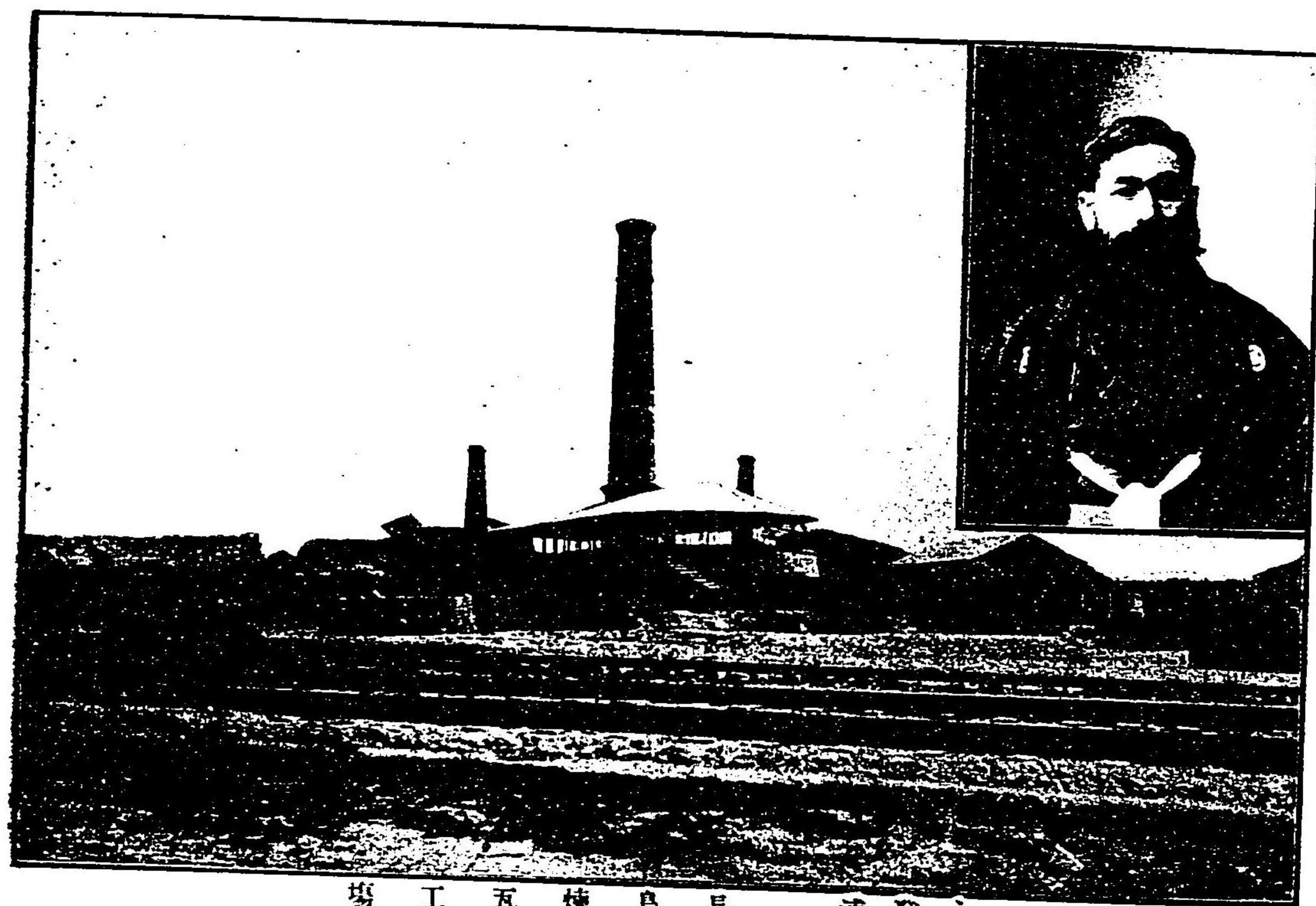
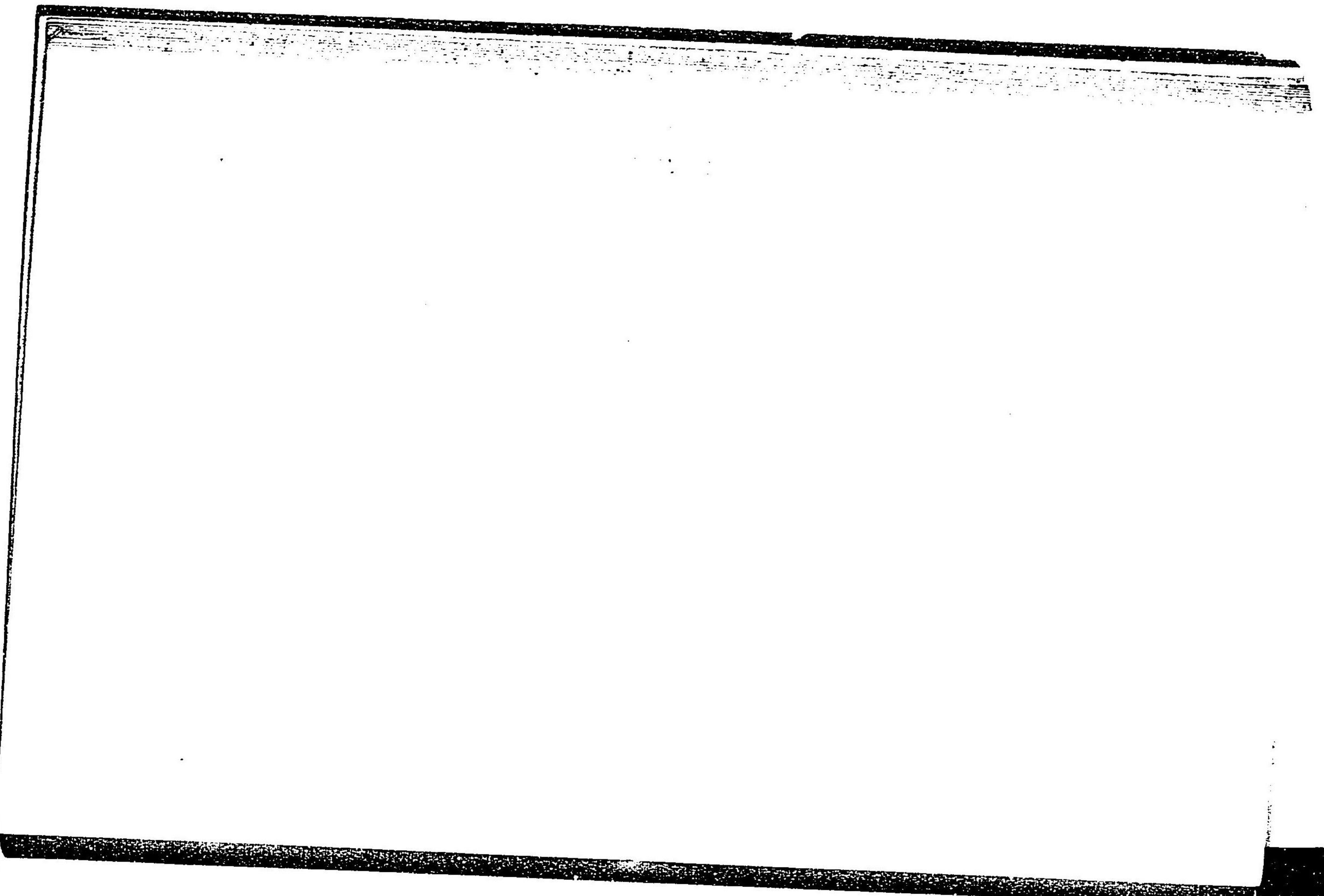
龍山龍寺武田之和大和塔



京城寫真館 京城南門大通

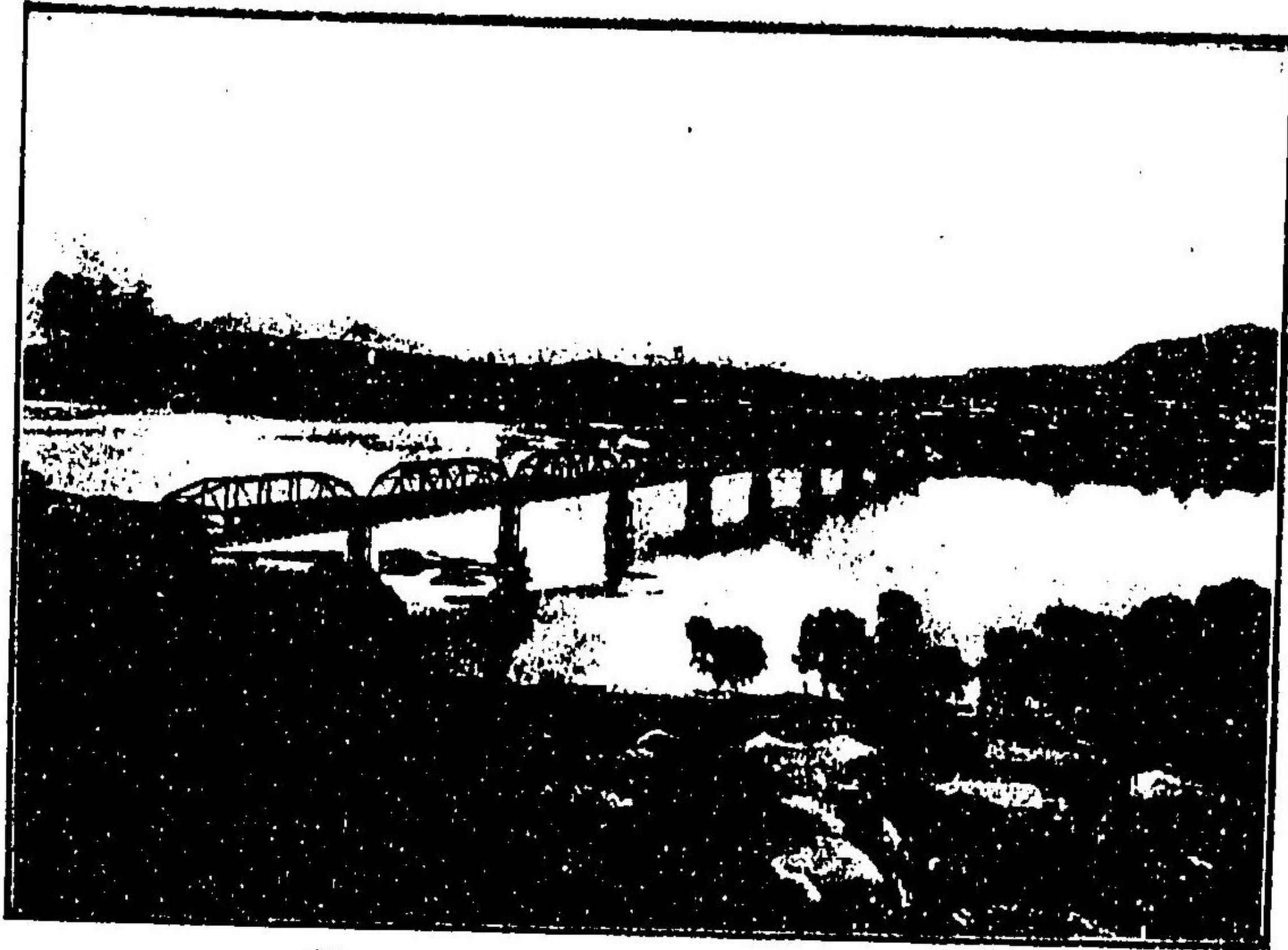


仁川住宅會社支店酒店造場



工場主 長嶋綱吉氏

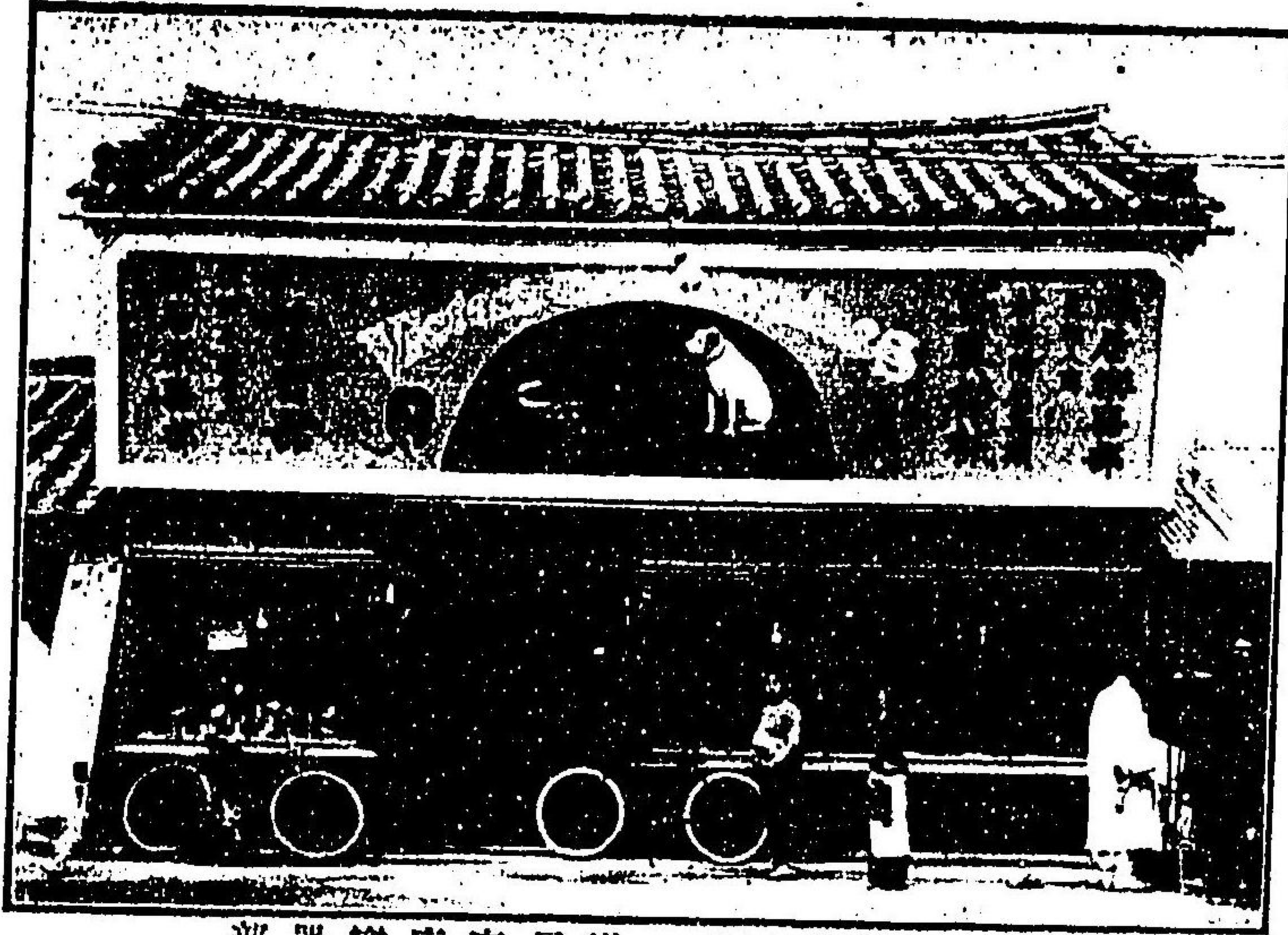
永登浦 長島煉瓦工場



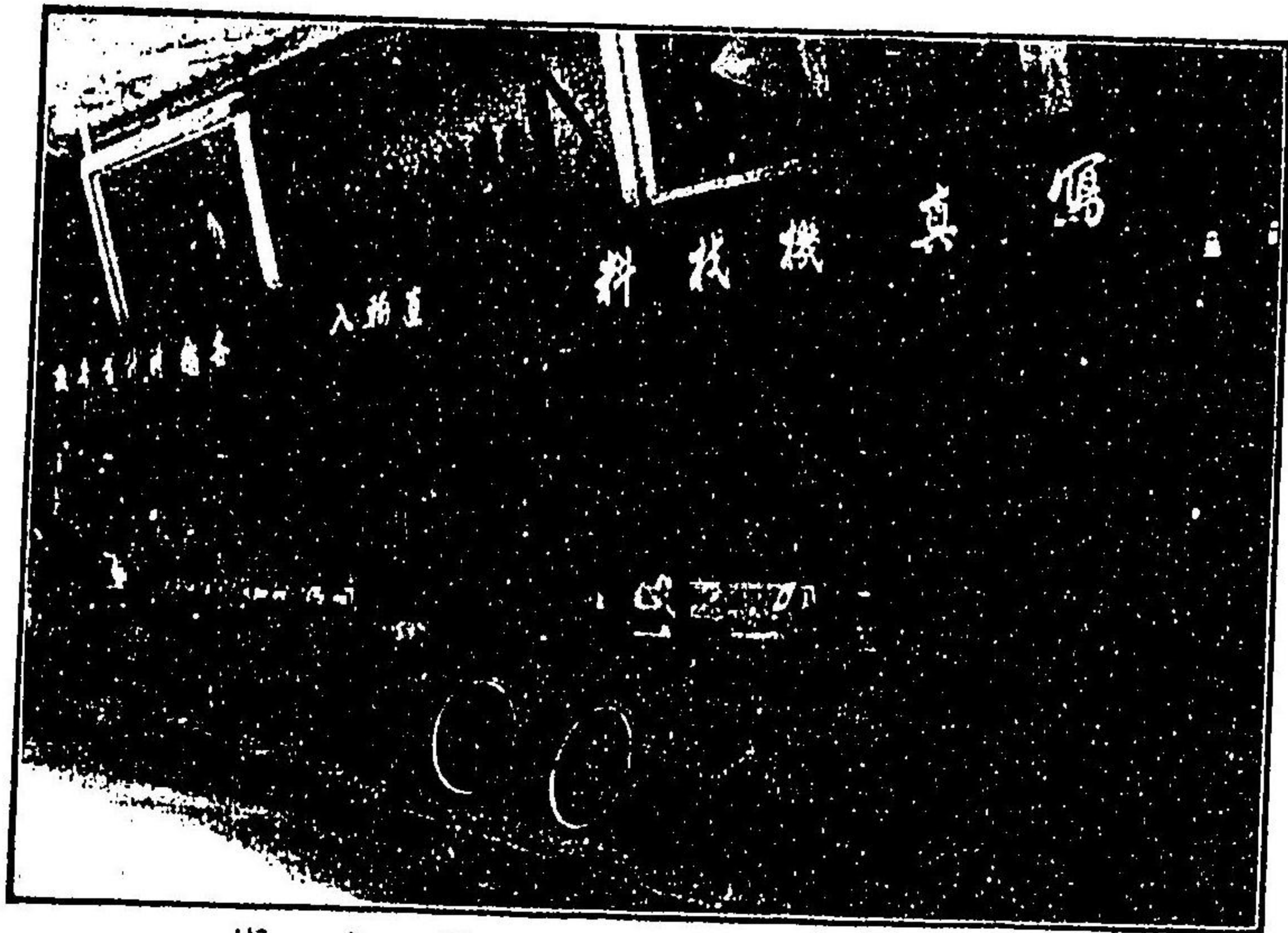
橋 鐵 江 浹 山 龍



所 道 製 早 煙 社 光 東 城 京



部器樂店商居織 目丁二通門大南城京



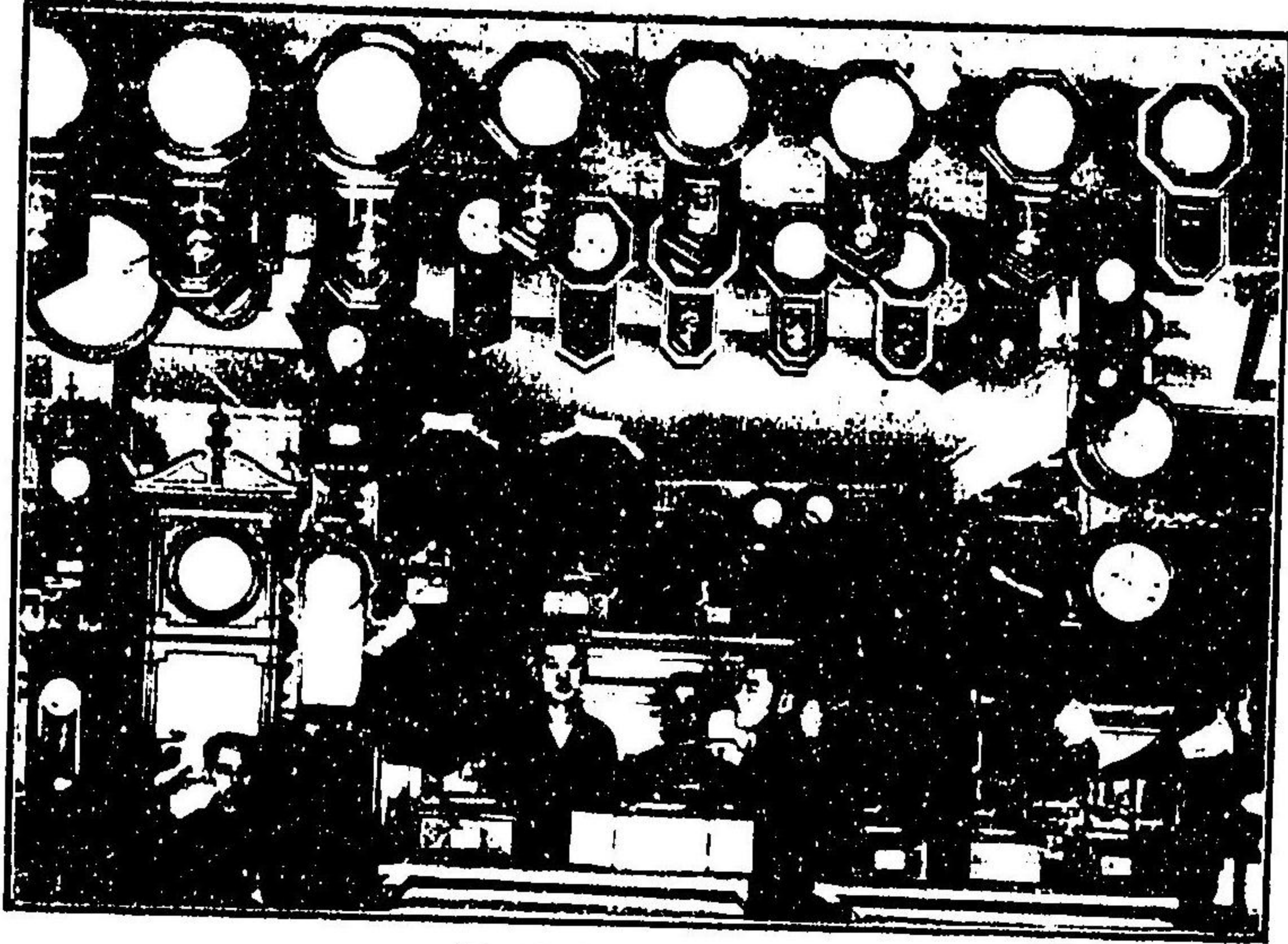
店本居織 目丁四町本城京



部車轉自店商居織 目丁二町本城京



部眞寫店本居織

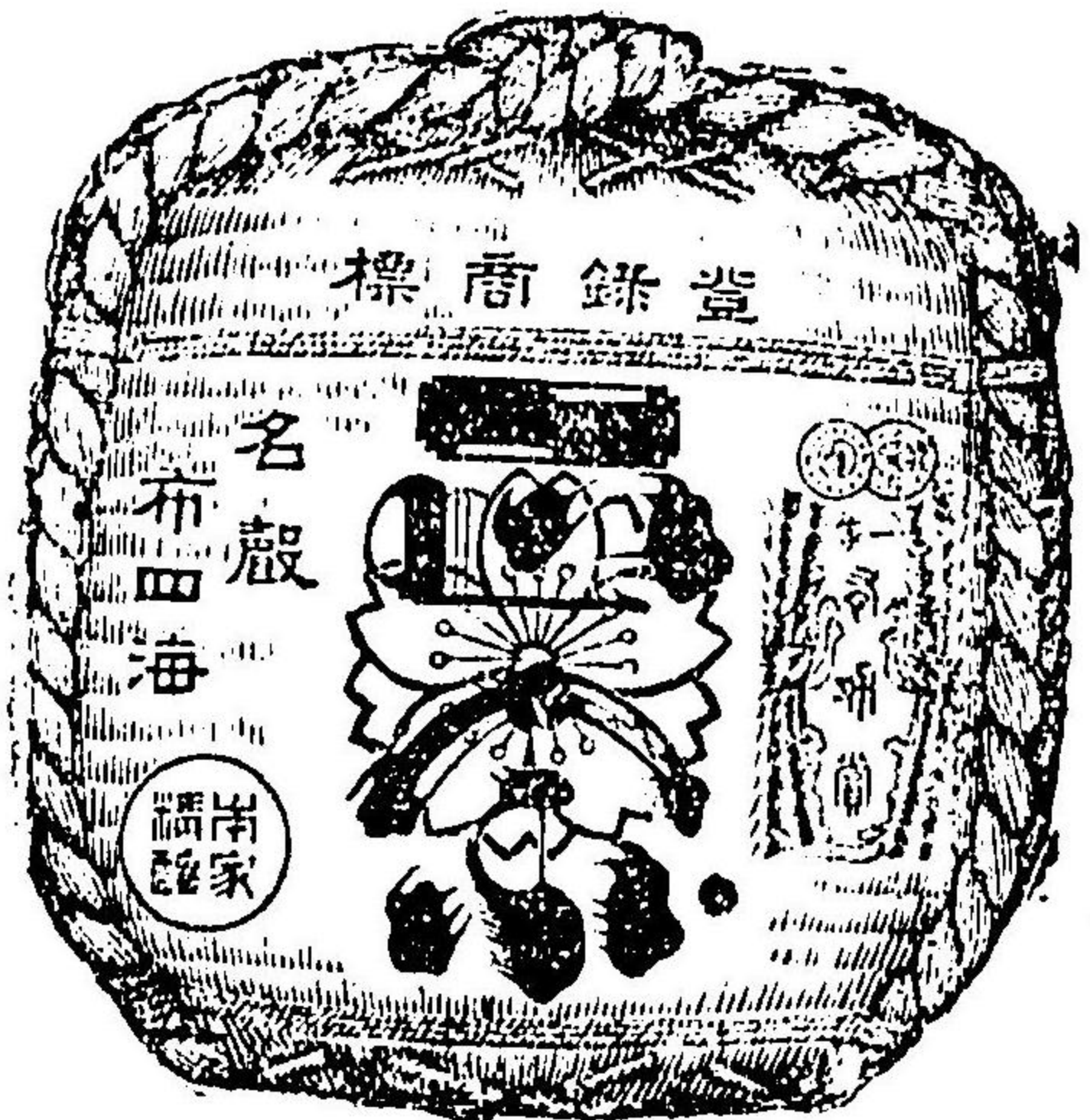


一ノ部賣小計時店本居織



二ノ部計時店本居織

醇良清酒



櫻正宗

支店

兵庫縣灘魚崎
釀造元

山邑太左衛門

電話御影七番
振替東京一五〇七七番
貯金大阪一三二二番

京城明治町一丁目

山邑京城支店

電話八四九番
振替京城七五番
貯金

釜山寺町二丁目

山邑釜山支店

電話三〇一番
振替京城三九一番
貯金

大阪市西區北堀江上通二丁目

山邑大阪支店

電話西四四〇番

歐米建築材料

營業

品目



マルソイドロールフィンゲ
 P & B 防 濕 建 築 用 紙
 P & B ア ス フ ア ル ト 、 フ ニ ル ト
 P & B ア ス フ ア ル ト
 P & B レ テ ー ル 、 フ イ ン グ
 S S バ ン コ ル 、 フ イ ン グ
 石 綿 セ メ ン ト 瓦
 濠洲製綱鐵打出天井
 英獨製リノリアム敷物
 自働窓框止、建築金物
 高新柄英佛製壁紙
 アイボリー石鹼
 クラフ化粧品朝鮮代理店

歐米建築材料及雜貨直輸出入商
 東京 藤原京支店

朝鮮東京支店
 電話一八〇九番
 町一丁目
 目五番地

支店
 大阪市北區堂島一丁目
 大田區長狭通四丁目
 神戶市北區勢町一丁目
 大田區長狭通九番地

牛乳の大王

朝鮮總督府醫院特定御用

乳業の元祖
創立明治三十年

平山牧場

電話一三三三番

京城大和町

營業種目

- ◎石炭各種
- ◎薪炭
- ◎コークス
- ◎セメント

京城長谷川町一丁目
朝鮮銀行裏門前

岡川商店

電話四七三番

諸建築(ペンキ塗)請負業
諸看板製造所

京城鐘路前白木麿四房

李貞根

恩給

年金五年分迄即時立替
利子一步二厘五毛後引
手數三步

京城御成町廿番戸

山口屋

日韓瓦斯電氣株式會社

東京本店

電話(東京)二九七三番

馬山支店

電話(馬山)二五三番

泥岨陳列所

電話(京城)二〇一番

電話(一八五二番)
六五九番 宿直用

龍山出張所

電話(龍山)六二七九番

發電所

電話(龍山)六六〇番

瓦斯製造所

電話(龍山)一一三番

龍山漢江通一丁目

(龍山鐵道官舎構内)

食料
雜貨商 中崎宇宙堂

電話五五二番

京城旭町二丁目
不二屋改メ

旅

金水館

電話長八二八番

館

京城北米倉町 (婦人病院向側)

注連内齒科醫院

院長從七位 注連内堅吉

(電話八二二番)

京東 生そば 鰻 井

物名 天ぷら 親子 井

出前は遠近を不問迅速御用命に應じ申
可く候間多少に不拘御注文之程希上候

京城本町一丁目裏通

天 金

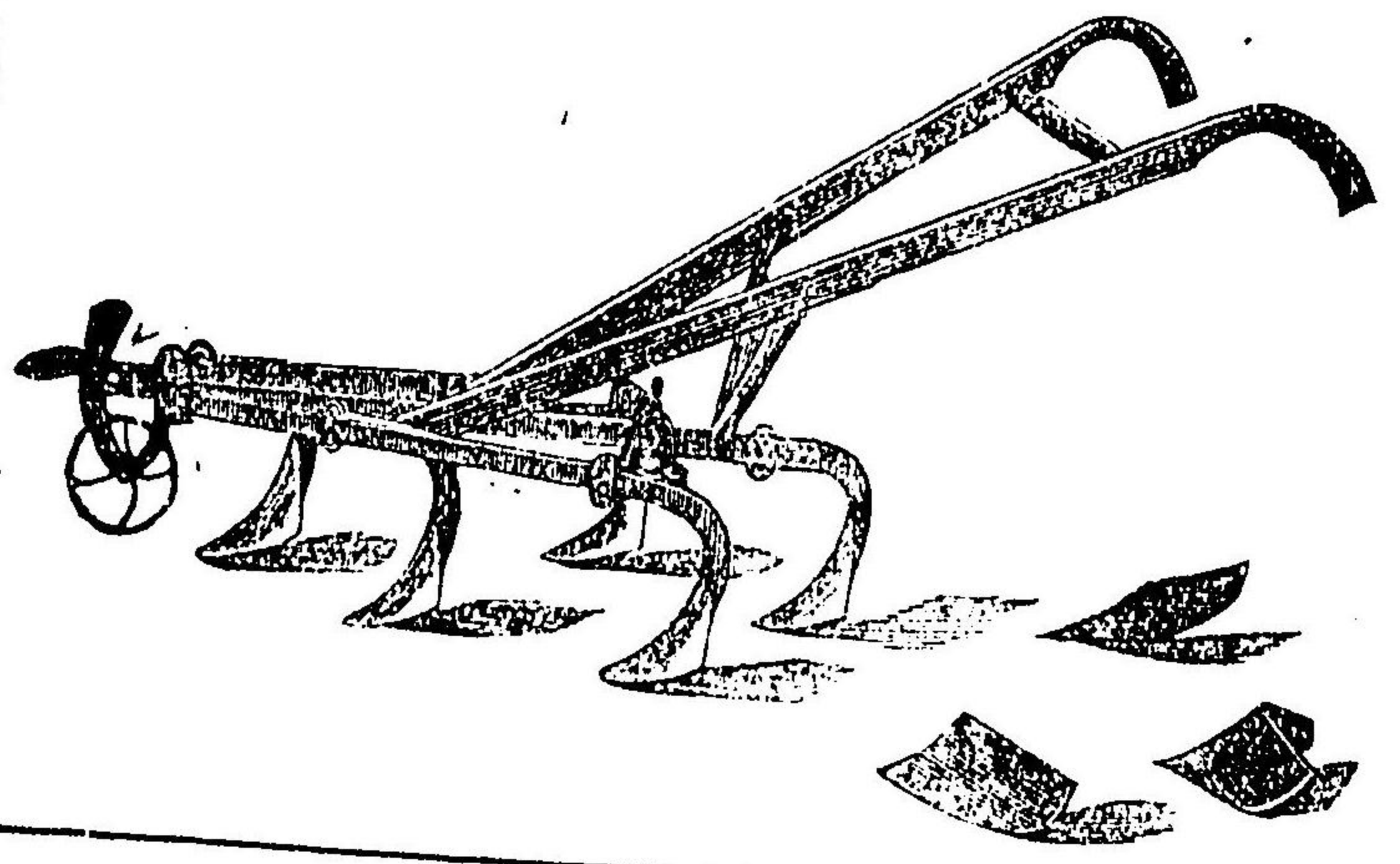
電話

內外農蠶具製作
 歐米農具直輸
 養蠶製糸器具機
 織器及附屬品
 純良種苗養成
 人造肥料各種
 農蠶教育標本類

朝鮮京城本町壹丁目六十五番戶
 三輪商會

戶田春藏

製作工場
 京城旭町二丁目
 十番戶



前八

完全なる解熱劑



東京 淺野樂天堂謹製

京城旭町一丁目

賣藥問屋 正丸正藥房

電話一四〇〇番
 振替口座 京城二四〇番

前九

醇良清酒



京城明治町一丁目

金露印清酒發賣元

大塚京城支店

長電話四〇一番
振替口座 京城五七〇番

大塚 三和 津 灘
吟 郎 三 和 塚
信用と其責任
清酒金露の品質優秀
卓越せるは年を逐う
て販路の益々擴張せ
るに依りて証明せら
れつゝあり

YOSHINO BROTHERS & Co BRANCHI SHIOP
入 輸 直 貨 雜 糧 食 諸 雜 物 乾 産 海



京城南大門通三丁目

吉野兄弟商會京城支店

食 雜 貨 部
委 托 部

電話番號 (七五七)
振替口座 (四六四)
電話番號 (三三九)
電信略語 (ヨシマ)

海陸物産	本店	廣島市天満町
委託問屋	支店	廣島市天満橋東詰
海外輸出商	分店	廣島市青物市場

婦人小間物並ニ有名化粧品一式
 組紐類糸物類一式
 メリヤス肌衣並ニ附屬品一式
 文房具品其他雜貨類

東京寺田製 朝鮮京城本町壹丁目

鬼印コール天足袋

特約販賣店

山本繁治郎商店

電話二〇二五番

營業品目
 石炭各種
 平壤無煙炭
 平壤無煙練炭
 コールクス

京城西小門通

直輸入貿易商 西崎商店

電話七二七番

ユ マ リ サ ム ネ

清酒



優等

釀造元
兵庫縣灘

江井ヶ島酒造株式會社

朝鮮發賣元

京城南大門通二丁目

百合正宗京城支店

電話一五一五番

前十五

朝鮮土產

製造本舖

朝鮮土產種々



朝鮮土產一點張

京城本町三丁目

海市場本塵

電話二五〇番 || 振替四八番

前十四

當會ハ朝鮮ニ於ケル農蠶具商店ノ元祖ナリ
當會ハ朝鮮開發ノ急先驅

農蠶具ノ新レコードヲ作ル、當會ハ農蠶界
ノ霸王ト定評サル
當會ノ名聲ハ今ヤ全
道ニ達シ
知ラザル者無キニ
至レリ

諸官衙御用達
歐米農具直輸入
內外農蠶具製作
肥料種苗各種

三輪商會

京城本町一丁目六十五番戸

戸田春藏

電話 三八六番
振替 三七五番

京仁通覽

目次

京畿道位置面積人口	一
京畿道沿革	一
京城府の位置	四
府勢	六
京城の要害	六
京城の沿革	七
京城に於ける内地人發展小史	一一
昌慶宮	二四
昌德宮	二五
李成桂の漢陽遷都及景福宮の造營	二七

大院君の景福宮大工事	二
景福宮の結構	三〇
景致に富める慶會樓	三五
慶熙宮	三六
慶運宮	三八
倭城臺	三九

名所古蹟

萬壽山仙鶴洞の綠泉亭	四二
南山の燧燧	四五
漢陽公園	四六
老人亭	四七
獎忠壇	四九
大理石塔婆	五〇
龜碑	五二

龜碑	五五
博物館	五六
鐘路普信閣の梵鐘	五七
萬歲門	六〇
崇禮門	六〇
南關帝廟	六一
東關帝廟	六四
北關帝廟	六四
文廟	六八
文廟の制度	七一
天然亭	七二
獨立門及獨立館	七五
梨泰院	七六

僧伽寺

六
一〇八

龍山之部

位置及び地勢

人口

沿革

交通

麻浦

孔德里の大院君舊陵

萬里蒼孝昌園

江山亭

揚花津

西湖

土亭里

一〇八
一一一
一一一
一一一
一一二
一一二
一一三
一一三
一一四
一一四
一一五
一一五
一一五
一一六

漢江 …… 一一六
銅雀津及龍津 …… 一一九

永登浦之部

永登浦一班 …… 一二一

三幕寺 …… 一二二

虎伏寺 …… 一二三

放鶴寺 …… 一二三

舊把撥里の陵墓 …… 一二三

鷺梁津之部

鷺梁津一班 …… 一二四

月波亭 …… 一二四

南漢山 …… 一二四

鷲江書院

感節書院

仁川之部

位置	………	一二五
地勢	………	一二七
人口	………	一二七
沿革	………	一二八
開港の起源	………	一二九
明治十五年の變	………	一三一
明治十七年の變亂	………	一三一
日露戰役に於ける仁川沖の海戰	………	一三三
日露戰役後の發展と消長	………	一三六
仁川港最近十箇年貿易額對照表	………	一三七

東宮殿下の御渡韓

日本公園

各國公園

月尾島

花房水

文學山

桃山公園

觀測所

江華島之部

江華島一班	………	一四五
永宗島	………	一四六
江華島の役	………	一四七
江華邑	………	一四七

傳燈寺	……	一四七
塹城壇	……	……
高麗山	……	一四八
積石寺	……	一四八
文珠城	……	一四九
巡撫中軍梁憲誅碑	……	一四九
忠臣名士古戰場	……	一五〇

附 錄

日、韓、清、西曆年代對照	……	一五一
李朝系譜	……	一五二
總督府道行政區劃	……	一五四

朝鮮布教の沿革

大谷派本願寺布教沿革	……	一五七
本派本願寺布教沿革	……	一六一
曹洞宗兩本山別院	……	一六五
曹洞宗青坡山瑞龍寺	……	一七〇
日蓮宗布教沿革	……	一七二
眞言宗布教沿革	……	一七三
臨濟宗布教沿革	……	一七三
天理教布教現情	……	一七四
金光教布教沿革	……	一七七
京城諸官衙學校	……	一七九
神社佛閣教會	……	一八一
銀行會社	……	一八二
新聞通信雜誌	……	一八四

京城著名醫院商店及旅館	………	一八五
龍山諸官衙	………	一九〇
學校及寺院	………	一九一
諸會社及著名商店	………	一九二
仁川諸官衙	………	一九三
神社寺院及學校	………	一九三
銀行會社	………	一九四
仁川著名醫院及商店	………	一九四

目次終

京城之部

京畿道位置、面積、人口

京畿道は一は畿内と稱し全半島の中央に位し東は江原道に接し南は忠清道に隣り北は黃海道に連り西は黃海に臨あり而して面積七百六十五方里を有し人口は内地人口數一萬七千六百六十三戸人口五萬九千八百四十三人にして鮮人の戸數二十九萬六千五百四十戸人口百四十一萬六千六百六十六人なり本道は田野に富ます物産豐富ならずと雖も從來王都(現今鮮朝總督府ありて本國政治の中心地たり)の所在地たるを以て政治文學其他百様の集點となり文明の中心となりて朝鮮全國に於ける勢力の本源地たるを以て四隣の產物多く此地に集し又分配せるのみならず運輸交通の便十三道中の一冠たり。

京畿道沿革

本道は本、朝鮮(往古馬韓の域)の地たり漢朝鮮を滅して四郡を置くに及び本道の一

部は樂浪郡に隸屬し後ち其南界は百濟の領域となり北漢城、漢山城、彌那忽の三郡を置きしが其の後高句麗新羅之を分領し高句麗は南平壤城外五十四州、府、郡、縣を設け新羅は漢陽郡外五十三州の府、郡、縣を置きたるも新羅四方を討伐し統一するに及びて漢州を置く高麗成宗王の時（一條天皇長徳元年乙未）皇都を改め開城府と稱し赤縣六畿縣七を管轄し又境内を十道に分ち楊州、廣州等の地を關内道に隸屬したるも顯宗の時（三條天皇の時）京畿と稱し開城府を罷め貞州、徳水、江陰三縣を以て開城縣に屬し松林、臨津、兎山、臨江、積城、坡平、麻田を長端縣に屬し尙書都省に直隸して之を京畿と謂ひ其後再び開城縣を開城府と改稱したりしが忠肅王の時楊廣道と改め恭讓王に至り京畿左右道に分てり李朝太祖李成桂は漢陽（京城）に都し左右道の名を襲ぎしが太宗十三年（稱光天皇應永二十年）四方の遠近を斟酌し忠清道の驪興、安城、陽智、陽成、陰竹及江原道の加平を本道の隸屬として京畿となし觀察使營を京城の西敦義門外に置き府、牧、郡、縣を分置す、而して其管轄は左の一府、三牧、十都護府、九郡、十三縣とす

廣州、驪州、利川、楊根、砥平、陰竹、陽智、竹山、果川、
 水原、富平、南陽、仁川、安山、安城、振威、陽川、龍仁、
 金浦、衿川、陽城、通津、楊州、坡州、高陽、永平、抱川、
 積城、交河、加平、長湍、豊徳、朔寧、麻田、漣川、喬桐、

又開城江華の二都を設けしが後ち廣州、水原及春川を府となして五都を置き留守官を置く、大君王三十二年に京畿觀察使を改めて漢城府、仁川府、開城府の各觀察使を置き其翌年に之を罷め漢城府を京畿觀察道の管轄外とし別に京畿觀察道を水原に置き左の四府三十四郡を管せり

廣州、開城、江華、水原、驪州、楊州、長湍、通津、坡州、
 仁川、利川、富平、南陽、豊徳、抱川、竹山、楊根、安山、
 朔寧、安城、高陽、金浦、永平、麻田、交河、加平、龍仁、
 陰竹、振威、陽川、始興、砥平、積城、果川、漣川、陽智、
 陽城、喬桐、

光武十年(明治二十九年)九月江華、廣州、開城の三府を廢して郡と改め隆熙二年(明治四十一年)九月楊根、砥平の二郡を廢して陽平郡を置く明治四十三年(隆熙四年)十月漢城府を京城府と改め京畿道の管轄とし全年日韓合併に際し道廳を水原より京城に移し二府三十六郡とすること左の如し

京城府、	仁川府、	楊州郡、	水原郡、	廣州郡、	開城郡、	楊平郡、
江華郡、	驪州郡、	長湍郡、	南陽郡、	龍仁郡、	坡州郡、	利川郡、
豐德郡、	抱川郡、	竹山郡、	安山郡、	朔寧郡、	安城郡、	高陽郡、
加平郡、	通津郡、	富平郡、	金浦郡、	永平郡、	麻田郡、	交河郡、
陰竹郡、	振威郡、	始興郡、	積城郡、	果川郡、	漣川郡、	陽智郡、
陽城郡、	陽川郡、	喬桐郡、				

京城府の位置

京城は從來李朝年來の中央政府の所在地にして半島の中央に位せり古昔支那より觀測して北極高三十七度二十九分十秒と定めたるが其後諸天文學者の觀測にあり北緯

三十七度三十五分と確定す(英國グリーンウッチ東經百二十七度四分にあり)其周圍五里余にして之を廻らすに城壁を以てし北に北漢山を負ひ南は木覓山を隔て、漢江を控ゆ山勢東西に奔り一は東大門を以て基点とし一は南大門に至りては盡く西に白蓮山仁王山、東に寶藏山、天鮮山の諸山ありて山河襟帶實に勝景の地たり府は東西三十丁余南北二十丁余周圍繞らすに延長八萬九千六百十尺高さ十尺乃至二十尺の石壁を以て八城門を設く城壁は太祖李成桂の築く所にして近時大院君之を修築したれども今は之が撤回せられし所渺ならず城壁に沿ひ四大門と四小門とあり曰く南大門(崇禮門)曰く東大門(興仁之門)曰く西大門(敦義門)曰く北門(彰義門)之を四大門とす其他東北に東小門(惠化門)東南に光熙門西南に照義門北西に肅清門之を四小門と云ふ就中四大門中最も壯大なるものを南大門と東大門とす崇禮、興仁の二門は高さ三十尺厚さ二十尺の石壁を以て築上げ鐵扉を設け以て之を閉ち上に二重の門樓を置き最も壯麗市街美を飾れり。

府勢

本府は京畿道の中央に位し西は楊州及高陽二郡を以て東北西の三方を圍み南方は漢江を隔てて廣州、果川、始興、の三郡に境界す府内山陵起伏し僅に漢江流域に於て平野を見るのみ而して鐵道線は京釜、京仁、京義、京元（一部開通）鐵道各線及び釜山羅州、義州、慶興、平安、安川、鎮南、保寧、江寧に通ずる九箇の街道は凡て府内京城を基点として各方面に通ずる交通機点を有す而して京釜、京義の兩鐵道は朝鮮南北兩端を連絡する交通幹線となり南釜山より關釜連絡船によれば七時間にして下關に達し北は鴨綠江の架橋今や既に完成したるを以て新義州より直に南滿鐵道に接續す電車は市の中央鐘路を集点とし東西南の三方に通ず。

京城の要害

京城の王都たるに適せるは漢江の水運あるを以てなり古來漢陽城の金城鐵壁と稱せらるゝの所以は漢江の天塹あるを以てなり漢江は朝鮮に於ける大河にして所謂五大

江の一（第四位に位す）なり洋々として漢城を環流し海に入る河水頗る清澄なり而して漢江は木覓山の山腰東南に盡くる所に屈曲して南より西に迂回し去り以て天然の外濠をなし而して外城及び北漢山は之が防禦線たり外城は仁王山の一峯より起りて漢北門に通じ小溪を渡りて北漢山城の西壁に連互す斯の如く要害の險を有するを以て五百有余年間戰亂の爲め國王は一時南漢、開城、江華島に避難潜幸せしと雖も猶ほ還都の事なかりしは實に自然の金城鐵壁をなせばなり。

京城沿革

京城は李朝歷代の王都たりし所にして從來別名を漢陽或は漢城と呼び其他皇城若くはソウル等の名稱ありソウルとは蓋し京都を稱する意義にして鮮語にてソウルと呼ぶ而してソウルとは新羅の徐羅伐より轉化したる言辭にして始め新羅の始祖、赫居世、斯盧の六村を總稱して徐羅伐と命名す此名稱は國名なれども其後四方征定し版圖を擴張したるを以て他の國名に改めたるにより徐羅伐は單に王都のみの名稱として存在し遂に京城てふ一種の普通詞に變化したるものなり又高句麗朝時代

に在つては南平壤と稱し高麗朝の時代に在つては木覓壤又は南京と稱したることありき。往昔高句麗王、高朱蒙の次子即ち百濟建國の始祖なる高濫稱初めて(垂仁天皇十二年)國號を十濟と稱し浹城慰禮城に都せり慰禮城は今の京城惠化門(東小門)外に在る城址の舊稱なり(異説によれば異禮城は今の忠清南道稷山郡なりとも云ふ)茲に於て四方近邑の民漸く來集し朝業繼に其の緒に就きしを以て國號を百濟と改稱したり然れども其境域東隣に樂浪を有し北は靺鞨に接せしを以て干才常に絶えず以て其後十三年を経て高濫稱諸臣と議し要害の都城擇びて是に據るべしとなし都を南漢山下に還したり即ち今の廣州古村にして河南慰禮城と稱せしもの是なりその後第三世近肖古王、漢山(南漢山)よりこゝに還都し第二十一世蓋鹵王に至り其五年春二月(成務天皇即位二年)北漢山城を築き宮闕を刱建したり即ち今の京城漢陽洞は其故址なり云ふ。

爾來一定の國都なく或は之を漢南に還し或は漢北に移せしか二百年を經過して二十一年に至り近肖古王立ち其二十六年に至り漢南より京城に移り茲に再び都城を建つる

に至れり蓋し是より先き百濟國勢衰へしを以て隣強之に乗し屢々侵畧せしを以て遂にその敗を避けて南に渡り頻りに國勢の挽回に力を注ぎ兵馬の充實を圖り漸次境域を廣め、こゝに東は新羅に對抗し北は高句麗を侵すに足るべき國力の充實を得しを以て舊都京城に飯遷せり辰斯王八年(仁德天皇八十年)高句麗王談德來襲して未だ京城を侵かざるに辰斯王、談德の軍強勢にして且つ用兵の頗る巧なるを聞き自ら懼れ郷北の諸部落を略取され文固王の南遷後、漢水の東北悉く高句麗に隸屬し後ち新羅第二十四世眞興王の十六年百濟威德王新羅、高句麗の疆界を定めんと欲し北漢山に巡幸し三角山の徳水河を割して封疆を定め十八年に京城を北漢山州となし北漢山州軍王を置きたり其後百六年を経て百濟義慈王の十九年(齊明天皇六年)新羅王、唐高宗の援助を以て百濟を亡ぼし尙ほ八年を過ぎ新羅勢して唐兵と共に高句麗を征服し爰に始めて新羅は三國統一の偉業を奏し朝鮮全國盡く新羅に隸屬するに至れり第三十五世景德王十五年(孝謙天皇天平寶字、丁酉元年)初めて漢陽郡と改稱したり而して新羅亡び高麗朝の初年楊州と改稱し第六世成宗王始めて十道を平定し十二州節

度使を置くに際し左神策郡と稱し海州と共に左右二輔たり第八世顯宗王の時安撫使に改め又知州事と爲し楊廣道に隸屬す第十五世肅宗王の元年(西曆一千九十九年)肅宗元年新羅の僧、朴道銑の密記に據り金謂禪なる者肅宗王に楊州木覓城に都城を造營し南京に遷都せんことを奏請したるを以て其六年に平昔事崖思諷、知奏事、尹瓘の兩人に命じて地を相せしめ其後命に依り開創都監(官名)を置き崔思諷、尹瓘及び御史大夫任懿をして其工役を監せしめ五年にして役を畢へ七年にして南京の地界を定め宮闕を創建し越へて二年工役竣す爰に於て恭愍王六年(後村上天皇正平十二年)李齊賢に命じて宮闕を重建したり蓋し是より先き仁宗六年に南京の宮闕回祿の災に罹り悉く燒燼せり是時適僧普遇なる者の讖説を信じ漢陽に王たらん者は李氏なりとし盛に李樹を植へ常に其嫩芽を剪て生長を妨げ王氣撲滅の呪となし亦時柳觀なる者の「漢陽之形勢、土地、道路、水路興_三松都_三相若、以民心觀之漢陽」建儀を容れたりと云ふ第二十五世烈王改めて漢陽府とし末世、恭讓王の時京畿左道に隸す後ち李朝太祖康獻王李成桂高麗朝を亡し(西曆一千三百九十二年松都に於て王位に即くに及

び其翌々年高麗朝舊都たる松都より此地に遷都したり之より先き遷都の義あるや忠清道公州郡鷄龍山下南方に地を相し箕都せんとしたるに參判柳觀の議を納れて之を中止し二年都を此に定め漢城府と改稱し第八世肅宗王の時に至り判府事を判尹と爲し明治二十九年更に府尹と改稱し明治四十三年八月日韓併合に及んで漢城府を京城府と改稱し府尹を置くこと舊の如く以て今日に及べり而して太皇帝(今の李大王)の時攝政大院君宮闕及城壁を修俊して大に其面目を一新したり(別項慶福宮の大工事を参照す可し)

京城に於ける内地人發展小史

京城は初めより各國人に對し雜居地として專管居留地の設けなく其起源は最初韓國が英國と條約を訂結するに當り城内雜居の權を得相尋て間もなく清國政府亦英韓條約に均霑し條約を訂結せり嗣で日本政府は明治九年に修好條規を訂結したり是より次第に他の諸外國も均霑條約を訂結するに至れり而して清國は其訂約順次に於てはその第二に位するも清韓兩國の關係は遠く李朝仁祖の十五年(我後光明天皇寬永十

四年、西曆一千六百三十七年）に於て其正朔を奉すべきを盟訂し清國は之を待つに屬國を以て遇したれば城内に清國人の居住するもの尠らず加之大國の威を藉りて城内處々に店舗を開きしも累弱の韓廷は之に對して毫も抗議を容るゝこと能はざりしかば我邦人の如きも之に倣ひ初めは城内各處に開店するものありしが獨り清國人を除くの外、他は都て城内の一隅に割據し自然に居留地の情態をなすに至れり而して本題に就而其沿革を逆れば其因や遠く近代の怪傑大院君に因りて明治八年九月所謂彼の江華島の變亂（我軍艦雲揚號砲擊事件）を醸し其結果翌九年陸軍中將兼參議黒田清隆を全權辦理大臣に議官井上馨を同副大臣として差遣し彼我の間に通商條約訂結せられ其修好を新にせるも吾が居留民としては釜山浦以外未だ一人の存在せるを見ず抑々京城に於ける日本公使館は今を去ること三十四年前即ち明治十三年始めて西大門外蓮池の邊り清水館に開設せられたれども其當時は館員の常住するものなく又人民の來り住するものなし當時は清國の勢力旺盛時代にして我公使の韓皇に謁見の如きも容易に行はれざりしなり而して内地人の京城に在住するに至りしは只十四年

に陸軍工兵中尉堀本禮造氏が韓國政府の陸軍教官として東大門内今の訓練院に在住するものありしのみ十五年に至り全權公使花房義質書記官、近藤眞鋤、同杉村濱、以下三十余名を隨而來城し西大門外清水館に旭日旗を翻せしが初めて京城日本人團の素因をなせり然るに七月二十三日に至り韓國の暴兵亂民等我公使館を襲ひしかば花房公使は館員二十八名と共に僅かに身を以て難を免がれ飯朝することを得たれども教官堀本中尉外十二名は遂に凶手の爲めに斃れたり然るに花房公使再び兵を率ひて入京し倭城臺下の李鍾承の邸を以て公使館となし茲に再び旭日旗は京城に輝きたり十五年の變亂後には來城せしものありと雖も殆んど軍隊の御用商人のみにして其數甚だ少かりき十六年二月に至り仁川の開港せらるゝや我が領事より入京票なる許可書を得て仁川より京城に入京する内地人漸く増加するに至れり十七年春校洞に公使館領事館の新築を起工さるゝや職工八十名入京したり然るに十七年十月四日に至り所謂十七年の變亂なるもの起り再び日本人團を掃蕩せられんたり當時韓國の暴兵亂民に清兵加擔し將に落成せんとせし我公使館を燒燼し茲に居留民三十余人は非

命に撲死したり此騒亂に我陸軍大尉磯林眞三外二名は南大門外に於て慘殺せられ飯島曹長外三名も亦難に斃れたりこの事變後我公使館は南山に移り十八年三月漢城の開市となり鑄洞(壽町)に我領事館の新設せらるゝや内地人の在住者は茲に居留民總代なるものを設け更に議員十名を選擧して總代の諮問機關たらしめ始めて公共事業を開始するに至れり時に内地人は十九戸八十九名にして重に領事館前通りを居住區域となせり之れより先き十八年一月井上馨全權大使として陸海軍を率ひて入京し韓廷に問罪の談判を開き京城條約なるものを訂結し同時に此條約によりて清國及び英國の締結せし條約と均しく京城に日本居留地を置くこととなり三度京城に日本人團を見るに至れり即ち現今の居留民團の基礎は實に此時に發せり當時清國の勢力頗る盛なりしかば清國居留民は常に我が居留民を壓迫し稍もすれば侮辱を加ふるにより内地人は一日たりとも自衛的武裝を解くことなかりき翌十九年は三十四戸百六十三名となり廿年には六十五戸二百四十五名を算し居住區域を擴大せられて泥岷(本町)に及べり當時京仁間の交通は水路仁川を發する者と一部は輻輳若くば牛馬の背に倚

りしか廿一年日韓兩國人の合同により漢江汽船の往來を開始するが爲め一會社を起したりしが此舉は頗る京仁間に歡迎せられたり亦同年中に内地人が陸運業を創始して書狀の往復を引受け廿一年には領事館構内に仁川郵便局出張所を開始するに至り一般通信に多大の利便を享けたるも尙ほ未だ電報の取扱を爲すに至らず而已ならず日本仁川間の航路は僅に三週一回に過ぎざりき而して在住内地人は廿年六月を以て始めて京城居留民規則を制定し領事の認可を得茲に執行機關たる總代議員居留民會を設け議員選舉の制を創定し且つ全年二月二十三日商業會議所を創立したり當時吾が居留民は公使館又は領事館の保護力極めて微弱なりし爲め商業上常に清韓人の爲めに壓迫を蒙り紛争鬭議間斷なく遂には前途を悲觀して撤退するもの頻々續出するに至れり此時に方り商業會議所は奮然蹶起して時の公使及領事に迫りて相當の安寧保護を要請し一面朝鮮政府及清國公使、領事に直接交渉談判を開始し以て稍々從來の侮蔑迫害を減少するを得たり爾來二十有餘年間商工業に關する事件は勿論苟しくも國權の伸張に付き或は建議し或は請願し或は調査研究して居留民發展の進歩改

善に貢献したる功勞尠からず其翌二十一年には戸數八十六戸人口三百四十人となり漸く不完備ながらも子弟の教育事業を開始せり二十三年には公共事務の増加と共に事務所の擴張を要し新に鑛洞に總代役場を築造し商業會議所との連合事務所に充つ而して規則を改正して議員定數を十五名とせり亦た會議所は二十五年京元間の交通頗る不便なるを以て(當時一回の通信も尙ほ數十日を要したり)毎月二回若くは三回の飛脚便開始を決議實行し大に相互の便益を得たり翌二十六年には當時我が領事館巡查は僅かに八名に過ぎざるのみならず清韓人の迫害甚しく到底保護の實を擧ぐる能はざりし爲めに三月二十五日會頭(和田常市)の名義を以て時の外務大臣陸奥宗光に對し増派を建議せしが此議採用せられて大に居留民發達を援助したり其後二十八年日清戰爭の結果は俄然日清兩國の位置を全く顛倒し我國威の發揚と共に居留民も急激の勢を以て増加し内地人の商權は忽ち擴大して殆んど市場を獨占するの狀勢を示し開戦前迄は僅かに二百五十六戸八百四十九名に過ぎざりしが二十八年には一躍四百九十六戸一千八百三十九名の多數を示すに至れり其居住區域は愈々擴張して南

大門通りに我商人の店舖を見るに至れり然るに全年十月閔妃殂落の事件起り朝鮮政府の中心常に動搖し翌年二月時の金宏集内閣の顛覆と共に皇帝露國公使館に移るに至り此虛に乗して露國の勢力は洪流叟河の勢を以て侵入し茲に形勢一變して内地人の各地方に扶殖したる商權は蕩然地を拂つて去りぬ之れが爲めに將に一瀉千里の勢を以て膨脹發展せんとせし我が居留民は戰捷の余光に浴する間もなく又々奈落の底に沈論するの不幸に際會せりと雖大勢は既に動かすべからずして内地人の地盤は漸く鞏固となれり此年更に居留民規則の改正増補を行ひ以て居留民増加に伴ふ必要に處せり是より先き三十年本町一丁目(現郵便局所在地に二階建事務所を新築す)三拾四年居留民總代役場を日本居留民役所と改稱し居留民總代を居留民長と改め三十六年に及び從來殆んど交替的に選出就任せる居留民長にては完全の事務の發展を期す可らざるを以て民長の資格に關する規則の一部を改正し特に有給の專任民長を置き以て其進捗と統一を圖れり而して日清戰役の半よりは内地京城間の電報も公衆のためを開始したり三十年商業會議所は此の年鷄林獎業團の有利事業なるを認め當局の保

護を求め大成を期せしめん爲め時の内閣總理大臣松方正義並に外務大臣大隈重信の両相に陳情書を提出して其功を奏せり同年又各居留地と元山港及日本間電信は朝鮮政府の京元線と連絡せず其不便多大なるを以て極力運動の結果遂に其目的を貫徹したり又三十一年には京釜鐵道敷設委員を撰定し以て東京に於ける發起人側との連絡を保ち大に便益を供給せり且つ同年十二月十九日京城平壤間の郵便開始を建議して其實効を見るに至れり是より先き二十九年中米國人ゼームスアールモールス氏の掌中にありし京仁鐵道は三十一年十一月外務大臣大隈重信の斡旋に依りて我に買取せられ三十三年十月全線の開通を見るに至れり三十二年朝鮮政府の白銅貨鑄造盛んにして李客翊の如きは日本貨幣三萬七八千圓あれば二十餘萬圓を鑄造し得べしとし盛んに濫鑄に力めしかば爲に頓に相場劇降を促がし且つ海關は白銅貨徵收を禁止し貿易上及經濟上多大の影響を蒙りしかば同年九月二十三日決議して委員を設定し貨幣制度の確立及濫造停止の件及關稅徵收改正の件を朝鮮政府に建議し或は公使、領事に陳談して成効したり尙京仁鐵道は三十三年七月に至りたれば郵便物を登載する

能はず一面兩者の商業的關係は倍々頻繁なるより夜間郵便の開運を請願しこれ亦實行を見るに至れり三十三年には朝鮮渡航手續の甚だ嚴重にして其煩累なるに顧み之を容易ならしむる爲め陳情する處ありて其目的を達せり且つ同年癸に建議せし京釜鐵道敷設容易に決せざるを慨し二月一日付を以て速成の請願書を提出し（我政府は第十四議會に於て京釜鐵道速成建議案が貴衆兩院を通過せる法律及勅令を全年九月八日公布せり）該線實測の運びを見るに到れり又同年五月京仁鐵道開通せしも貨物運送頗る高率にして商業上其便宜を享有する能はず因て之か引下方を交渉し其目的を奏せり三十四年防穀令出つ直ちに廢止運動を決議をなし甚大の影響を蒙らずして已みたり同年一時寛大となれる渡航取締規則は再び嚴重せられ通商上阻害甚しきを以て特別法設定を請願し其効空しからずその結果遂に旅券の必要なきに至れり三十六年韓國政府は突如として第一銀行券通用禁止の告示を爲したりしが商業會議所は其の極力非違を難詰し陳情の結果遂に其告示取消を爲さしめたり全年尙未だ依然として白貨銅の濫造止まず經濟界を攪亂せるを以て再び建議書を提出せり同年對釜間

海底電線は架設后二十余年を經過し線條打腐の爲通信上故障多きを以て在韓各商業會議所と協議の上政府が速に大北電信會社より買取するか又は非常準備線架設權を獲得して通信機關の安全を講せんことを外務省に請願せり三十七年京仁間電話線條増架の議を請願し其容るゝ所となり直ちに線條の増加を見たり此年又京釜間長距離電話の開設を當局者に請願したり三十八年韓國政府の實行せる白銅貨交換甚だ緩慢なるは經濟界に至大の關係あるを以て當局の注意を促かし其結果大に交換力の増加を到せり四十年關釜連絡船の増航を請願し其結果二雙を三雙となし交通上多大の便益を享有せり是より先き三十七年二月日露戰端開かれ我軍破竹の勢を以て露軍を掃蕩し茲に始めて永遠に我國の地位は革固を加へ三十八年一月には京釜鐵道全通せり三十八年三月民團法の發布に從て翌年七月には該施行規則發布と民團設立の準備に着手し八月十五日民團の設立を告げ居留民長を居留民團長と改め民役所を居留民團役所と改稱し議員定數を二十名とし茲に全然法律の保障ある自治機關の完成を見るに到れり后幾干もなく統監府は更に民團法施行規則を改正して民長公選制度を官選

制度と改めたり而して四十三年七月廿六日統監府告示を以て龍山民團を廢止して京城民團に合併せられ八月五日より之を執行せり亦明治三十八年十一月十七日の日韓協約成りて遂に韓國は我帝國の保護國となり三十九年二月一日統監府の開廳となり爾來數次の條約を経て居留民は日に月に激増しつゝありしか更に四十三年八月廿九日には日韓の併合となり茲に益々發展の域に向ひ今や戸數一萬〇三百三十五戸人口三萬八千三百人となり南山麓に溢れ鐘路、南大門外に膨脹して狹隘を告ぐるの觀あり豈に亦盛んならずや因に二十二年官廳の認許を得て居留民規則を制定せられ公然自治機關を創設せしより歴代の總代又は民長は左の十五氏を経たり。

- | | | | | | |
|--------|-----|-------|-------|------|-------|
| 明治二十二年 | 總 代 | 木下清兵衛 | 全二十三年 | 總 代 | 山口太兵衛 |
| 全二十七年 | 總 代 | 穗 寅九郎 | 全二十九年 | 總代々理 | 淵上貞助 |
| 全三十年 | 總 代 | 菊地景春 | 全三十四年 | 總 代 | 中村再造 |
| 全 年 | 民 長 | 中村再造 | 全三十六年 | 民 長 | 山口太兵衛 |
| 全三十七年 | 民 長 | 中井喜太郎 | 全 年 | 民長代理 | 和田常市 |

全 三十八年 民 長 中井喜太郎 全三十九年 民 長 淵上貞助
 全 年 民長代理 黒河内 良 全三十九年 民 長 熊谷頼太郎
 全 四十二年 民 長 古城管堂

京城に於ける逐年戸口發達趨勢

既住明治十八年公然居住權を確保せしより本年に到る京城居留民の戸口發達の趨勢は左の如し

年次	戸數	人		合計
		男	女	
十八年	一九	七一	一八	八九
十九年	三四	一一八	四五	一六三
二十年	六五	一七〇	七五	二四五
廿一年	八六	二三〇	一一八	三四八
廿二年	一三〇	三五四	一七三	五二七
廿三年	一三七	三四七	一七五	五二二

廿四年	一五七	四三五	二六三	六九八
廿五年	一六九	四四二	二七三	七一五
廿六年	二三四	四五四	三三五	七七九
廿七年	二六六	五一〇	三三八	八四八
廿八年	五〇〇	一一二四	七二五	一、九三九
廿九年	四七九	一、〇一九	七三〇	一、七四九
卅一年	四七一	八七一	七二七	一、五八八
卅二年	四八〇	九四六	七八八	一、七三四
卅三年	五二五	一一一七	八六八	一、九八五
卅四年	五四九	一一五七	九五〇	二、一一三
卅五年	六三九	一、三九五	一、〇九五	二、四九〇
卅六年	七九七	一、六八四	一、三五〇	三、〇三四
卅七年	九〇二	二、〇七四	一、五九九	三、六七三
卅八年	一、三五〇	三、九七八	二、三四五	五、三三三
卅九年	一、九八六	四、一六〇	三、五一七	七、六七七

卅九年	三、二一六	六、四四七	五、二七七	一一、七二四
四十年	四、三〇〇	八、二二五	六、七五四	一四、八七九
四十一年	六、四三七	一一、〇〇四	九、七八三	二一、七八九
四十二年	七、七四五	一五、九六四	一二、八二四	二八、七八八
四十三年	八、七九四	一九、〇七八	一五、三九〇	三四、四六八

昌慶宮

昌慶宮は鐘路より東大門に通ずる大路中北折して東正門に至る約十丁余にあり數百年前明將の陣營せしと傳へらるゝ馬頭山と對面せり正面を弘化門と稱し東面す弘化門を入れば内に溝渠あり之に架せるを玉川橋と云ふ此宮は太祖李成桂の時府康宮と稱せしが成宗の十四年(我後土御門天皇の文明五年)貞喜王后、仁粹玉大妃及び安順王后の爲め増築し昌慶宮と稱す其後豐公文祿の役に先ち兵燹に罹りたりしが光海君即位の八年(後水尾天皇の元和二年)修築したるものなり宮殿の主なるものを明政殿といふ實に本宮に於ける受朝所たりしを以て構造の結構他の殿堂に秀づ本殿は吉辰

慶日に當れば成宗百官諸臣を率ゐて三宮を賀し又此殿に於て朝賀の拜禮を受けたり遷宮後は修理を加へず荆棘生し石階敷石墮落し今は僅かに往年の面影を忍ぶのみ。

昌德宮

昌德宮は北部廣化坊にありて昌慶宮の西北隣にあり李朝太祖李成桂の建造する所に於て文祿の役兵火に罹りしが光海君の元年(後陽成天皇の慶長十四年)再築したるものとす宮の正門を敦化門に稱す明治四十二年七月今は李王殿下の居殿たり門を入りて右折すれば右方に李王職あり左方に仁政殿あり殿は二層の樓閣にして殿の結構裝飾共に壯美を盡し殿内一面には丹青を施し玉座は南面にして後に深山の瀑布に日光を畫き天井には鳳凰を畫きたり都て柱は圓柱にして直經四尺に余れり回らすに朱塗りの廻廊を以てす曾て定宗恭靖王の、

環佩丁璫響玉墀、 群臣濟々早朝時、

子房在右長郷在、 一代奇才盛如斯、

と謳はれし仁政殿の如きは壯大なり邸内頗る廣大にして老樹繁茂し幽邃靜雅天然の

風景に富み加ふるに殿堂、門樓、房舍離亭連れり仁政殿の東方に當り六角の榭樓を見る是れ有名なる承華樓にして三層の石基悉く花崗石を以て積上げ上に六角の欄干を有する一亭を設く規模雄大ならずと雖も構造巧妙を極む前庭は石疊にして上下三壇を有す石階は三區よりなり一區六段下壇の廣庭には九品より正一品までの石碑を建て朝臣の順序を定めたり殿内は瓦を敷詰め玉座は南面し天井柱壁裝飾到れり承華樓を右にし阪路を北に進めば一大庭園に入る園内蓮池あり池に面して石段數十を重ね其上に二層の大樓を建つ之れ即ち宙合樓にして階上階下合せて八十餘疊を敷けり曾て宮中の宴會所なり所謂昌德宮内の秘苑とは此樓閣以北の積にして丘陵起伏し林泉四流し龜鼈群をなし數多の白鷺飛翔す池に橋あり船あり亭榭樓閣は雜松の間隨所にありて大樹小樹其間に配在す更に北面し阪路を降れば玉流泉に至る風致一段の雅趣を加ね綠翠滴るの邊り清泉奇石の間に湧き滾々として清水絶わす真に仙境に遊ぶの想あらしむ而して玉流川とて清泉を噴出す苑池の水は一に此泉に由て供給せらる巨巖に激し瀑布をなす所あり石に題して曰く、

飛流三百尺、

逕落九天成、

看是白虹起、

翻成万壑雷、

の題字あり之れ素より鮮人一流の白髮三千丈的の形容なり亦大造殿には先王の御筆なる大造殿の扁額あり

都城宮苑

權 遇

翼々都城壯、

魏々象魏尊、

五雲佳氣正、

氤氳疑作大、

平痕銀珮趁、

丹闕旌旗映、

紫門天顏咫尺賜、

溫吉稽首謝鴻恩、

李成桂の漢陽遷都及景福宮の造營

李朝太祖康獻王李成桂高麗に克ち天下平定の功を奏し松都(開城)に於て即位するや乃ち遷都の議起る時に柳觀なる者あり定都論を上る其論に曰く

古今の所都は關中洛陽を越へち況んや我國家四境の内萬里に過ぎず都すへき地豈

能く多からんや惟ふに松都と漢陽とは善の善なるもの也去年春都を鷄龍に定め民威な之を憂ふ其形勢狹隘にして土地汚下道里均しからず而して水路迂遠なるを以て也今漢陽に遷らんとするや民威な之を喜んで曰く漢陽の形勢土地、道里、水路松都と相均しと民心を以て之を觀れば即ち漢陽なり

太祖此論を容れ遷都の議一決す是時に當り僧無學と文臣鄭道傳との間に宮城の方向を論難し無學は東面を主張し鄭道傳は南面を主張す遂に南門を以て正門とし所名の議を進めて曰く

天子諸侯其勢殊なりと雖も其南面して治を出すは則正に本づく蓋其理一也若古典を稽へば天子の門を端門と曰ふ端は正也今午門を稱して正門と曰ふ命令正教必此門に由て出で之を審にす既に允して後出れば則説説行ふを得ず而して矯僞托する所なく敷奏復逆必此門に由て入る既に允して後入る則邪僻自ら進むなくして功緒稽ふる所あらん之を圖して以て異言危邪の民を絶ち之を閉て以て四方の質を來たす此皆正の大なる者也

太祖道傳の議を嘉納し斷然意を決して其位置を白岳の麓に築き宮殿を南面とす嗣で命名せしむ茲に於て道傳深く古典を討究し疏文を上りて曰く

按するに宮闕は人君以て政を聽く所の地にして四方瞻視する所臣民の威か造る所也故に其制度を壯にして之に尊嚴を示し其名稱を美にし之をして觀感せしむ漢唐以來宮殿の號或は沿し或は革す然して其尊嚴を示し觀威を興す所以は則其義一也殿下即位の三年都を漢陽に定め先づ宗廟を建て次に宮室を營む越へて明年十月乙未親ら袞冕を服し先王先后を新廟に享り群臣を新宮に宴す蓋神惠を廣くし後録を綏ふする也酒三行臣道傳に命じて曰く今都を定め廟を享つて新宮成を告ぐ嘉して群臣と此に宴享す汝宜しく早く宮殿の名を建て國を無疆に匹休せよ臣命を受け謹て拜手稽首し周雅を誦す既に醉ふに酒を以てし既に他に徳を以てす君子萬年介爾景福、請ふ新宮を名けて景福と云はん庶くば殿下及子孫と萬年大平の業を享けて四方臣民亦永く觀感する所あるを見ん、然して春秋は民力を重じ土功を謹む豈人君たる者徒に勤て民に以て自ら奉せしむべけんや廣廈に燕居すれば則寒士涼生を

庇ふ所以を思ひ殿閣は則清蔭を分つ以所を思ふ然して後に庶くは萬民の奉に負く
なげんか、

太祖之を嘉納し宮闕を景福宮と命名す三年秋九月を以て宗廟宮闕全時に竣成し十一月を以て全く都を斯地に移定したり後五年正月都城を築造するに當り趙浚に命じて西北三道の民夫十一萬九千人を徵發し二月末日に至て之を解役し全年秋八月更に江原慶尙全羅三道の民夫七萬九千人を召募し石を以て之を築き九月に至て役畢る其規模の雄大なること諸宮殿の比にあらざるなり

大院君の景福宮大工事

景福宮は市の北端北岳山の前麓にあり李朝太祖李成桂即位の三年（後小松天皇の應永元年）に建造したるものにして其後宜祖の壬辰役（後陽成天皇の文祿元年）我が征韓軍が陣營を此處に布きて浮田秀家之を管せしが後ち其軍をす撤るに及び之れを一矩に附したりしかば殿閣堂宇悉く灰燼に皈したり爾來星想二百五十有余年間蓬草裡に纔かに殘礎を存せし松丘空しく風聲茅茨苦羅の間に傳るのみなりしが近代の怪傑

大院君開國四百七十四年を以て第二子興福宮君（今の李大王殿下）を擁立して王位に即かしめ次ひて攝政となり萬機を專決するに當り深く王室の式微を嘆じ奮然一大猛斷を以て王室の威權と尊嚴を樹立せんと欲し令を入道（今十三道）に下して景福宮の大工事に着手したり（一説に未だ興福君の王位に奉薦せられざるの前一日大院君に伴はれて東大門外の一山寺の遊ぶ時に寺僧興福君を相し驚ひて曰くこの兒後來必ずや大業を爲さんと後ち果して大院君其豫言の違はざるを感じ深く其僧を信するに至れりこゝに於て乎攝政となりて數日僧に諮ふて曰く天下を治むるの道如何と僧答ふるに景福宮の大工事よりすべきを以てす大院君厚く之を信じ即ち宮の大工事に着手するの決心をなせりと云ふ）景福宮の造營に着手したるは（義文久三年）實に彼が攝政五年後の事なり其景福宮全部花崗石にて築ける慶會樓及び之が附屬工事として或は議政府並に六衙門の建築、各宮殿の修繕宗 府の建造、京城周圍の城壁修備等を始め六年間の豫定を以て着手せしが終に竣了し能はざるを以て更に三年間を費消したり此一大工事の經營費に至りては殆んど想像すべき何等の資料なしと雖ども

當時國庫の豊富なりし財力が之れが爲め全然空虚となりしのみならず大院君が峻嚴苛酷の命を發して不足の徴収をなしたるより見れば如何に造營費が無限の巨額に上れるを推想し得べし而して大院君の命を下すや嚴然として秋毫も假借せず之が費用の如きは之を全國に徴収し天下の山林より巨材偉木を輸送すべきを命じ更に吏を派して重税を課し應せざる者には加刑を施し而も税源漸く盡きんとして宮未だ成らず國民は誅求に苦み怨嗟の聲四方に起り王室の暴斂苛責を絶叫するもの間里に滿つるも大院君以て意に介せず時に大院君の暴斂を憤る者光化門外の宮殿工事場に至り山積されたる巨材數月を要して輸致したる珍材良木に偶々一夜放火せる者あり折しも風威猛烈勢當る可らず一朝にして灰燼に皈したり茲に於て乎國民以爲らく工事熄むべしと竊に安樂休養を期し知らざる者は是れ旱天の鑑戒鬼神の裁果なりとして崇敬畏怖の念を抱くに至りしも何ぞ圖らん大院君の意志は難に遭て彌々堅く再び以前に倍せる課税をなし酷使に命じて献金を強徴し更に八道に令して禁伐の山林墳墓に至るまで苟も巨材あるものは盡く之を斫伐以て工事に充てんとす是に於て諸道の儒生

古老等にして不可を上疏する者日々に宮門に接應す儒生等抗言して曰く墳墓を守るは先王の教也祖先の靈を祭るは夫子の道也と大院君之を聞き怒つて曰く我王室の造營に用ゆるに先王と雖も我命を用ひざるなし慕畔の樹木我が造營に使用するを以て不義なりせば孔夫子を九泉の下より呼び起し來れ苟も我命を用ひされば孔夫子と雖も刑せざるべからずと眼中先王なく孔夫子なし尙ほ已むなくば墳墓を鋤耕し以て國家の財源となさんとすと儒生等如何ともなす能はずして止む就中宏壯を極めたる慶會樓の大工役に従事したる歲月と人員と勞力の全部を大量に計上したる者の、想像に曰く慶會樓の建造費約八百萬圓を下らずと記録によれば當樓の工事に使役したる工夫は城内各洞に役丁を編成し洞毎に五日乃至十日の夫役を命したり而して城外近邑皆其例に従ひ各地の洞民團を作り隊をなして交替の勞役に赴く亦大院君來りて勞役を鼓舞し歌妓舞童の隊を編成して役人の勞を慰せしむ雄大なる造營も之が爲めに頗る事の進捗を促したりと雖も長久の造營は舞童も自から倦怠疲勞したるを以て大院君は彼等に慰撫奨勵の爲め遂に位階を授くるに至れり女伶輩にして位階を有する

此時より始まる然るに造營未だ成らずして國庫の窮乏を告げたりしかば大院君は更に全國の富豪に嚴命して強制寄附金を徵募し其多寡に應じて位階の高下を與ふるに至れり是に於て官職位階の放賣盛んに行はる此の寄附政略を欲して願納税と云ふ然れども願納者無限ならず此に於て彼は終に結髮税を徵收するに至れり蓋し朝鮮の俗男女婚姻すれば何れも其總角を結ぶを以て全國の男女結髮に際して納税の義務を負はしむこれ亦一種の血税なり而して此新税法は能く工事の費を補充したりと雖も國民の怨恨天下の反抗心を招きたりき斯の如く國民の膏血を絞り骨肉を積みたる空前の壯大偉觀なる宮は天下怨嗟の内に重建の功を奏せり茲に於て李熙王は此新宮殿に移りぬ(新宮の工事全く畢りしは明治三年なり)とす國王此の宮に移りてより後ち露館に行幸せらるゝに至るまで星霜僅に三十年而かも此間不祥の事相尋ぎ血痕殿内を汚せしこと實に五回を以て計ふ人民爲めに怪異の説を傳ふるに至れり明治二十八年閔妃阻落の變は實に此宮中坤寧殿に於て演せられしものなり李熙王の遷宮以來三十余年間の王政は一に此宮闕より出でしも乙未の變ありしより國王此の宮闕を見棄て

丙中の歲二月十一日の朝北風に吹せられ露國公使館に遷幸せられしより復た風姿なく蘭麝の香茲に絶え空しく殘雨曠風に委して顧みず全く狐狸の巢窟と化し殿宇樓閣唯荒るゝに任かせ修理を施すなく王樹花落ち中丘の松濤無言の悲史を語るのみ。

景福宮の結構

宮城の周圍千八百十三步繞らすに高さ二十一尺一寸(周尺)の石墻を以て築かれ其隅角には城樓あり門を四方に立つ南を光化門(一名正門)北を神武門東を建春門西を迎秋門と名づく先づ南正門たる光化門を入れれば前面に興禮門あり興禮門は二層の大門なり此門を入れれば勤政殿門を正面に見る門を入れれば勤政殿あり殿は諸堂中の最も重なるものにして之を景福宮の正殿となす其前面の内庭には一体に花崗石を敷詰め左右に正九品より正一品までの石標を聳立し百官の席次を表す初めて官に叙任せられたるものは來りて此處に座し拜禮を爲すの慣例なりき殿中玉座は南面し天蓋は龍を刻めり殿後に進めば思政門あり此門を入れれば中間に思政殿あり殿は國王の毎朝萬機を視し所なり之より進んで北崖にある一廟を乾清宮と謂ふ是れ即ち閔后臨終の處な

景致に富める慶會樓

慶會樓は勤政殿の北方一丁餘にあり此樓は初め西樓と稱へしが太宗の三年（我稱光天皇の應永二十年）二月濕地にして礎石固まらず地凹落し軒端傾きしかば太宗直ちに工曹判書（後農商工部大臣）子青等に命じて條築せしむ仍て子青等命を奉じて工事に着手したりしが土地の濕潤なるが爲めに再び凹落せんことを慮り西樓の空地を擴大し四方に池水を穿ち更に高樓を新築したり役畢るや太宗大官親勳の耆舊を招き與に宴樂を催し此樓を慶會樓と改名したり樓は二層の大廈にして約百五十坪平方あり樓の下層は一面に瓦を敷き詰め外部の柱は方形にして内部の柱を圓形とし下部直經三尺高さ十五尺餘東西に入列南北に六列計四十八本悉く一個の花崗石より成る樓は東西十九間南北約十五間結構壯大を極む若し夫れ樓の二層に登りて闕内を觀望せば殿宇樓亭一眸の下に華まれり眼下の蓮池は紫藍の色を湛へ巽の如き水の面に松風一陣吹き來れば漣漪を起して汀の小草を洗ひ細波碎くれば幾條の金龍を走らして見る

目まばゆく時に小魚躍つて銀鱗閃き丸の波汝を殘して何れへか隠る若し夫れ夏の朝に見渡せば蓮の葉末にをける露の白玉は恵みの光を浴びてさながら瑠璃の如く、げにや天つ女神のやさしき双の瞳にたゝへ給へる涙の玉も倏くやあらんとぞ疑はれ只この世の外の心地せられて彼の唐人の羽化して登仙すと言ひたるも斯ることをや云ひけむ

想ひやる朝王全盛の當時は宮女花の如く春殿に満ちて驕奢の極みを盡し花薫る春の晨、月澄む秋の夕仙娃天女の如き美姬金釵玉簪をかざし綾羅の裳、錦綺の袖を風に翻して歌舞管絃裡、茗醪を開きし風流事なる合歡の花に魂魄を奪ひつるも甘泉殿の春の夜の夢、心を碎くはしとなり驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらずの喩に漏れず物換り星移りて今は只過ぎし榮華の夢の跡、英雄の偉圖茲に永き恨をひき臺閣空しく草の茂れるにまかすのみ往年の風月は依嬖として今もなほ變らねど獨りその人やその音やなし千古變らぬ風月の下與亡一夢幾春秋後の今日落花情あれども、流水意なし、桃李言はず流水語らず苔ふるは只峰の嵐に松風の音

慶 熙 宮

慶熙宮は京城西部餘慶坊にありて因と元宗の舊邸なりしが光海君の八年（我後水尾天皇元和二年）に宮闕として之を建て慶徳宮と稱せしが後更に英宗の三十六年慶熙宮の稱に改めたり仁祖戡定の後光海宮の建設せし宮殿は委く撤去せしも此宮は元宗の舊邸たりしを以て其撤毀を免れしが其後漸次に廢毀せられて宮殿は其址を止めず

往時は此宮闕の周圍は九百二十歩にして外墻の高さ二十五尺（周圍）五門を設け東面せる正門興化門と謂ひ、西を崇義門北を武德門と謂ふ其他興元、開陽の二門ありしが今は只だ興化門を止むるのみ、隆福殿正殿、會祥殿、長樂殿、光明殿、泰寧殿等の諸宮皆頽廢して其址を殘さず昔時の宮苑草蔓々として轉た懷舊の情に堪へざらむ近時清人を雇ひて魯桑を植へ養蠶所を設けたるも久しからずして廢せられたり現今は總督府中學校所在地となれり我明治三十八年に及んで慶運宮の後苑を造らんとし宮墻を改築して高架橋を西大門内に架し虹橋と名づけたり

慶 運 宮

慶運宮は西署皇垂防にあり昔時月山大君の邸跡なり文祿の役後各宮闕悉く兵燹に罹りしが獨り此宮のみ其災禍を免れたりと云ふ宜祖後義州より茲に遷都し大に修理を加へて宮闕となし時御所と稱したり是れ實に宜祖の二十六年（我が後陽成天皇文祿二年）なり其後四年を経て兵曹判書（李垣福始めて墻壁く其周圍八百十三歩高さ十三尺當時戦乱疲弊の後を承け國庫窮乏して國民の苦難甚しく新に宮城を起すこと能はず終に己むを得ず此の時御所に繕て國政を視ることゝなれり然ども一として殿堂樓宇の壯麗なく亦池園なく國民嘆嗟の聲已まざりしと云ふ

光海の朝に至り慶熙宮を建て、遷宮し西宮と改稱し仁穆大妃をして獨居せしめたり仁祖光海を伐つに際し仁穆大妃諭告を下し此宮に於て讓位せしむ其後明禮宮と改稱せられ今を去る二十余年以前までは故閔妃の私宮なり李熙皇の三十二年（我が明治二十九年）乙未の變起るや露國公使館に潛奉せられ次で此宮を修理し明治三十一年此所に移御せられたれども（光武八年）明治二十六年宮中咸寧殿より火を失し折

しも東風激しく吹き荒みしかば忽ち宮城は修羅の巷に化し宮中第一の高樓中和殿を
焼き皇帝の御居間觀明殿に延焼し僅に風上なる九成軒を残し其他の宮殿は悉く鳥有
に皈したり韓皇は夜に於て國政を見らるゝ事常なれば此夜も未だ御眠に就き給はざ
る前なりし然るに宮中に於ては火災等てふ語を用ふる事を避くべき慣習あるを以て
侍臣は怨躍の極み競々として成す所を知らず少時を費しぬ既にして皇帝の知り給所
となり御身を隣殿に避けさせられしが火勢は益々猛威を振り皇帝は皇太子御同伴激
玉軒に入らせらるもの途次は我憲兵護衛の任に當れり而して災禍の爲め最も惜むべ
きは李朝五百年傳來の文物書類寶物等の焼失に皈したること是なり其後漸次諸宮殿
を再築したりしと雖も境域狹隘にして築造亦質素を極むと雖も就中淳德殿は洋式石
造にして結構壯麗を極む

宮城の正門を大漢門(初め大安門と稱せり)と謂ひ正東に面するの西北を平章門、正
北を生陽門東北を布德門云ひ正南の仁化門は間もなく撤去せられたり宮城の諸殿中
最も壯麗なるものを中和殿と謂ひ文武百官進賀の所なり咸寧殿は嘗て東宮百官の進

賀を受けせられし所なり而して本殿の西邊に宏壯なる洋館は激國軒にして罹災次は
殿下の御所になれり仁祖が即位の大禮を舉げし即旅堂は即ち本殿の北方にあり其外
淳德及慶雲の兩殿ありて就中淳德殿は外國使臣等の謁見所たり而し景孝殿は閔后
(明成皇后)の魂殿たり

名所古蹟

四二

倭城臺 (南山公園)

倭城臺は木寛山(南山)の中腹にあり現今總督府廳のある所文緑の役増田長盛の築きし所當時壹千五百の兵士此所に屯營せし所にして倭城臺の名因て以て起る所以なり俗塵を抜て京城市街を一眸の下に望むを得朝霞に佳にして雪景殊に美なり彌生の春の雪より烟立昇れば老松の梢をよそへる六花、泰然として白衣の姿を天外にあらはす北漢一帯の峰など美觀いはんかたなし臺の西方高處に鎗身形の紀念牌あり牌面には「甲午戰勝紀念牌」の七字を彫り明治二十七八年の日清戰役後居留民に於て建設したるものにして南山公園と稱する紀念牌に而して上方一段高き所に八角形の音樂堂あり傍に小池を穿ち噴水を設く池邊に梨本宮守正王殿下御手植の松は明治四十二年七月に植栽せられしものあり猶奥に登れば大神宮の靈殿あり前に清泉湧き泉は嘗

て居留地の一部に供給する上水道の源泉にして其下の貯水場には神泉と刻有り遊旋更に白砂を踐み青松巨巖を排して數百千歩すれば南山の頂巔なり眺望絶佳にして眼界數里に亘り遙に就山、鷺梁津、永登浦より漢江下流を姑め東は遠く揚州地方を望み得べし峯巔の城壁は蜿蜒長蛇の如く東面に匂ふ古壘殘壁は葛羅橫漠々たる荒烟ふかく之を鎖しぬ漢江の水滔々として萬古に流れ北漢の山峨々千秋に峙つ憶ひ起す豊公文祿の役馬蹄鷄林八通を風靡し都城一朝戰雲すさみて殺氣山河を包み旌旗天に漲り劔戟相磨し汗馬空を蹴りて鮮血みごりを染め聞聞雲に蔽きて一天搖ぐよと覺わしめし我智勇兼備の名將が回天動地の偉跡はそも何處、遮莫山河空しく古にしてその人や亡し今老松殘礎の下に佇めば青嵐正に袂を翻して長嘯すれば當年の狀髣髴として眼前に横はるを覺ふ

(史を按ずるに當時増田長盛は臺を背にし鑄銅「臺下一帯の地」に陣營を布き云々ごあり故に或は臺上に屯營せしにあらすして城内の動靜を觀望せしめんが爲めに見張所を臺上に設け一部の將卒茲に駐屯せしものならんか)因に近く日清戰役の

際我が大島混成旅團の一隊が砲列を布きし所なりしと今は地、均らされて其跡を見る能はず

會て下嶽齋(鐘運)の

平日望南山、

山高接長天、

今日登南山、

只是一石拳、

山豈前後異、

居高意豁然、

欲知天下小、

須登泰山顛、

天上俯人間、

知應一西點烟、

と詠じて其宇宙間の題目とならしめたる南山は則ち是れなり

李 承 召

南山坐對會城高、

御溝楊柳拂虹橋、

上苑花發蒸紅霞、

太液破煖漲葡萄、

甲第連雲春滿塢、

東風吹送如酥雨、

萬紫千紅摠合姿、

相催不用臨軒鼓、

萬壽山仙鶴洞ノ綠泉亭

名だに優なる倭城壘は翠綠滴る南山々下にあり總督邸の所在は實に此處にあり此附近にある一大銀杏樹は今は其昔壬辰文祿の役に鬼將官として韓八道を風靡したる肥後守加藤清正が名馬を繋ぎしを以てその名世に知らる概して此邊一帶の地を名けて仙鶴洞と號す尙其後方を指して萬壽山と稱する事は未だ知る人乏しきと雖も著者は之を古記に徵するに勝景豊富にして四季文士畫人登攀して其俗腸を洗ふて名什を詠題せる樂境たることを知る綠泉亭の如きは恰く世人の知る處なり又近代の偉人伊藤博文公の舊韓國第一世統監として任に茲にあるや三年有半起臥せられしが其印綬を解き將に歸朝せんとするや綠泉亭の詩あり

南山脚下綠泉亭

三載星霜夢裡經

心緒人間隨境變

別時閑看岫雲青

南山の燧燧

絶頂に祠堂あり「國師堂」の扁額を懸け毎年春秋二季祭祀を舉行せしが今は廢されたり巫女其傍に居を構ふ鮮人の詣者常に絶わす祠の後方二坪餘の石壘あり南山の燧燧臺は即ち是れなり數年前までは其遺墟判然せしも今や全く之を毀へり燧燧は全國各郡の賊警を報ずるの機關にして無事なる時は一矩、賊の形跡現はれたる時は二矩、賊地境に逼りたる時は三矩、賊地境内に逼りたる時は四矩、の制をなし以上都て毎日黄昏時に於て舉行し若し連日接戦の曉には柴を堆積し狼糞を加へて白晝は之を燻ほし夜間は火を擧ぐるを以て規定となしたり而して南山の燧燧は東より西に順次に五燧を設けられ南所部將あつて之を掌り以前は八道の列郡に燧燧臺を設け各その燧火は悉く南山燧燧に來應せり即ち咸鏡、江原、京畿よりの來燧は楊州峩嵯山に聚り第一燧と應じ慶尙、忠清、京畿よりの來燧は廣州天臨山に聚り第二燧と應じ陸路平安、黄海、京畿よりの來燧は母岳の東峯に聚り第三燧と應じ海路平安、黄海、京畿よりの來燧は母岳の西峯に聚り第四燧と應じて海路全羅、忠清、京畿よりの來燧は陽川

の開化山に聚り第五燧と應ず然れども甲午(明治二十七年)の改革と共に之を廢止し今やたゞ蔓草茫々の裡纔に遺臺を残すのみ其後古代の遺法に則りし國民の冤枉を抱きて伸すに途なき者は烽臺に登て火を擧げ以て冤枉を示すことありたりしもこれ亦暫時にして止みぬ

漢陽公園

南山公園の西部に接続す故に彼に遊びて此に來るも可此に遊びて彼に去るも妙なり園は明治四十三年五月二十八日を以て開園式を舉行されたり此際李皇は「漢陽公園」と大書せる扁額を下賜されたり本園は京城在住の有志者發起となり新に經營されたるものなり園は東西に延いて二區の遊樂場を形成し二個の小亭を設け黃鳥亭及び展觀亭と云ふ展觀亭は、其の名の如く展覽地として眺望佳絶眼界轉た開豁にして黒きは清涼里の森、白きは漢江の清澄雅趣深く京龍の全幅は指呼の間にあり綠草は茫々として地を包む衣の如し桃花の盛時此に登りて展望せんか、一目千株淡紅精白嬌艶を競ひ紛々として彩霞の如く香風人を襲ふこれより更に絶嶺に向つて右廻左曲して進

めば老松枯幹翠松點綴す就中根方は半ば倒れ偃して枝垂れたるさま宛然蛟龍の潭に臨みて水飲むらん形に似たる勢ひ勇ましき老松の奇觀あり山頂に沿ひて逶逸たる石壁は壞れ果てし風打雨淋爛斑の苔衣を帯び葛蔓いやが上に生ひ茂り斷壁空しく残りて經營慘憺の迹見ゆるに似たり若し夫れ月白く孤雁鳴く秋の夕こゝに逍遙せば滿街の點火煌々として輝き義觀燦然として眞に是れ不夜城を築成す飄々たる天風は峯より峰に傳はり鬱蒼たる古松は淡霞に鎖されて千草の中にすだく蟲の音はさながら讚美の歌をうたふが如く時に萬戸衣を打つの聲幽かに耳朶をうつなど自然の妙趣を極めそゞろ神澄み氣爽かなるを覺わしむ

畿 甸 山 河

權 近

疊障環畿甸、長江帶國城、美哉形勝自天成、眞箇是王京、

道里均皆適、田原沃河畊、居民富庶樂昇平、處々有歌聲。

鐘 街 觀 燈

徐 居 正

長安城中百萬家、一夜燦燈明似霞、三千世界珊瑚樹、二十四橋芙蓉

花、軒街西市白如畫、兒童驚走疾於猊、星斗闌干不収、黃金樓前
催曉漏。

老 人 亭

南山より東南に折れ松林溪畔を過ぎり小逕に沿ふて進めば逕路盡くる所山腰に古雅なる山門を見ん老人亭是なり亭は閤家の盛時別墅として建てしものなり甲午（明治廿七年）の七月三日即ち日清戦争の開幕に先つこと十數日、時の駐韓公使大島圭介氏が韓國政府に向て改革すべき五大項目「中央政府は地方制度を改正し并に人材を採用すること」「財政を整理し富源を開發すること」「法律を整理し裁判法を改正すること」「國內の民亂を鎮定し安寧を維持する必要な兵備を設くること」「教育の制度を確定すること」及び之に附したる細目を提言して之が實行採否の決答を限るに五日間を以てしたり然るに優柔なる韓廷は其決答期間を空過したるを以て更に公使は趙督辦に對して決答を促かし、かば終に改革委員を任命し我が公使は全十日是等の委員を茲に會同して改革案の内容を解説し其の殘餘の各條綱は翌十一日再び會

同して之れが説明を與へ其内緊急に屬するものは三日間を限り其他は十日間を限り實行すべしと勸告したる長時間の會合商議に快辯滔々論議痛快舌頭雲を湧かし豪宕奇警の論鋒を戦はし所謂老人亭會議なるもの即ち是なりさあれ流るゝタイムにしからみなく今や兩雄世を辭して往事茫茫として夢の如し一勢家の別墅としては規模頗る狭少なりと雖も嘗ては門外の一部も老人亭の園内にして幾十株の楓葉山内を飾りしも今は削縮せられて現在の門内に劃せられしと云ふ亭内廣からずと雖も老樹喬木の間亭樹点々處々に隱見し絶巔の峯壁より劃し來る一條の溪水は永遠の秘密を叫けるが如く岩面の凸凹を通じて亭の南東を繞る細徑は蜿蜒縈曲して南山の頂に通す仰けば翠濃なる松の丘つゞきゆかしき鳥の音松の聲耳に天津乙女の調を通じつゝ清瀨永へに千古の吟を傳ふ山紫水明裡に春秋文士墨客の杖を曳く者をして別天地に遊ぶの感あらしむ。

獎 忠 壇

獎忠壇は水口門より南方六町南山東麓の一溪間にあり壇は東面して建てられ溪流其

前を奔る東方山脚に一基の碑あり碑の前面には「獎忠壇」の三字を刻し其の後面には左の文を刻せり

欽惟我

大皇帝陛下、姿挺上聖、運換中興、奠泰盤之業、惕履霜之漸、無奈天步時、或述遼乃有甲午乙未之事變而武臣之投難効死者多、嗚呼其毅烈之凜於霜雪、名節之炳如日星、宣乎永享芳苾不汚竹帛、是以聖明特軫褒之義、爰降測祖之詔、設壇豎碑、而表旌之繼又定春秋禮儀、以示崇報、以樹風聲、此誠百世之曠典也、勵士氣激、軍心置於此、猗歟盛矣

正一品輔國崇祿太夫元帥府會計局總長兼任表勳院總裁陸軍副將一勳等臣閔泳煥奉勅謹記拜書

光武四年十一月

此壇は舊韓國の忠臣を祀れる所にして恰も我が靖國神社と同じ明治二十八年の事變に斃れたる時の宮内大臣、李耕植、同待衛隊長洪震燾亦此内に合祀せられ秋期一回

祭儀を舉行せり西方の山脚一段高き邊り壯武堂、揚威權、獎忠褒烈、三箇の堂屋あり其前面に二大老樹あり兩々千古の紀念を語りて長へに英魂を吊ふに似たり此邊一面の平野にして風景頗る佳なり野邊山邊の景鮮若青き處紫花蜂蝶に戯る、者は野菊の花のいろ白きが芳しき香を放ち或は紅に咲亂る躑躅の花金風颯々たる秋は錦織り出すもみじ葉に蟋蟀の秋の長き調べを奏つ、這裡の清興いはん方なく老松閑雅にして風に叫ぶ松の落葉溪間を埋めて秋心うたゝ、詩腸をわぐる所謂詩神の此間に徇律するかと疑はしむ

大理石の塔婆

ハコダケ公園内にあり俗に之を蠟石の塔と謂ふ此塔婆は十層にして三層の基壇の上に立つ故に或は十三層塔とも謂ふ塔の四方に佛像を彫刻し古雅賞すべし古代美術として京城及内地に其の比を見ず内外國人に珍重せらるる口碑によれば塔は元十三層なりしが文祿の役加藤清正之を戦利品となさんと欲し三層迄取下せしも重量に堪へずして其儘放棄せりと云ふ今も上部の三層は其の側傍にあり想ふに此説眞ををき難し或

は鮮人の竈に塔中の藏置物を得んが爲めになせし所行ならん乎

附言

此塔婆の沿革に就ては朝鮮の吏籍中是に關する記事に乏しく隨て其建設の時代及山來區々にして未だ確説一定せず夙に學者間の問題となり居れり著者は今關野工學博士の調査せるものを引證する事左の如し

碑石の上部には大圓覺寺之碑（篆体にて二行）に書せり表裏に銘文を刻せし形あれども磨滅殆んど讀むべからず從來亦た之を讀み得るものなかりしが余は文學士幣原恒氏と共に精査の結果僅かに左の文字を讀み得て此碑の由來を知るを得たり……我主上殿位十年功成……（中間不明）……奉舍利……分身四百……五月甲寅……又裏面に正憲大夫兼……參贊兼……成均館事同知經筵事臣徐居正奉教撰「嘉清大夫禮曹參判兼同知春秋館事藝文館提學臣鄭蘭宗奉教書とありて此他世祖の時の宰相たりし韓明滄金澂等の人名を僅かに讀むを得たり此等の文字を參酌判斷すれば此碑は世祖の十年大圓覺寺再興落成の際建てられしものなり

著者想ふに高麗元宗の朝其妃を元の皇室より迎へしの際元の皇帝より贈りしものならんが史に徴するに高麗元宗の十五年(我龜山天皇文永十一年)に太子誼(忠烈王)元の世宗の女齋國大長公主を娶り忠烈王の二十二年(我伏見天皇正應九年)太子諱(忠宣王)元の公主を娶る而して其後忠肅王の十一年八月王魏王阿木哥の女、金重公主を娶れり(我後醍醐天皇の正中元年なり)高麗朝時代は佛教最も隆盛なりしが殊に元宗の如きは尤も熱心なる佛教信者なりしかば塔と共に壯大なる寺院(元と此地に圓覺寺と稱する寺ありしが今は既に廢毀せられて其跡を留めず)を建てしものならんか亦一般の口碑に依れば元の順帝十一年(我後村上天皇の興國四年)高麗忠順王の女金童公主、順帝に嫁す順帝深く之を寵愛したために二塔を作り海路遼東に輸致し一は漢陽の圓覺寺に建て一は豐德(開城の西)肇天寺に建立せられ工事は元の丞相脱々之を主れりと、

今「東國輿地勝覽」を閲するに豐德郡肇天寺の註に普寧君姜融元朝の工匠を募り此塔を作る而して石材は元の國より齎らしたるものにあらざるなり又古記録によるも肇

天寺塔婆は元の順帝經正人年戊子(高麗の忠穆王四年(我後村上天皇の正平三年)なることを録せり而して前記の二塔は孰れも十三層の塔婆にして形狀石質、手工等同一なるを見れば或は元朝との關係上元の工匠なる同人の手に依て成りたることは殆んど疑ひを容れず然れども史を按ずるに元の順宗十一年(高麗忠惠王の後元四年)に相當するのみならず剩へ忠順王と稱する王名なく又元の順帝に高麗の公主が嫁したる事蹟を有せざるを以て全々信を措く能はず想ふに今より星霜五百六七十年以前の遺物なることは動かざるものゝ如し

龜 碑

龜碑は大理石の塔婆を南に距ること三十歩ばかり是又大理石の碑にして花崗石の龜趺の上に立つ碑は斷面十數尺の長方形にして頭部に雙龍を蟠結し珠を爭ふの狀を彫み横に「大圓覺寺之碑」とある六大文字を見る碑は二行に篆題し其下は碑文を刻す龜趺は長さ二十三尺の石材より刻み出したるものなり篆文は徐居正を撰し鄭蘭宗之を書したるものなれども星霜幾百年風零雨殘の餘磨滅多く字体判明せざるも二三百字

を讀み得べく其第一行は「大明朝鮮國大圓覺寺碑」とあり蓋し圓覺寺は太祖李成桂の時、曹溪宗の本社たり舊名を興福寺と稱せられしが後一旦廢せられて公廨となりしを世祖の十年（我後土御門天皇の寛正六年）に改創して圓覺寺と號す碑文は其時に建てられたるものなり寺は既に數十年前に廢毀せられ今は其跡を留めず然るに先年朝廷此碑所在地附近の民家を買収して公園となしバコタ公園と命名せり經營半途にして止み設備未だ完からず而已ならず地形狹隘四面瓦壁を以て繞らし周圍約三百間に過ぎず中央に池あり池畔に小亭を設く龜碑は今より四百四十六年前の遺物にして塔婆と共に京城の誇りとして著名なり

博 物 館

博物館は昌德宮構内に設けられ動物園植物園と共に元と韓國皇室の所屬にして明治四十二年以來一般公衆に觀覽せしむ館には新羅、高麗、李各時代に於ける土器、金屬品、玉石、繪畫其他美術工藝品及參考品等を陳列せるを以て史家故實家等の賞稱に價するもの尠からず。

鐘路普信閣の梵鐘

鐘路丁字街頭東南隅にあり鐘閣（一に鐘樓と云ふ）は少なりと雖も鐘は大なり蓋し鐘路の名稱も此鐘あるが爲めなり工學博士關野貞氏の韓國建築物調査報告書に據り此梵鐘の大きさを記せんに

口徑 七尺五寸三分 口周 二十三尺四寸 口厚 一 尺
口より龍頭下まで高さ十尺 全高 十二尺五寸

とあり故に京都の東大寺、方廣寺、智恩院の鐘に及ばざるも（慶州に在る奉德寺の鐘と殆んど相等し）朝鮮無二の大鐘なり鐘は李氏開國の始め國都を京城に遷するに際し鑄造せしものにして即ち太祖四年（我が後小松天皇應永元年）大鐘を鑄造し、權匠銘を撰して鐘閣を通衢に建て晨昏に鳴らしたるが世宗の朝に至り東西五間南北四間の二層樓を十字街に建て鐘を樓上に懸け樓下を人民の通路となしたりしが世祖の十三年更に命じて大鐘を鑄りしが宣祖の朝文祿の役我が兵の進入に先たち亂民放火の餘炎此層樓及景福宮及其他の王城と與に燒火し大鐘亦融鑠す（當時光化門にあり

し大鐘も此時烏有に飯せり)初め世祖十三年(我後土御門天皇の應仁二年)判義禁府事、尹子虛、大提學、徐居世に下命して興天寺の鐘を鑄る後ち中宗の朝、相臣、金安老其鐘を崇禮門に移す未だ懸るに及ばずして罷む時で宣祖遷都の後ち之を崇禮門に懸けたり三年を経て明將、揚鎬此鐘を明禮洞の岨上に移せしが其後又此鐘を木鐘樓に移轉したり即ち今懸けるもの是なり今を距ること實に四百四十四年なりとす又李熙皇即位の八年(我明治四年)攝政大院君が「洋夷侵犯罪戢則和主和賣國戎我萬年子孫丙寅作辛未立」の二十四字を刻める石碑を鐘路街上に樹て、盛に「カブリツク」教徒を纒殺し其後石碑を仆して此普信閣内に納めしが今は其所在明ならず梵鐘は古來毎日晨昏には必ず打鐘するの慣例ありしものにして其の夕刻に打つものを人定と稱す即ち一更三点(午後七時頃)には大鐘廿八を撃ち曉に鳴らすものを罷漏と稱し五更三点(午前三時頃)には大鐘三十三を撃つ人定より罷漏に至るの間は城内男子の通行を許さず蓋し女子は白晝市街の通行を禁せられしを以て人定鳴るを俟て始めて外出せしものなり而して人定と共に各城門は鎖され罷漏の鳴るに至りて開門

さるゝの定めなりしが近年に至り此慣習は全廢せられたり

附言 この大鐘に關しては忘誕なる一奇話ありその初め李朝太祖之を鑄造せんとするや大に巨鐘を得んと欲し之れに充つる金屬の蒐集方を全國の觀察使並に各地の大官に命せり茲に於て乎各地方官は孰れも各自其功果の大ならんことを競ふてその金屬を徵發して献納せしが時に慶尙道内の一村落到に於て折しも該地方官が徵發中一老婆あり小兒の三歳許なるを負ふて來り告げて曰く妾は赤貧洗ふが如く家に何等の貯へなければ素より献納すべき金屬なし乞ふ此小兒を以て之れに代へん願くば之れを一材料として嘉納せられよ徵發官は之れを怪みしも何等の沙汰せずして其儘にして去れり已にして全國より恰く徵集せし金屬を以て太祖直に命じて大鐘を鑄らしむ鑄造了つて後須叟にして破鐘したり依而太祖再び之を鑄らしむ然るに豈に圖らんや幾許もなくして破鐘すること初めの如し其後更に鑄造を試みしこと數回なりしが遂に皆其効果なし太祖深く之を怪み是に於て乎大に賞を懸けて其事由を天下に解せしむ時に會々一人あり進んで曰く斯の如く破鐘の不詳事相

尋ぐは他なし是れ嚮に老婆の請願を嘉納せざりしが爲めのみと太祖之を信じ直ちに人を派して先の老婆に就而其小兒を献せしむ可憐なる小兒は來れり憐むべし小兒は忽にして、あわれ、金屬と共に熔爐に投せられ遂に鑄られて大鐘と化せり奇なる哉怪なる哉爾來曾て復た破裂することなかりしとぞ京童傳へ云ふ鐘の音は「アーミーラー、々々」遠響す即ち之れを翻譯すれば母よくといふ意味にして即打鐘の際鐘中の小兒が叫喚する響音なりと

萬歲門

西大門より鐘路に通ずる大路中北側にあり(光化門郵便局)朝鮮式の一小堂にして堂の中央に石碑を立つ外部を繞らすに鐵柵を以てせり。

崇禮門 (南大門)

崇禮門(一に南大門)は興仁之門(東大門)と其構造毫も差違なく下層は花崗石を以て築造し中央に闕門を設く樓は五間二面重層にして厚さ二十尺の石壁を以て築上げ屋

根四柱其初層は東西七十五尺餘南北二十五尺餘四面開け放しにし中央一間を板張とし左右各二間を土間とせり周圍の胸壁は煉瓦を以て築き東西各二門を設く初層の組物は二手先軒一重垂木にして上層は二手先軒初層に同じく床板張天井化粧屋根裏なり四面の柱間には扉を設く單簡なる軸廻しにより開閉すべし、本門は有名なる大逆者顯はれしとき沙南坪(路梁津を云ふ)に於て誅殺せらるゝ時は國王此樓門に幸臨して、その門下を通過するを親しく檢したりと云ふ又仁祖十四年には清太宗入寇に當り其年十二月十三日群議終に王の江華行を決議す仍て十四日午後に至て王は愴惶として此門を出で、江華島に向はんとせしが之に先だちて清將は己に技隊を派して揚州江を遮りたれば仁祖驚愕南大門の樓上に還御せられたるなど崇禮門が有する史は少なからず。

南關帝廟

京城南大門外、龍山道路古市町の左方山腹にあり是れ南關帝廟にして俗に南廟と謂ふ是れ即ち蜀漢の關羽を祀れる所にして城内には南廟、東廟、北廟の三所に祭祀す

而して南廟の正殿を顯聖殿と謂ふ正面に關羽の立像を安置し向て右側に王甫趙累、西向し左側には周宗關平の像を並ぶ繪畫亦關羽の事蹟に關聯せる三國史中の戰畫多し此廟は宜祖の三十一年(我後陽成天皇の御宇慶長三年、西歷一千五百九十八年)にして豐太閤薨去の年なり文祿の役に明國の遊擊將軍、陳寅の建設したるものなり陳寅は文祿の役に蔚山に於て加藤清正と干才を交へしが負傷し直に京城に引返し居を此所に構へて療養すること久しく後ち其の居跡に廟を建立したり當時明の揚鍋其他の將士等義捐して役を助け亦朝鮮政府も補助金を出して浚工せしめたり初め廟前には二旗を豎立し一は「協天大帝」一は「威振夏華」と記し亦關羽立像の前面には關平、周倉、左右に竝立したり其後に「顯靈昭德關王廟」と書したる英祖親筆の額を揚げ其他親製の記竝に許筠の撰したる碑文ありたりしが數年前火災に罹り殿宇と共に悉く烏有に飯したり現今の社殿は其後の再築なりと雖も其結構等は總て燒火前のものを摸倣したりと云ふ

蓋し關帝廟を建立したる其來由は全く文祿役に基因し祭神關羽は文祿役後韓廷の守

護神なり壬辰の歲我軍連戰連勝八道を風靡するや韓廷上下色を失し爲す所を知らず時に關羽夢に明帝に謁してゆふ今や朝鮮の危急存亡旦夕にあり何ぞ速に之を援助せざると明帝答ふるに將軍其人なきを以てす關羽即ち曰く乞ふ自ら征戰の任に當らんと是に於てか關羽の靈忽焉として渤海を渡り進んで漢陽に入りしが一夜猛然靈風南大門外に起り更に城内に入り龍虎破竹の勢を以て倭軍を四方に潰乱せしめ縱橫無盡に驅馳せしの極遂に東大門外に至りて息みしとぞ豐太閤の征韓軍や向ふ所敵なく鷄林八遣は悉く我が軍の爲に蹂躪せられ明の援助に依而纔に社稷の覆滅を支へ我が軍未だ全く明軍を驅逐し得ざるに先ち不幸豐太閤の夢去となり中途にして我が軍を撤するの止むを得ざるに至りぬ此時明は視し以て明國の強日本軍を國外に掃蕩し得たりとなし聲言して曰く事の茲に至る一は關羽の遺靈屢々靈を顯はして明軍を守護せらるに起因せり遺靈の援助にあらずして豈に斯の如きを得んやと由來迷信深き朝鮮人は忽ち崇拜信仰の念を生じさなきだに鴻恩ある明將の一言は甚大の感化を及ぼして直に一般の贊助となり遂に協力して建廟の事あるに至れり

たる支那黨の閔泳翊一味の徒黨を式場に於て一舉に刺殺せんことを企て金、朴等豫め計畫する所あり午後九時晚餐方に終るの時に至り牆外火を失し俄に騒然たり時に支那黨の首領なる閔泳翊出で、難を避けんとす忽ち刺客五名暗中より躍り出で、白刃を揮ひて之を傷く閔泳翊重傷を蒙りたるも纔に虎口を脱して再び宴席に入て斃る一座驚き散す既にして金玉均、朴泳孝直ちに馳せて景福宮に參内し國王の寢殿に伺候し奏して曰く清兵反乱を企圖し火、光城に滿つ直に御座を移し難を避け一面には使を日本公使館に派して兵を率ゐて王宮に來援せんことを公使に請ひ之と同時に廷臣の變を聞きて王宮に來るものを途に擁し後營大將尹泰峻等反對黨の領袖數名を殺戮す時に竹添公使は日本兵の南村(泥岷)の兵營にあるもの僅に一中隊を率ゐて深更王宮に赴き守衛の任に當る翌五日國王大臣の更迭を行ひ領議政に李載元(國王の從兄)任せられ金、朴等皆顯職に就き政權全く日本黨に版す六日國王將に大政一新の詔勅を國中に布かんとす此時城内揣摩浮説百出し物情騒然たり偶々王宮東門の方面に當りて銃聲ありこれ反對黨が暗に清國統領、吳兆有、司馬、哀世凱に保護を請求せ

しが爲めに清兵數名を率ゐて宮内に入りしものが我が兵の普通門樓の附近に在て警せし護ものに向て發砲せしかは中隊長大尉村上正積、竹添公使の命により應戦せしも衆寡敵せず我兵公使館に退く此の日京城在留の日本人は清兵若くは韓人の爲めに殺傷せられしものは歩兵大尉磯村眞三等凡て四十人に及ぶ而して國王恐惶色を失ふ時に洪英植等此機に乗じ國王を擁護して難を後苑の演慶堂に避け閔后亦避難せられ互に所在を失す日没に及んで彼等の銃聲尙熄まず危急倍々逼る、國王再び演慶堂を出で、玉統泉後の北壇門に避難さる此時韓國武藝衛生及別抄軍等國王を擁して出門せんと欲し來り逼る金玉均、朴泳孝等諫止せんとして意を果さず我が兵と共に退去し僅に洪英植及朴泳教(朴泳孝の兄)外數名駕に扈從して當關帝廟に到る、然るに吳有兆等先んじて兵を隨へて既に茲に在りて駕を迎ふ洪英植朴英教等百方駕を回へざんとするも得ず遂に格闘して咸く殺害さる是に於て哀世凱等駕を擁して吳兆有の營房(宜仁門外)に至り翌日下都監なる哀世凱の營房に移御す朝鮮政府復び更迭し沈彝澤、領議政に任せられて支那黨の天下となり日本黨悉く閉息す洪英植は清兵の爲に

東 關 帝 廟

與仁之門外崇信坊にあり行くこと數町ならずして通路の右側に廟宇あるもの是なり俗に東廟と謂ふ南廟に後るゝこと四年即ち宜祖の三十五年（工蔡大辭書には全三十二年とあり）に竣成したるものなり規模南廟と大差なしと雖も本廟にありては正殿關羽立像の向つて右に關平、趙雲並列し左側に周倉王甫東向す廟の建立は明帝神宗の詔命により建立したるもの故に明國より詔勅と四千兩を送り且本匠使萬世徳を派して工事を擔當せしめ落成するや明に向て賜額を請ひ神宗の親筆にて「顯靈照徳」關王之廟と書したる扁額を前殿に揚げしが明滅び清朝となりし故之を憚つて額を撤去したり。

北 關 帝 廟

惠化門（東小門）内の崇教坊にあり俗に北廟と云ふ本廟は東西兩廟に後るゝこと約二百八十年後の創立にして李王（即ち今の李太王）の即位十九年即ち我が明治十五年なり規模前者の如く大ならざれども諸般の設備總て南廟を摸擬したるものなり而して

其緣起相等しからざるも又我が國に關係あるは頗る奇なり李熙王即位の十九年某夜夢に關羽の靈驗に就きて危難を脱せし事を夢見給ひたるに其後數日ならざるに故関妃亦關羽を夢む事あまりに不可思議なれば是れ全く關羽が靈驗を著はしゝもの畢竟何等かの前兆ならん祀らざる可らずと是に於て俄かに地を茲に卜し新に建廟に着手す其翌我十六年の九月に至りて竣成したり然るに此の翌歲は彼我の史上に特書すべき所謂明治十七年の乱（韓國にては甲申の變）起り西曆千八百八十四年八月清國安南事件の結果佛國の基隆を占領するや京城に於ける支那黨（一に事大黨と稱す）大に動搖す而して日本黨（開化黨）の一派たる金玉均、朴泳孝、洪孝植、徐光範、徐載弼、李寅鐘、申福横、等の徒當時日本政府部内此機に乗じて朝鮮の日本黨を助け清韓の宗屬問題を事實上消極的に確定せんとの議あるを聞知し機既に熟せりとなし一舉にして反對黨を撲滅せんことと期待せしに適々十二月四日京城郵政局の新築落成式を舉ぐるに際し郵程總辦洪英植、祝宴を設く各国外交官及び韓廷の高官共に之に臨む（獨り我公使竹添進一郎氏病を以て赴かず）夜に入り日本黨は此の機を利用して政敵

たる支那黨の閔泳翊一味の徒黨を式場に於て一舉に刺殺せんことを企て金、朴等豫め計畫する所あり午後九時晚餐方に終るの時に至り墻外火を失し俄に騒然たり時に支那黨の首領なる閔泳翊出で、難を避けんとす忽ち刺客五名暗中より躍り出で、白刃を揮ひて之を傷く閔泳翊重傷を蒙りたるも纔に虎口を脱して再び宴席に入て斃る一座驚き散す既にして金玉均、朴泳孝直ちに馳せて景福宮に參内し國王の寢殿に伺候し奏して曰く清兵反乱を企圖し火、光城に滿つ直に御座を移し難を避け一面には使を日本公使館に派して兵を率ゐて王宮に來扱せんことを公使に請ひ之と同時に廷臣の變を聞きて王宮に來るものを途に擁し後營大將尹泰駿等反對黨の領袖數名を殺戮す時に竹添公使は日本兵の南村(泥岷)の兵營にあるもの僅に一中隊を率ゐて深更王宮に赴き守衛の任に當る翌五日國王大臣の更迭を行ひ領議政に李載元(國王の從兄)任せられ金、朴等皆顯職に就き政權全く日本黨に版す六日國王將に大政一新の詔勅を國中に布かんとす此時城内揣摩浮説百出し物情騒然たり偶々王宮東門の方面に當りて銃聲ありこれ反對黨が暗に清國統領、吳兆有、司馬、哀世凱に保護を請求せ

しが爲めに清兵數名を率ゐて宮内に入りしものが我が兵の普通門樓の附近に在て警せし護ものに向て發砲せしかは中隊長大尉村上正積、竹添公使の命により應戦せしも衆寡敵せず我兵公使館に退く此の日京城在留の日本人は清兵若くは韓人の爲めに殺傷せられしものは歩兵大尉磯村眞三等凡て四十人に及ぶ而して國王恐惶色を失ふ時に洪英植等此機に乗じ國王を擁護して難を後苑の演慶堂に避け閔后亦避難せられ互に所在を失す日没に及んで彼等の銃聲尙熄まず危急倍々逼る、國王再び演慶堂を出で、玉統泉後の北壇門に避難さる此時韓國武藝衛生及別抄軍等國王を擁して出門せんと欲し來り逼る金玉均、朴泳孝等諫止せんとして意を果さず我が兵と共に退去し僅に洪英植及朴泳教(朴泳孝の兄)外數名駕に扈從して當關帝廟に到る、然るに吳有兆等先んじて兵を隨へて既に茲に在りて駕を迎ふ洪英植朴英教等百方駕を回へさんとするも得ず遂に格闘して咸く殺害さる是に於て哀世凱等駕を擁して吳兆有の營房(宜仁門外)に至り翌日下都監なる哀世凱の營房に移御す朝鮮政府復び更迭し沈舜澤、領議政に任せられて支那黨の天下となり日本黨悉く閉息す洪英植は清兵の爲に

殺害され朴泳孝、金玉均、徐光範、徐載弼は我が公使館に難を避く茲に於て乱兵我が公使館を襲撃す、されど館内糧食盡き彈丸も亦乏しく久しく防ぐに堪はず七日午後竹添公使は園を衝て兆れ其護衛兵に擁せられて仁川に退く大駕再び景福宮に還御せらる是より先き昌德宮内に於て所在を失したる閔后及諸殿宮は一時興仁之門外蘆原驛に避難せられしが國王に後る、こと一日にして還宮せられ乱全く治る是に皇帝は前年の夢といひ及今次北關帝廟の避難のことを回想せられ親ら文を撰して故大國輔國閔泳煩に賜ひ閔氏之を書して碑面に刻せるものは現時當帝廟正殿右側の碑文は即ち是なり

文廟

馬頭山の後、惠化門内鬱蒼たる老銀杏數株半天に雄姿を聳わ朱門堂々として建てるは成均館なり所謂成均館文廟はこの館内明倫堂の南に在り一名を孔子廟と云ふ正殿を大成殿と稱し南面す前庭の東西に各廡あり西廡の西北にあるを典祀廳といひ享官廳は明倫堂の東北にあり又殿の東門外に下葦臺あり列朝謁聖の時は必ず爰處にて葦を

下る本廟は李朝太祖の六年春二月大學を經始し地を漢陽の東北隅崇教坊に相し驪興府院君閔齋をして治めしめ秋七月(我應永五年)竣工す尋で定宗の二年火災に罹り太宗の七年(我應永十四年)に再建し世祖の朝韓明會啓して尊啓閣を建て經籍を印して之を所藏し肅宗の朝更に徐居正の建議により享官廳を設け成宗の三年(我文明四年)李克増又啓して典祀廳を建てしが後燕山の朝(我明應年間)文廟の位板を撤去し各所に移せしを以て序次倫なく香火永く絶へ其後正殿を東西廡及食堂に改構し遊宴の所となせり然るに中宗の元年(我永正三年)重て本廟に營繕を加へ再び位板を奉還せしが第十五世宣祖の二十五年(我文祿元年)火災に罹りしが三十四年に再建せり後ち仁祖の朝(我寬永年間)會て下季良が撰せし碑石を廟庭に建て孝宗四年(我承應二年)香室を建てたり當時著名の能筆家石峰(韓護)の筆蹟せる扁額を大成殿に掲げたり又肅宗の二十五年(我文祿十二年)廟の西北に啓聖祠を建立し内には齊國公孔氏(叔梁終)を正位とし曲阜侯顔氏(顔無繇)泗水侯孔氏(孔鯉)萊蕪侯曾氏(曾點)邦國公孟氏(猛激)等の諸靈を奉安せり又廟の東にあるを崇節祠と謂ひ殿内には晋の大學士童養唐の大

學生何蕃宗、大學生陳東同、殿陽徹を祀れり而して「流芳我東」及「四賢祠」の兩額は廣宗の親筆にして肅宗九年（我天和三年）に建立せしものなり本廟は時に隆替ありと雖も中世の始に至り布帛、米穀、學田を賜ふてより爾來歷朝の王者毎年春秋仲月上丁日には釋尊祭を執行し事ある毎に朔望祭、告由祭、慰安祭、移還安祭、禮成祭を行ふ毎に親臨酌獻の舉ありて時に或は教を下して王者親しく釋尊に臨御の事あり文廟は支那の古制に遵ひ孔子及諸賢を合祀す所謂四聖、十哲六賢を始め周、漢、唐、宋及朝鮮の儒臣を配享したるものにして大聖殿内の神座は文宣王（孔子）を正位とし顔子、子思は其東側に在りて西向し曾子、孟子は其西側に在て東向せり共に北を以て上位となす又其後の東壁には閔損、端木、賜中、田卜、商周、敦頤、程頤、張載の諸座西向し西壁には再耕、宰予、再求、言偃、孫師、程顥、邵雍朱熹、等東向せり而して朝鮮の儒流にして文廟に合祀せらるゝものは十六人もこの十六人は朝鮮に於ける各時代を代表せる碩學鴻儒にして所謂目して第一流の人物にあらざるはなし想ふに往時に於ける朝鮮は文運一時の盛を致し城内に四學館を有し中古に至るまで

其三を有したるも後ちには一個を留むるに過ぎず今の成均館是なり此を我が徳川幕附時代に求むれば成均館は湯嶋の聖堂に恰當す成均館は依然として漢文經書の教授をなし今猶ほ儒學最高の學府なるも不振を免れず舊教育の末路慘憺たる間僅かに往年の殘影を認るを得甲午以前成均館は實にこの國の文官唯一の登龍門にして科擧に考試せられて登第せば始めて進士たることを得故に甲午以前は全國の新進氣鋭の秀才が切磋琢磨して學理の濫輿を傾倒して螢雪の苦を嘗めたるのみならず宿志を達せんと欲して半生の心血を瀝きつゝ科擧に應じたる試験場たりしなり今や綠草離々として轉た人をして追想の念に堪わざらしむ

〔附言〕科擧の制度は新羅朝、元聖王の時代既に其制ありしが如く後ち高麗朝に至りて茲に唐制を模倣して詩賦領及時務策を科して進士を採れり又李朝太祖は其元年に於て既に科擧の法を定め秀才拔擢の意を明示したり爾來四百八十四年甲午前に至るまで科擧の制は持續せられたるものなり

文廟の制度

文廟の制たる支那は塑像を用い朝鮮は位版を用ゆ唯だ開城、平壤二府の學堂に塑像

を安んずるのみこは元朝時代に支那より渡來せしものなり嘉靖丙戌年間皇帝全國に令して孔子及び之に配享諸賢哲の塑像を破毀せしめ栗木を用ひて版を作らしめ且以爲らく孔子は大聖なりと雖も其位無くして王の尊號を以てするは潜越の極みなり必ず享けずと遂には大成文宣王の謚號を去し位版に題して至聖先師孔子之位と云ふ是より先き國王、學に幸し將に祭祀を營まんとし壇上に待立して拜せんとする者の如くなりしかば時に鴻臚官提議して曰く孔子は僅かに魯國の陪臣なりと終に諫止して禮拜せしめず是に至て以爲らく既に尊敬するに先師の稱號を以て萬業の天子と雖も亦當に師を拜すべしと議茲に一變して禮拜を行ふ但だ像を毀つ詔のみは支那に到達せず故に開城平壤の學府は舊像尙ほ存在せり近時に至り萬曆年間に破毀したる位版を用ゆるに至れりこは蓋し漢の時代より以降天子の尊嚴を以て孔子の像に謁して再拜を行ひ降て明の永樂年代より始めて天子回拜の禮拜を行ふに至れり。

天 然 亭

敦義門(西大門)外に在り古來西池の名あり旱魃に雨を祈りし所なりと云ふ昔時池畔

に老松ありしが高麗王嘗て此地に幸し雨を松下に避けたるが故に盤松池と謂ひたりしが其後興亡幾百年の星霜を経て老松全く枯死して今は見る能はず瑠璃色の水、漣を疊める蓮池滿開の夏の朝、青葉若葉は溶々たる綠水に映じ爛熳たる一紅一白の蓮花は咲き渡りて綺羅を刻むかと疑はれ涼風そよるに、圓蓋を吹ひて薰香衣袖に滿つ、あるいは、蓮の雫ほろりとこぼして玉とも見わつる風情など美觀窮りなし後年池畔に樓亭を建し清水館と稱し亭を天然亭と名づけたり明治十三年江華條約に基き外務大臣花房義質、朝鮮駐劄代理公使として入城し此時清水館を以て日本公使館と定めたりしが我明治十五年七月二十三日一團の乱兵暴民等一隊は宮闕を犯し一隊は下都監にありし訓練隊教官堀本中尉を襲ふて是を殺害し一隊は天然亭なる我公使館を襲へり乱兵等呐喊呼燥を極むも放て肉迫し來るの勇なく公使館を包圍して盛に矢を放ち石を投じ遂に附近の家屋に火を放ち公使館將に毒炎の裡に葬られんとす花房公使以下館員二十余人死を決したるも事咄嗟にして此間に處する進退に就而は衆議一ならず陸軍大尉水野勝毅建議して曰く宜しく圍を衝きて仁川に出づる策を取るべしと花

房公使乃ち衆を制し自若として曰く須らく直往邁心堂々と正門より突出し同しく西門外に在る京畿監營（後の漢城府）に到り護衛を求むべし若し聽かずんば直に城門に入り宮闕に走り國王と安危を共にすべきなりと一刀兩斷の果決群議茲に一決し先づ國旗と公使を中央に擁して火煙既に四隣に迫れる間を潜り出でたり此時暴徒等以爲へらく公使館既に朦々たる烈火に包まれ館内閣として聲なきを以て館員悉く爛死せるものとし猛火虚空を拂ひ黒煙漲り焦煙は千蟬の紅舌を吐くが如く天を焦すを望見して頻に快哉を叫びつゝありしに何ぞ圖らん忽然決死の一團が奮撃殺到旭旗を翻し先鋭閃々白刃を揮ひて叱咤奮闘焦煙を排して驀進し來るを見て錯愕措く能はず進退度を失し逃げ迷ふを我一團は斫拂ひつゝ一條の血路を開き京城監營に趣き來意を告ぐるも吏員悉く遁匿し營内閣として聲なし更に轉じて王宮に向はんとして崇禮門に至れば鐵扉堅く鎖されて入ること能はず此に於て夜暗に乗じ歩を轉じて仁川に向へり時に一黒雲に掩はれ萬弩の雨を催ふして天地陰暗歩行頗る難し或は楊花津（龍山の下流）に退き船を奪ひて江を渡り或は民家に入りて麥飯を炊かしてめて饑

を醫し翌二十四日の日暮九死一生裡に纔に濟物浦（今の仁川港）に免るゝを得たり清水館は灰燼後更に之を用ひず野草茫々たる草原の中僅かに殘礎廢石散在するのみ只當時公使の居室たりし天然亭を存すれども空しく荒廢して悲雨慘風の慮ぐるに委ね往事茫々として都べて夢の如し轉た今古世事の轉變を慨せしむ

獨立門及獨立館

西大門外を出で北に折れて進むこと七八町通路の左側に當りて洋館あり其前面に石門あり獨立門、及獨立館是れなり門は嵩宏宏雄大高さ三十有余尺悉く花崗石を以て之を疊めり門は明治廿七八年日清戰役の結果半島の獨立國たるを公認せられしと同時に建設せしものにして獨立館の前なる幕華館を改めて今の稱呼に變更したり獨立門は其以前紅箭門なりしも中宗の三十年（我天文四年）明使の送迎を此門に於てなせしより改めて柱を建て延詔と稱したる扁額を掲げしが後三十三年迎恩と改め其後明の朱之蕃の書したる額を掲げたり蓋し「迎恩」の名は明使薛龍の唱へし説に隨ひたるものなり而して獨立門の建造により迎恩門は破壊されて今は唯之れが二本の門跡

を殘すのみ亦獨立館は初め幕華樓と名けしが李朝成宗の十二年(我永享二年)樓を改めて館となし尙ほ武科の登用試験所たりしを以て武二所とも稱したり館は今建物を改め且う増築を加へ一進會の議場に充てしを以て一時は詛々諤々の論戦は館の内外に轟響せしことあり後ち明治四十三年の四月一日統監府中學校(今の總監府中學校の前身)の設立せらるゝや一時假校舎に充てられたりしが今は宋秉峻子の經營せる東光社ありて盛に卷煙草を製出す。

梨泰院

南大門外より西に行くこと約十町余更に又南に山逕を辿ること八九町余にして一小村落に達す梨泰院と稱し俗に日本村と呼ぶ戸數百四十余を出でず四面山を控へ天然の風景佳にして地は桃樹多く桃花満山を粧ふ春季に至れば墨客遊子の來觀するもの尠なからず此の地は文祿の役我が軍、長驅して京城に向ふや小西長行加藤清正の兩將は忠州より路を分ち行長は龍津を渡りて南大門に清正は銅雀津を渡りて東大門より進入するや城内の民家難を避けて四方に散亡する者算なし茲に於て乎我軍の

諸將相議して陣營を城外に移せしがその城外の地こそ即ち當梨泰院なり(當時豊太閣より清正に與へたる五月十六日附の文書にも陣營を都城外に移すべき旨及び梨泰院村の後ろにある小岳を梨屯芝山と記録にあるを見れば此地に陣營を列ねしことは毫も疑を容れず臚て彼の浮田秀家、黒田長政、小早川隆景、立花宗茂等も相尋で京城に到着し南山一帯の地を以て軍營とするは是れ今の倭將臺なれば當時我軍の諸將が戦略上南山の形勝を控へて其南側に陣しゝものなり)故に其將小早川隆景が本陣を茲に布きて支陣を漢江の彼岸に設けしがその糧食缺乏するに及んで城内景福宮裡に本營を移しゝが駐屯一年有半の久しきに及べり而して我兵退軍當時の事態を見るに斯の和議休戦中九月には征韓軍の八道に散在せる者京城を中心とし釜山を根據地とし處々に成兵を置きたりしか翌文祿二年五月には我軍京城を退き釜山に至り沿海に分營し屯田永住の策を立てゝ留まりしが此退軍の際に嘗てや嘗て永く異域の空に停まりし我兵の其間血氣制すべからざる者が無聊に堪ねやらずして鬼をも摧ぐ猛者が天涯の外に在て心は千里を隔てねど身は哀れ西東、花咲く春は落花の雨に故國

の天に懷を馳せ行く秋の淋しさには征衣の寒む旅の徒然に、あるは、娼婦の門を叩き一夜の春を買ひ度重なりては愛子を擧げて己れも父と呼ばれしは凱旋の砌り別離に臨んで再會期し難き分袂の情緒纏綿絶つに山なくさあれ古人も言ひけん實にや悲しきは死して別るゝ間今はより生別こそ悲しけれとの言の葉の如く遂に没落して衣服を變じて此地に停まりし者或は陣中の病者老兵にして進退を共になし得さりしものが殘留して遂に故國に皈るの機を失し其儘在住代々相嗣ぎ以て今日に至れりと云ふ故に此村落は概して日本人を祖先とする者にして内地人に對してもワイノム（倭奴）の語を放たず且つ通列他村との婚をなさず又村中の岡三家には嘗て近時に至るまで甲冑及日本刀類を藏せし者ありしと傳説すれども現今は一も是等を所藏するものなし（假令以前其事ありたりとするも梨泰院には近時營舎を置かれたることあれば或は其際沒収せられたるものならん乎）而して村民の姓は殆ど梁鄭を二姓を名乗れる者にして他姓は僅かに一二に過ぎず而して彼等祖先の墳墓は漢江の對岸なる東山里（西氷庫より漢江を渡りたる處）にあり墓碑は豎四尺巾一尺六寸の石碑一基を中

央にして其左右に梁氏鄭氏の小墓碑區劃して散在するもの七八基並ぶ碑面には「朝奉太夫梁公之墓」「通政大夫鄭公之墓」其他の文字あり大墓碑には「叔人金海金氏附左、禦海將軍行忠武衛副司果梁公之墓」とあり其裏面には

公衛遯字紅雲南原人

生於崇禎丁丑卒逝辛卯享年七十五娶金氏生四男四女後先逝娶李氏生二男四女長曰忠建次曰忠善三曰忠世四曰忠宗棠五曰忠萬六曰忠望一女適鄭萬雄二女適鄭起相忠建娶陳氏生八女無子弟忠棠子後碩養子忠善娶張氏生二男二女長壽碩次永碩忠世嬰安氏生三男二女長重碩次朱碩三天碩忠棠子嬰金氏忠萬娶李氏生二男一女長明碩次梁碩忠望嬰安氏

葬于廣州彦住里己丙龍酉坐卯向之原

康熙五十一年丑辰十一月日立

の文字を見るのみにて墓碑に就ては甚だ要領を得ず康熙五十一年は今より百五十余年前なりとす而して碑文中、梁公は南原の人とある南原及び金海金氏とある金海

に就きて調査するに南原なる地名は全羅道に金海は東萊より洛東江を渡りたる處にあり依之觀之南原が全羅道にありとすれば梁氏の祖先が日本人たること頗る疑はしされど日本軍の降將沙也可と稱するものに偉功建てしものあり而して沙は暹に通すべく也可は後金姓を得て金海金氏と名乗り又可也と共に敵軍に投降せし沙汝某なるものも又武勳に依て金姓を得同じく金海金氏と稱す而して也可は齡七十二歳にして鹿洞に卒したれども沙汝某の後尹生に於て少しも現はれず也可と共に我軍と戦ひしことは明なれども其終る所を知らず故に或は沙汝某が此の地に止まりたるにはあらざるか果して然らば日本人の後裔と謂ふことを得べし要之前述の如く征韓の戰當時我が將士梨泰院に駐屯せしことは素より論を俟たずと雖もこの地の村民が果して日本人の後胤なるや否は確乎たる憑據なきを奈何せん漢江の清流や巍峨たる四圍の山は依然として當年の俤を有すれども其昔我同胞が鐵蹄に踏み荒らしたる印跡はそも何處あはれ原頭に佇んで古を偲へば我同胞胸裡に畫きつゝある往年の追懷も山河物言はされば尋ぬるに術なしと雖も梨泰院の裏面には必ずや研究すべき之が由緒の伏在

せるを疑はず今は暫く記して後の研鑽に委ねんのみ

石坡亭

彰義門(北門)坂嶺を下る數町にして左方の丘頭に一開亭あるを見るこれなん半島近代の怪傑故興宣大院君李是應の別墅たり庭園廣く奇樹怪石多く溪水其間を繞ひ亭後には山麓に臨み幽邃閑雅轉た仙境に遊ぶの想あらしむ春は紅白爛熳として滿廷に隘れ秋は紅葉滿山を染め景致絶佳なり其屋宇閣上に懸る「剛日讀經柔日讀史」有酒學仙無酒學禪の扁額は大院君の自筆なり能く老雄の心事を語れるものゝ如く訪ふものをして感慨無量ならしむ春秋の季節には文人墨客の杖を曳ひて亭園に及ふもの多かりしが今は李喜王の別墅となり常人の出入を禁止す

弘智門

石坡亭を下ること十數丁にあり一條の溪流巨巖に奔馳する所一帶の水門を云ふ長經幾十尺なるを知らず水孔三門一流の淀みなく吞吐し去る。滔々たる嶮流は此處に至

りて一時に其勢を増し深淵藍よりも青く狂奔疾馳岩を噛んで雪を吐き銀を逆巻き渦は湧きかへりつゝ今吸ひ込める水を再び吐き出して稜々たる巖角に觸れては水の花巴と舞ひ渦巻き凄愴を極む杖を北漢山に曳くもの亦一遊を試なべきなり

洗 劍 亭

弘智門より左に眺めつゝ溪流に沿ふて右方を迎ふこと一丁岩石突出して水に臨める巨巖の上に六角形の一小亭を見る即ち洗劍亭これなり亭に洗劍亭の篇額を掲ぐ亦幽静の一地境なり蓋し亭は仁祖の朝(我寬永年間)に建設せしものなり初め宣宗の第二子光海君性暴にして位を簒奪し無道を極む事を構へて王大妃を幽閉し且つ綾陽君を害せんとす綾陽君(仁祖)之を覺り宗社の覆滅を恐れ潜に志士を糾合す來り會せるもの算なしました武臣李曙、申景禎、具宏、具仁垢、等文臣金蓮、李貴、崔鳴吉、張維及儒生、沈器遠金自點等と謀を通じて密に義兵を擧げ光海君を除きて綾陽君を立てんとす既にして謀議一決し李曙を長湍府使となし德津に山城を築かんことを請ひ以

て士六十を練り日を約して兵を擧ぐ遇々伊川の府使李童老の軍、亦坡州に來り會し兵威大に振ふ人あり變を皇宮に告ぐ光海君方に後宮と共に遊宴酣なり意驕り敢て顧みず此夜綾陽君親ら兵率る曙の軍を延曙驛(彰義門外)に迎へ皆劔を岩上に磨して疾風一撃忽ち彰義門を突破し進んで景福宮を衝き遂に光海君に迫りて帝位を譲らしむ仁祖是なり因て一亭を建て、洗劍亭と名づく蓋し軍士の劔を磨したるに因みたるものなり

蕩 春 基 城

洗劍亭の前面溪流を隔て相對す往古は左右翼城を築き四方に城門を設け摠戒廳、軍倉、宣惠別倉あり等ありしが今や朽廢して公廩荒廢して一帶の城壁全く頽圮し蔓草一面に生じ纔に當年の古蹟を髣髴せしむ此地固と三國(新羅、百濟、高句麗)時代に新羅、百濟の古戰場にして長春郎、罷郎兩氏の戦死せし所なり後ち高麗の太祖武烈王兩氏の爲めに寺院を建立して藏義寺と命名せり後ち李朝世宗莊憲王の時此寺院を集賢殿諸臣に與へ以て讀書を奨勵せしが成宗(康靖王)の時に至り年少の文臣、

蔡壽等に命じ讀書を勵ましたるより時人稱して文章樓と謂へり其後廢寺に飯し關防に當て蕩春臺城を築きたり今朽破見る蔭もなき數個の建物丘上に貽れるもの是れなり

濟川亭

西大門を距る約二里漢江の北岸にあり往時、明使の來る時は必ず此亭に於て應酬歡待するを例とせり今や荒廢に飯し纔に殘礎をとゞむるに過ぎずと雖も以前は亭子漢江に臨み山景水色の美を鐘めたり明の董越賦して曰く「樓は高く雲に擬し、水は碧にして鏡を浮ぶ」後ろ明宗の十三年(我文祿元年)我が軍、大舉來り侵し釜山鎮を陥落す頻々敗報至り人心胸々として城内震動色を失す茲に於て右相李陽元を守城大將に任命し又商山君、朴忠侃を京城送檢使となし兵備を嚴にし都城を守らしむ又慶林君、金命元、をして都元帥となし兵千餘を率ひて齋川亭に駐屯せしめ京畿、江原、平安、咸鏡諸道の兵を徵し京城を守護せしむ五月我兵漢江に迫る都元帥、金命元副元帥、申格我兵勢に避易將士戰意なく士氣沮喪し敢て防戦せず悉く兵器を江に沈め

俱に匹馬に騎して臨津に逃る各處の諸軍風を望んで潰亂し留都大將李陽元亦楊州に走る是に於て我が軍刃に劔らすして京城を占領したり、俊謙に左の詩あり

濟川亭

倪謙

百尺高樓俯漢濱

登間來眺足怡神

青山影漫芙蓉翠

玉壘香浮琥珀春

日暖扁舟輕泛々

風微新水細縈々

海門近接銀橫派

擬欲乘槎一間津

碧蹄館

碧蹄館は京城敦義門を出で義州街道に沿ひて進むこと四里半高楊郡衙の附近にあり亦た碧蹄館の北方半里弱にして惠陰嶺に達すその附近一帶を碧蹄驛と稱す蓋し碧蹄とは駿馬(駿馬の蹄は碧色を意味す故に碧蹄とは日本語に假へて駿府など云ふが如し)館は清國へ差遣せる冬至使又は清國使臣の此所に宿泊せし所にして其宿館たる客舎の名を碧蹄館と云ふ今尙ほ往時の建物を存すこの地は文祿の役小早川隆景の奮

戦して明將李如松の軍を撃破したる所なり初め李如松平壤に小西行長を破次で開城に駐屯せし我諸將の城を棄て、南還したるを見て日本軍與みし易しと爲し勢に乗じ我が文祿二年(明の萬曆二十七年)正月二十六日には主力を率ゐて東坡を過ぎ臨津江を渡りて坡州に駐屯す(坡州は京城の北方十里にして其中間距離に現在碧蹄驛あり)翌二十七日兵二萬人を率ゐて碧蹄館に至る當時日本軍は平壤の敗北に士氣沮喪し加之糧食に乏しく諸將碧蹄館の戦を議したるに概ね退却を主張せしも獨り隆景勇斷果決固く執て動かす豫じめ間諜を放つて敵情を探り自ら統帥となりて各軍の部署を定め廿八日拂曉兵を分つて三隊となし礪石嶺下に陳し立花宗茂、毛利元康、毛利秀包を奇兵となし數百人を以て嶺上に屯せしむ浮田秀家黒田長政、等の諸將坂を隔て隆景の後授たり彼我の大軍雲霞の如く魚鱗の黚黚山を掩ひ野を埋め旌旗の風に翻るさまは秋の野の尾花よりも滋し時に如松至り嶺上の兵寡なるを見て意氣驕傲之を輕んじ數千人を以て來り迫る隆景即ち第一隊を出して之を挑ましめ少時にして引退せしめ次に第二隊を出して亦少時にして引退せしむ此時我軍の奇兵機を見て嶺を越

地に下り直ちに如松の中軍を衝く隆景の第三隊之に呼應し前に退きたる第一第二の兩隊も兩側より夾撃し茲に激戦混亂白刃閃き矢丸飛び叫喚の聲山野に震ひ馳せ違ふ萬馬音は雷の如く射違ふ矢は雨を注くに異ならず彼我の戦陣亂れて修羅の巷と化しぬ時に宗義智、柳川調信等明軍の裨將を銃撃し吉川廣家も次で奮撃殺到し將を斬り旗を塞ぎ奔るを追ひ逃ぐるを逐ひ遂に大に之を破る明兵の死傷一萬人鮮血は山野の草葉を染め死斃は彼此に算を乱して馬蹄を埋む如松纒に身を以て開城に奔る隆景の用兵神出鬼没を極め或は伴り敗走して以て伏兵と相夾みて之を縱殺し或は奇兵を放ちて突撃せしむ戰略機宜に適し以て大捷を奏す之を碧蹄館の戦と云ふ

悲風慘雨その昔、馬蹄山野を蹂躪し旌旗天に漲り阿鼻叫喚、修羅の巷を現世に見せたるは、これ、此處、上下幾百年の興亡は、たゞ一轉瞬にして力山を抜く、ますら雄も人生五十年の生涯は未だ曾て此眼界より離るゝこと能はず英魂異域の鬼と化して今將た何處にか尋ねん颯々たる松籟は當年萬馬の聲が唧々たる蟲聲は結んで解けざる幽鬼の悲愁か古戰場を吊ふものにして懷古の感を深からしむ

因に碧蹄館の戦に参加せる編成は左の如し（我が軍の編成は萩藩閩録黒田文書又は淺野家文書及天正記に據る而して明軍の編成は李朝の正史、國朝寶鑑を参照す

小川早軍（第六軍）

- 一 万人 羽紫筑前侍從(隆景)
- 二千五百人 羽柴柳川侍從(宗茂)
- 八百人 高橋主膳
- 九百人 筑紫上野介

計 一萬五千七百人

明軍の編制表

經略	宋應昌(兵部侍郎)	提督	李如松(軍門都督同知)
左協大將	楊元(軍務副總兵)	部將	王有翼(副總兵)
	王維楨(副總兵)		李如梅(參將)
	李如梧(參將)		楊紹先(參將)
	李大受(副總兵)		孫守廉(副總兵)
	李寧(參將)		葛蓬夏(遊擊)

中協大將

李如栢(總兵)	部將	任自強(副總兵)
李芳春(參將)		高策(遊擊)
錢世禎(遊擊)		威輝金(遊擊)
周公謨(遊擊)		方時(遊擊)
高昇遊(遊擊)		王洞(遊擊)
張世爵(副總兵)	部將	祖承訓(副總兵)
吳惟忠(副總兵)		王必迪(副總兵)
趙之牧(參將)		張應忠(參將)
駱尙志(參將)		陳邦哲(參將)
谷燧(遊擊)		梁心(遊擊)

右協大將

方時春(參將)	旗鼓官	韓宗功
劉黃璽(兵部員外郎)		素黃(同主事)
艾維新(戶部主事)		

兵數合計四萬三千餘人

待衛聯隊跡

明治四十年七月、日韓協約締結せられし結果尋で八月一日東大門内訓練院に於て韓國軍隊の解散式を舉行するや暗雲京城を鎖し廢兵等突然叛亂を企て南大門より西小門に至る城壁下に沿ひて設けられし營舎待衛聯隊第一聯隊第一大隊及第二聯隊第一大隊の營に籠りて反亂す此鎮定に向ひし我兵は南大門及西小門樓上に機關銃及小銃を發射し反兵は三面より射撃して盛んに反抗せしが須臾にして正面及左翼の反兵は潰亂せしも右翼の兵舎より頑強に抵抗せしが我一部隊は肉薄突撃遂に營内に突貫す中隊長梶原大尉は大に奮戦力闘一舉に賊營を屠らんと欲し抜刀一閃星馳電撃疾風の如く馬首を躍らして進みしが兵舎前の石階に達せし瞬時偶々敵彈來りあはれ墓なく頭腦に命中し大尉は忽然落馬して其場に絶命す既にして反兵遂に潰走し或は死し或は捕虜となり或は鐵柵を破壊し或は城壁を落下して脱出せし者尠からず此時閔大隊長以下叛兵の殺傷算なく死屍累々各所に横はり慘狀を極めたり梶原大尉は日露戰役の際旅順其他各地に轉戦して驍名夙に著はれ聲望隆々鬼大尉の名ありし人大尉の最後を遂げし石段の一個は今は南大門小學校の後方運動場の一隅に柵を設け其中に紀念として之を保存し永く往年の雄風を追想せしむ。

園丘壇

南部長谷町にあり往時は南別宮と稱せしが明治三十年之を改めて園丘壇と稱し改築を加へたり宮内に圓形の園丘皇壇あり壇は煉瓦を以て築ける三會にして每會高さ三尺餘下會には石壇を繞らし上會は煉瓦を敷詰めり宮は李朝成宗の時其王子某の爲めに造營せしものなり某此宮に移りてより驕態粗暴を極め日夜宴遊を事とし醜行姪穢に至らざるなし遂に邸の一隅に高樓を設け立て街路を眼下し會々婦人の輜輿に乗りて其下を過ぐれば直に人を派して誰何せしめそて輜中を窺はしめ容色美なるものは拐囚して枕席に待せしむ人民之を怨み遂に暗殺したりと云ふ南別宮は以前清國の使節を接待せし所なり文祿の役、明の提督李如松京城に來り本宮に駐まりしより此以後使節の接待を此處にて行ふこと、なれり亦明治四十年七月二十日李拓殿下が皇帝即位式を行はせられたる所なり今八角形の高樓は其當時の式場に充てられたる紀念堂

なり

下都監と訓練院

光熙門内の北邊にあり明治十三年朝鮮兵、訓練の任を帯びて別枝軍訓練官として駐韓せし我陸軍工兵中尉堀本禮造氏は下都監を以て宿舍とせし所なるが全十五年七月廿三日訓局舊兵暴動の時乱兵之を襲ひ堀本中尉は此宿舍に於て戦死したり其後清國の官憲、袁世凱の宿舍となり明治十七年の變亂に際し韓廷動搖の際一時國王袁世凱の許に避難せられたり後ち幾何もなく清國理事府の建築竣成せしを以て袁世凱は理事府に移轉したり爾來空舎として存せられ雨蝕風剝の儘なるを以て屋宇敗壞して牖戸打腐し蛛壁を遮ぎり只往年の面影を偲ばしむ堀本中尉は別項に記載（京城に於ける日本人の發展小史参照）の如く當時邦人卒先の來城者にして不幸其職に殉す嗚呼中尉の英魂今何處にかある白雲に問へど語らず松籟に質せども亦言はず峰嵐たゞ愁ひの音を傳ふるのみ

抑も其原因たるや軍隊の祿米を給與するに當り一軍吏あり時の軍隊會計事務總理関

謙篤の殊遇を頼み私利を圖りしかば事の漏洩するに及んで兵士等怒りて之を打撲し遂に死に致せり是に於て謙篤亦た怒りて主犯者を獄に投ず兵士益々積昂し遂に宮闕の乱入となり閔族の蹂躪となり更に一轉化して我公使館の襲撃となりしが此の騷亂に際し氏は非命に斃れたり

訓練院は下都監の北測に在り昔時武術の練習を爲せし所平坦廣大にして城内唯一の運動場なるを以て日鮮諸學校生徒の春秋大運動會等に使用せらる

東 籍 田

東籍田、興仁之門より三十町の所にあり地は李朝太祖の親ら播種せし所にして冊立前の李王殿下も毎年春季の候行幸して親幸式を舉行せられたりしが併合後は其事なきに至れり

清 涼 里

清凉里は一に貞涼里とも謂ふ興仁之門外約一里にあり明治二十八年十月の事變に祖落せし故明成皇后（閔后）を祀れる洪陵及び嚴妃の陵あり其境域は數百町歩に亘り綠

林森然として之を續り一條の湖水涓々として寂寥の境を流る陵は山麓にあり陵殿は其正面に高く聳む碑閣又其傍に設けらる就而之を見れば一基の麗碑あり「明成皇后」の數字を刻せり碑一見鏡の如く砥光陸離たり工事數年に亘り工費六百萬元の大額を要したりと云ふ故にその規模頗る壯觀にして他に多く其比を見ず風景又佳なるを以て春秋の候は内外人士の杖を曳く者多し

閔后は明敏機智に富み其縦横の奇才は宮廷の内外を操縦し實に國際上の大機能たりしが朱丹金碧の寢殿裡一夜白刃の閃き鮮血淋漓の許に趣きてより星宿座を移して茲に十數年今や青苔露滑かなる幽陰の邊りに冷かに眠れる亡魂の感果して如何に

水 落 山

京城の東部四里議政府の南二十町余にあり山は道峰山と相並んで斷巖削立千仞の斷岩は刀して削るか如く登山者か喘ぎくゞて行くさまは牛に牽れてと云へる諺の如く右回左曲して山路を辿る困難云はん方なく一足を誤らんか身は奈落の底に墮落して四體紛碎忽ち長夜の鬼と化すべし故に全山頗る豪壯の觀を呈し亦頗る景致に富む所多し。

回龍寺及檜岩寺

議政府の西三十町道峰山麓にあり李朝太祖李成桂其諸王子兄弟の政權爭奪を見て鬱々として不快の念に堪はず爰に於てか斷然意を決して文武の群臣を隨へて此寺に入り前後二ヶ年の長日月に亘りて王政を顧みることなく悠々念を閑雲野鶴に馳せたりと云ふ議政府は即ち當時の文武官を置きたる所なり又檜岩寺はこの地の北方四里にありて朝鮮に於ける最も古刹中のものに屬するを以て風打雨蝕幾百歳の星霜を経しと雖も常住の燈火は長へに盡きず蓮座を裝ふて今も猶ほ敲紅誦經を絶たずして古雅を極む。

長 命 山

交河郡邑にあり豊公文祿征韓の役長命と稱する者性勇敢にして義兵を募り此の山に陣して日本軍の驍將加藤清正の卒ゆる五千の勇將猛士と干戈を交へ力戰奮闘大に防戦に努めしが戦終に利あらず及折れ矢盡きて乱軍中に斃れぬ地は之に因みて長命山

と命名したりと云ふ

高 峯 山

高陽郡の西北部二里にあり文祿の役に都元師權慄此に據り日本軍を撃退したりと云ふ山頂に記念碑を建つ此邊四望豁然風景佳なり又山腹に萬景寺あり爰には權慄を祀れる記念碑ありて碑蔭には名なし、草は、笑みを湛へて永劫の夢に人の子を導く處蟲聲閑寂の譜を刻みて悠久の曲を奏し追想の感を深からしむ

津 寛 寺

高陽郡の東南二里、北漢山麓にあり高麗時代の建設になれる巨刹にして古色蒼然たり周圍に老松古幹多く相參差して松に叫ぶ松の聲野邊山邊の景に到ては附近唯一の勝地たり。

奉 恩 寺

漢江の河畔蘆島の對岸にあり盛夏の候は此地に來遊するもの接鐘跡を絶たず本寺は實に一千四百年前の建築なりしが文祿の役兵火に罹り其後百有餘年を経て再築し歴

代王室の保護を得て近時に至れりと云ふ寺領極めて廣く六萬七千坪の照域を有し僧侶又三十名余有り一山寂として幽閑を極め俗聲を絶つ長空一片の月は實に彼我が好伴侶なり山明水裡は彼寺が好栖處なり笑刹す都下幾千競名争利の人生能く幾時ぞ彼れも一時なり是れも一時なり生涯甘じて幽鳥と伴ふことの亦悠久なる哉

石 碑

松坡鎮にあり其由緒來歴を審にせされども李朝仁祖十五年馬蹄山野に馳せて蹂躪したる蒙古軍の自國より齎して建立したるものなりしが今より十數年前内地人が倒潰したりと云ふ亦近古世事の轉變を偲ばしむ。

大井洞の社祠

高陽郡大井洞にあり高麗の太祖、王建の築營せし所にして境内の池は西海龍王に通じて龍女出入し王建の母は遂に此池に投身して姿を隠せりと傳ふ而して池の周廻は僅かに約五間半餘に過ぎずして繞すに石壁を以てせり池水は今もなほ千古變らぬ清澄玉の如き水の藍碧の色深く一面鏡の如き清水湧出して村民の飲料に供給す。

蠣 峴 鎮

高陽郡碧瀾渡より約二里の地にあり李朝第十六世仁祖即位の二年、平安兵使李迨の叛乱をなせし時開城の留守の將李箕鎮が防戦の爲めに鎮を築造したるも後ち廢鎮に歸し近く明治二十九年之を破壊せりと云ふ今は堡門を有するのみにしてたゞ蔓艸の茫々として青苔露滋きの邊り轉だ寂寥の景を默し往古の俤を偲ばしむのみ。

三 角 山

京城の鎮山にして一に華山と云ひ新羅時代には負兒岳と稱へたり京城を北に距ること約三里蓋し白雲臺國望峰（露石峯）仁秀峯の三峯より成る三峯は高く頂上に鼎立するに由來して三角山の名あり三角山中最も高きは白雲基にして海拔（仁川）實に二千六百六尺兀として天空に聳い山腹に小祠あり全山は岩石より成り山勢極めて峻峻にして千仞の斷崖刀して削るが如く或は絶壁となり或は葡萄匐して蔓を據するの峻所あり斷崖削立蟠るもの傾くもの臥せるもの仰けるもの千態萬狀の奇巖名狀すべからず亦重興寺の後背より登ること十町余にして北門北漢山上の北門に出づ猶ほ進

んで門の北邊より登れば一岩石あり之を決斷岩と調ふ俗説に古より此臺に登る者は尙ほ頂上の山路險なるを以て登歎不登歎を決斷すべく躊躇せしむ故に此名ありと謂ふ此岩より以上は路極めて險なるを以て人、臺下を顧る能はず辛ふじて絶頂に達すれば廣濶なる平地にして約千人を座すべし眺望絶佳、連山悉く脚下に蟠り遠くは渺茫たる黄海の青海原は慰の如く水天鬚髯として現はれぬ京城龍山指呼の間にあり若し夫れ長空一碧雲翳なからんか遠仁川港亦視界にありて人をして在天の想あらしむ臺上には異草奇花岩石の隙に生じ老松亦其間に混り千秋樵夫の斧斤入らず掃ふ人なき落松葉砂地に積りて松がまこふ青苔の風情も却て自然の趣きを添へて心ゆく許り限りなし臺上に岩石あり清人の名を刻せり亦南面の山腹には白雲寺の遺址を存す其下方の窟中より清泉湧出す白雲水又は萬水と號す水味清冽にして登山者の渴を醫す泉の傍に小庵あり此庵は皇室祈禱のために開國五百一年（今を距る十九年前）の建設に係り構造頗る奇なり此附近に二岩石あり一を浮石と謂ひ一を超岩と謂ふ鮮人間の傳説に依れば所謂浮石とは浮びたる石の義にして若し二人ありて相互に繩の一端を

持して石底を拂へば更に障碍なく拂ふを得べく又其石は手を以て容易に動かすことを得べし然れども石底を検せば寸隙すらあることなしと因て之を浮石と名づけたりと超岩とは其岩中斷じて其間纔に一步ならざるも此岩に登て超へんとせば直ちに双眼、眩み起立する能はず故に若し此間を超ゆるものあれば吉祥の前兆にして大事業成功し若くは臺閣の地位に登るを得べしとの俗説より名づけられたるものなりと云ふ嘗て太祖李成桂登臺して七絶を賦して曰く

引手攀蘿上碧峯 一菴高臥白雲中

若將眼界爲吾土 楚越江南豈不容

亦吳淞の賦に曰く

聳空三朶碧芙蓉 漂渺煙霞幾萬重

却憶當年倚樓處 舊沈蕭寺數聲鐘

其後仁祖の王子麟坪大君此の高樓に登りて頗る下臺に苦しめり云

仁秀峯は白雲臺の東に在り全峯悉く火岩石より成り一の樹草なし之を平地より仰げは芙蓉倒に碧空に懸れるが如し絶頂に小塔あり（白雲臺より望めば有無髣髴の間に其存在を認めしむ）此小塔は小石を累積して築造せしもの何れの時代に何人が築造せしやは明ならず俗説に依れば昔時一人の僧あり日に一石を携へ山峯上に登りしが一日一石、層々累加して遂に之を建立したりと云ふ

國峯峰、亦禿兀たる岩石山にして凸凹たる奇巖峭立し樹木繁生せず山容の概観は仁秀峯と相伯仲したる姉妹山なり此峰は高麗の廢宗二年（我嘉永二年）に崩潰し恭愍王の元年豪雨のため崩れ其後ち十四年を経て亦崩潰し宜祖の三十四年（我慶長六年）には本山鳴動して聲萬雷の如く轟聲四周を驚かせりと依之觀之に以前は尙ほ高かりしを推測し得べし此峯の南方に文殊、普賢の二峯あり普賢峯の一枝西に走て碑峯となる峯上に古碑あり星霜幾百年風零雨殘の爲め刻字磨滅して讀むべからず蓋し新羅眞興王の十六年（欽明天皇十七年）王親ら北に巡舉して定界碑を此所に樹たるものなりと云ふ亦碑峯の東方に紗帽岩あり百濟の始祖沸流其兄温祈と共に南巡し漢山至り

て負兒岳に登山し此岩に立て都すべき地を望見したり而して辛〇六年に負兒岳崩潰したりとあるも即ち此岩なりと云ふ普賢峯は他の諸峯に比して高さ最も秀ぶ此峯は曾て世祖の即位前安平大君と共に他の儒臣を隨へ此峯に登りて其雄大なる絶景を憧憬して止まず日出日没を觀、下山に際し絶壁に臨み安平以下の諸儒臣等は皆恐怖し眼眩みて脚戦き進退谷まりて頗る窮せしに拘はらず世祖、泰獎自若として躍り下りてたれば衆皆其偉大なる膽力に感じたりと云ふ

北漢山城

三角山下にあり山上繞らずに城壁を以てす李朝肅宗の三十七年（我中御門天皇正徳元年）左相、李儒に命じて築かしたるものなり周圍七千六百二十歩大南門、大城門、大西門、大東門等の諸門あり總戎使の官を設け西に重城を築き城門をを設け訓營、禁營、御營を置き軍糧を蓄藏して變事に備へ又行宮を建てたり俗に之を北漢山の離宮と稱す離宮の四圍は悉く老樹喬木を以て繞らし周圍に三門を備ふ殿閣内外を分ち繞廊合せて百二十間殿閣には皇室書籍及列聖の寶璽、金冊、銀冊、玉冊、竹冊

儀軌、其他内外書籍等を藏書せり名けて北漢史庫と云ふ單に風趣の上より之を京城の諸宮殿に比すれば固より一觀の値なしと雖も其風光の雅絶に至ては一大美觀なり文祿の役我が軍長驅して韓京に入るや國王難を茲に避けしことあり當山城全盛時代に在ては人家五百戸を有せしが今は凋殘して纔に數十戸を有するのみしかも貧窶辛ふじて糊口を支ふるのみ然れども山光水色の美に至ては近郊に其比を見ず若し未れ肥馬秋に嘶くの候杖をこゝに曳かんか滿山の楓葉霜に壓きて蜀錦を纏ふが如く稜羅を着るが如く炎と燃ゆる落葉時に衣を撲つて一鳥かすかに鳴けば水の聲耳に美妙の私語を聞く城内谿水は數條の細流蜘蛛になりて或は合し或は岐れ遂に都聚して西流す砂白ふして水清く崇靈の氣乾坤に充つ大西門を入り溪水に沿ふて數町を登れば「白雲洞」の三大字を刻せる石壁に出づ更に進みて數行を行けば溪に臨める一亭あり亭名を「山映樓」と云ふ紅桂綠欄は丹青鮮美にして溪水と相映ず亭の南側に斜面の石壁あり古今善政者の頌徳碑を樹立せり亭に登て南方を望めば蜿蜒重疊する處に險山を突起し萬古の矮松は溪間に蟠屈して嘯虎の如く湖畔に鬱蒼たり更に樓下を眺望す

れば盤石白く水聲涼々操琴の如く樹木森々として翠綠滴るが如し吹き來る清風は長へに萬古の調を弾じ文士墨客をして低回顧望去る能はずらしむ大南門は城南の山上に在て雲霄を凌ぐ本門は京城よりの最捷經路にあり大西門に通ずるは之より稍々遠し城の東に東將臺西に西將臺あり兩臺何れも山頂にありて敵勢を觀望したる所なり其他京城の北部に通ずる間道の暗門あり

重 興 寺

重興寺は亦本城内にあり此邊一劃の地を總て重興寺と稱す諸寺中最も名高き寺刹にして往時は神穴寺と稱したり高麗顯宗王の落飾僑居せし所なり諸殿堂中大雄殿最も宏壯を極め繡戸紋窓畫棟彩椽の金碧燦爛として輝き殿内に釋迦如來、觀世音菩薩、地藏菩薩、三位の佛像を安置し其左右に行者、尊者の繪像を掛けたり又大雄殿の前面に二層の大樓あり萬歲樓と謂ふ樓上には古來著名の詩詞を刻せる板額を掲ぐ左右に行開ありまた殿の北方に羅漢殿ありて殿内には十二大王の望像跌座し其東に山神堂あり洞口には重興洞門の四字を刻せる石碑あり此附近は松樹楓林蒼鬱して殿閣石

塔樹林の間に隱見出沒して山光水明の佳境高韻清雅いはむかたなく清淑の氣登山者の雅懷に入り所謂詩神の此間に徜徉するかと疑はしむ本寺は往時王室用の藥品製造を掌りたるが故に寺格最も高し寺の東方に總攝廳あり昔時北漢營門を置き總戎使の官を設け軍糧を貯蓄するに當り此寺僧中の學識ある者を以て總攝となし僧大將と稱し僧軍を設け國費を以て之を養ひしかば僧將の勢望隆々として號令嚴肅毫も假借せず其權力往々在廷の權勢家を壓倒するなど偉大の權力ありしと云ふされど時勢の變遷と共に其權力を失し甲午(明治二十七年)以降改革と共に廢止せられ僧徒は離散し寺院亦頽落して滿目荒寥昔時の佛をこゝめず遊子墨客をして空しく昔事の轉變に月は千古の光を投ぐれども珠簾銀燭の春の夢もいづくの感あらしめしが今より九年前時の韓廷は特に宮内府より驛土を給與し其秋穫を以て新に僧軍二百名を養ひ稍其勢力を挽回せしも好事魔多く同年火を失し宏壯の殿閣を一矩に付し繼に古塔、石碑、浮屠、の類を餘し其後若干の再築をなせしも未だ往年の半ばにも及ばざること遠し重興洞中城は此寺の北にあり城址は今纔かに離々たる荒草裡、兩樓霜刻、碧茗石

を蝕して古色蒼然たる石壁及内外城の石扉を存するのみ口碑によれば百濟の中世此に都し今現存する石門は當年の宮門なりしと云ふ曾て爰に雲を凌げる城樓の如何に嶄然たりけむ、國亡びし古城の址、往年の盛觀今何處にかある。

太 古 寺

重興寺の東にあり太古祖師を觀請せしもの故に太古寺と命名し閣を建立し碑を堅てたり碑文は稼亭李穡の撰したるものなり此寺は太祖李成桂の幼時太祖祖師に就而研學せし所なり祖師の没後門弟等相謀りて後世に當時の實蹟を傳へんが爲に協力して碑を設け太祖の諱「成桂」の二字を直書して碑石に刻みたり、もしそれ、城内の楓樹悉く霜に飽く秋天肥馬の季節に杖をこゝに曳かんか風のゆかりに花の如く乱れ散り行くさまの美しささては幽花秋風に白き處俗寰遠く距りて仙境一幅活畫の詩味此中にあり而して此地に遊覽する者多くは當寺に入りて觀覽を縦にするもの多し

文 珠 庵

北漢山南大門外の西方にあり庵の西に高麗五百羅漢の塑像を安置せる羅漢殿あり殿

後に大石窟あり幅廣く奥深く優に數百の人を容るべし又窟の邊には自なる山の井をなせる湧泉あり其水清冽にして常に山遊者の爲めに渴を隣せしむ坦然詩を賦して曰

一室何寥廓 萬綠但寂寞

路穿石罅通 泉透雲根落

浩月掛簷楹 涼風動林壑

誰從彼上人 清坐學眞藥

道 洗 寺

北漢山城北門外一里にあり山光水色明媚にして綠色滴る處眞に仙境の域に遊ふの思ひあらしめて避暑の好適地たり往昔本寺は微々たる一小寺に過ぎざりしが近時再建して壯大輪奐の大寺院となれり又寺院の下を牛耳洞と謂ひ春風胎蕩の季には櫻花爛熳として美觀を呈し賞覽の雅容杖を曳くもの多し。

僧伽寺

僧伽寺は碑峰の前にあり、寺の前後は皆石塊のみにして一撮の土を見ず眺望絶佳にして城内の全部一瞬に落つ諸山の四面に群だちて波濤の如く飄々たる山風峯より峯につたへ山神の靈氣を齎して懐に入る境内は幽寂閑雅にして時に寺僧の讀經鉦聲如來座下におこれば底事ぞ一抹の淡烟迷して香爐を去らず清き聲床しき調は天風と和し一山寂として長へに千古の吟を傳へそゞろ神澄み氣爽かなるを覺わしむ此寺内に清泉湧出す薬水と稱す味甘冽なるを以て有名なり此泉を汲まんと欲せば白晝と雖も燭を秉り瓢を携へ窟内に入りて門を開いて汲まざるべからず城内貴族の子弟等時に書を携へて此等に遊びしが何時しか浮世の風は此山中にまで見舞ひ來りて病者の轉養地となり僧徒離散して屋宇頽落し狐狸の菓窟たらんとせしが後修理を加へられて壯麗の寺院となれり凡そ北漢及漢城の地には三十六箇寺ありしが往昔、新羅の時代には漢城内に實に八万九庵存在せしと傳へらる此附近に新興寺、藥寺、清岩寺あれども徒に祈禱所となりたるに過ぎず又尼寺としては豆毛浦(東大門外二里)にある僧

坊著名なり愈元浮左の詩を賦して曰く

僧伽寺

愈元浮

崎嶇石棧躡雲行

華構隣天若化城

秋露輕霏千里爽

夕陽遙浸一江明

漾究嵐細連香穩

啼谷禽閑遞盤聲

可羨高僧心上事

川途名利總忘情

龍山之部

位置及び地勢

龍山は京城の西南に相連れる一市街にして朝鮮三江の一なる漢江の濼々たる流れは南に沿ふて蜿蜒東より西に環流して自然の境介をなし鷺梁津及び素砂と相對し一脈の丘阜は京城より來りて此地を中斷して漢江河岸に盡く廣袤二方里を有す

人口

龍山に於ける内地人の戸數二千五百八十九戸人口男四千九百七十七人女四千三百二十四人計九千三百〇一人にして朝鮮人の戸數は八千七百二十五戸人口男二萬四千八百五十八人女一萬九千七百四十六人計四萬一千三百四十四人總計一萬一千三百四十四戸五萬〇六百四十五人なり

沿革

明治二十八年十一月時の帝國領事の諭達に基き始めて小規模なる龍山居留民總代役

場を組織し總代一名を置きて事務を開始したるを以て龍山に於ける自治制の濫觴とす爾來居留地の形勢に弛張ありしも數年間の歲月を極めて幼稚なる状態を以て経過せしが明治三十七年日露の國交破るゝや之が動機なりて俄然發展の兆候を現出し短日月の間に急進的大發展を見るに至り三十九年七月十七日遂に居留民團法實施せられて完全なる自治體を組織するに至りしが四十二年三浦理事官主唱の下に京龍合併の議を策し龍山側は極力之れに反對したるも議熟し四十三年七月二十六日統監府告示を以て龍山居留民團を廢し同年八月五日京龍民團合併なりぬ

交 通

龍山は前述の如く漢江流域に在りて其一百里の流域中船舶の往來に便するまさに其央ばに達し加ふるに河口に仁川を控いて門戸をなすが故に内外貨物の之に據るもの年々巨額に達す實に天與の一大商業地と云ふべし更に陸上に於ける交通機關の設備如何を見るに龍山は京釜、京義兩線の連結点たるのみならず京仁線も亦其連結点を横斷して仁川に通じ朝鮮を横斷する京元線も亦ここに會す然れば龍山は朝鮮を縦横

に斷する一大交叉点にして實に朝鮮鐵道の中心点たるなり

麻 浦

麻浦は漢江の流れに臨む一小邑にして河岸の高地第一江山より西を望めば麻浦八景あり龍湖の霽月、麻浦の歸帆、冠嶽の晴嵐、放鶴の漁火、栗島の明沙、籠岩の暮煙牛山の牧笛、楊津の啓照、之なり往昔文人墨客の吟情を展べし所なりといふ

孔德里の大院君舊陵

麻浦にあり龍山驛を距る西約二十丁京義線に沿ふて鬱蒼たる小丘を觀る即ち之れなり碑あり題して大院君公園所と云ふ風景頗る佳なり蓋し内地人の建つる所なり（樞は明治四十一年一月坡州郡大德里に移さる）域内に一の宏壯なる邸宅を見る是れ大院君の別墅にして白堊丹碧輪奐の美なしと雖も却つて其素朴なるの邊に古老雄の風姿を想見せしむ此邸は半島の怪傑大院君が三浦（梧樓）公使と國政を議せし所なり亦彼れを中心として幾多の陰謀詭計は此邸内に畫策せられ殊に乙未事變（王妃事件）に

先だつ前夜烈風鋭き刃の刻滴露を浴びる決死の壯漢數名意氣軒昂劍を按し切齒扼腕して曉天クーデターを石垣草露の間に密議せし所爾來星霜幾度か過ぎ紛々たる殺氣何れにか散して江山一變、人亦逝き孤屋空しく當年の歴史を偲ばしめて老鶻時に悲鳴を放つのみ

萬里蒼孝昌園

龍山驛を距る北方六丁余にあり一に龍山公園と稱す舊韓廷御陵の存する所にして一團の小丘より成る而して満山老松翁爵として翠黛天に横はり南山の綠翠と相對し滿目の光景幽邃閑雅にして山光水色絶へて俗塵なし丘の中腹綠蔭深き處に文孝世子及宣嬪の寢園あり更に丘上に登れば西南最も廣嶺にして展望十數里に及び其間洋々たる漢江の流水は紫紺の波靜かに白坡相拍ち蜿蜒として山野の間に隱見し遠淡近濃其さま恰も薄墨繪の如し此地は嘗て日清の間風雲漸く急ならんとするや我が大君の爲めにこそ死なめと盟ひてし忠臣一隊なる大島(義昌)混成旅團の先發隊たる小原隊が此地に駐屯し潑測たる英氣雄心凜々として頻に腕を扼し劍戟を磨して進軍の命を期

待したる所なり

江山亭

麻浦の南端漢江の斷涯にあり風光明媚の地附近に昔時貢米を藏せし倉あり嘗て水町秀一郎氏農商工部の囑により此處にて酒の醸造をなせしと云ふ上方なる税關監視所は韓國政府時代の雇總稅務司英人ブラウン氏の別墅なり

楊花津

西湖に隣れる要津にして曾て日本居留地に指定せられたることあるも後龍山を以て之に代へたりと云ふ一時日本に亡命したる金玉均岩田周作の清國上海美租界東和洋行に於て刺客洪鐘宇の爲に殺さるゝや其死屍を此の土に提げ來つて慘形に處したりと云ふ

西湖

水原驛の北一里にあり正宗太王の設けたる貯水池にして周圍一里三方山に接し堤上

に楊柳を植ゑて更に雅趣を添ふ西湖落照は水原八景の一にして古來その名高し

土亭里

今より二百年前李文蘭（土亭先生）なる人周易に精しく常に未來を判じて吉凶禍を占ひしかば士民その徳を慕ひ土亭の號を以て村名となせりと云ふ

漢江

京城の東南を洋々として環流せる漢江は朝鮮に於ける五大江（鴨綠江、豆滿江、大同江、漢江、洛東江）の一にしてその第四位に位す昔時三國（百濟、新羅、高句麗）時代に在りては漢山の河と稱せられ高麗時代に在ては沙平渡と稱す所謂冽水是なり李朝に及んで始めて漢江と稱へたり其水源江原道江陵郡の五臺山千箇水より發するもの及び全道淮陽郡の金剛山萬瀑洞より發するもの並に忠清北道設恩郡俗離山の文珠臺より發するものとなり實に江原道忠清北道及京畿道の諸川流會合したるものなり而して域域を五江に區別して分稱し一江毎に要津あり即ち廣津に至るまでを第一江と唱へ之より西流すること一里松坡渡に至るまでを第二江と云ひ其下三田渡

及蘇島を経て京城内の小流と會し普江を過ぎ漢江に至るまでを第三江と呼ぶ更に西に沿流して西氷庫銅雀津を過ぎ鷲梁津に至るまでを第四江と云ひ又西流して龍山、麻浦を過ぎ楊花津に至るまでを第五江と云ふ尙西部を貫流して海に入る以上を總稱して五江と稱す沿岸都邑の主なるものは狼川、春川、加平、寧越、永青、丹陽、清風、忠州、龍山、楊花津なりとす流域約百三十一里に及びその水幅は狭き所百間内外最も廣き所は里餘に達す河口より龍山に到る十七里の間克く小蒸氣船航行す而して龍山より上流南江の北倉に至る三十八里の間は五六十石の河舟を通すべく又北倉より上流永春に到る十七里の間及南北兩行の合流より北行上流に位する春川に到る間は尙小舟を遡船せしむべし水運頗る便なりと雖も河口は岩礁多きが爲に汽船若くば大なる帆船の航行は頗る困難なりとす而して潮汐干満の影響は龍山（河口より約十九里）より二里半の上流に達す而して其干満による河水増減の比は龍山に於て大潮は約七尺小潮は約五尺に達す而して龍山より上流に遡れば河水に攔分を含有する事稀薄なる以て灌漑に使用する事を得べし沿岸到る處貨物豊富にして船舶の幅濶

滋く就中五江には概して船間屋ありて米、鹽、薪、炭等を積載せる鮮船常に來往頻繁を極む而して本江流域に沿へる耕地としては其上流は之れに乏しと雖も北江沿岸地方に於ては春川附近の約六十町歩南江沿岸地方に於ては忠州附近の約千八百町歩其最大なるものなりされど高安(河口を去る三十里)より下流の地方即ち松坡鎮、驪島、富平、金浦、及豐德附近は耕地に富めり流水緩漫にして水深く且つ清し江岸亦甚だ風光に富み殊に夏秋二季は納涼觀月の勝地にして清遊の客多く投網貸船の設備あり嚴寒氷結期は地方により異なるも龍山、北倉間は平年十一月下旬乃至翌年三月中旬にして龍山より下流は十二月中旬乃至二月下旬を常とす結氷中は航路を杜絶して人馬氷上を來往し或は白衣の鮮人が悠悠疎髻を撫しつゝ結氷を破りて白魚を捕り鯉魚を釣るの光景に至りては實に一幅畫圖の如く實に一奇觀を極む。

水 渡 漢 江 李 穀

砂領逆旅正肅條、 幾傍虛簷望斗柄、

半夜疾風吹破屋、 一江流水凍成橋、

須臾使見人心小、 尋犬休誇馬足驕、

過了畏途還自笑、 不如飯去老漁樵。

漢 江 上 所 見 伊 藤 博文

寒煙十里沒平原、 蒼色荒涼處々村、

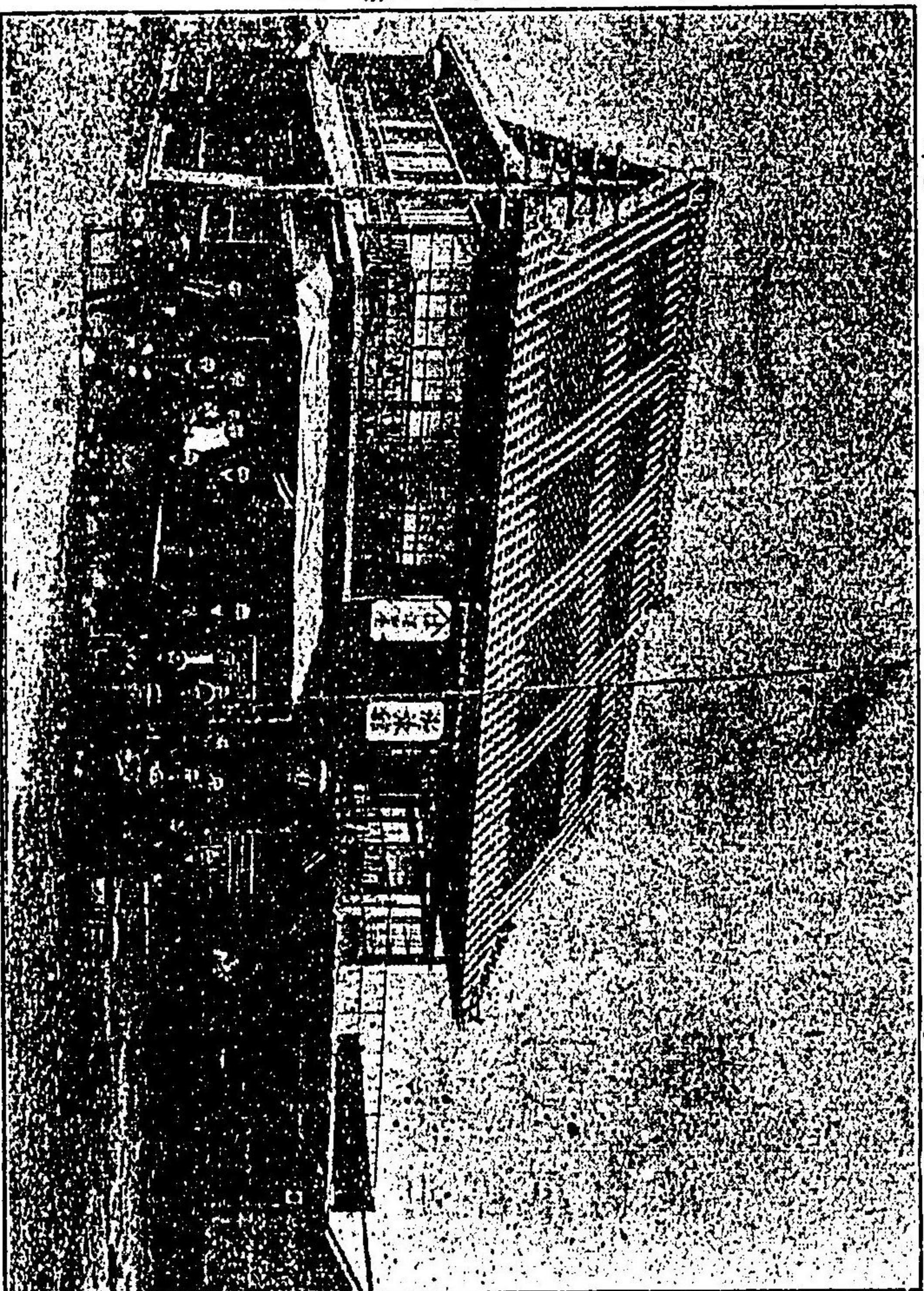
漢水欲枯秋亦老、 沙光雁影月黃昏。

銅雀津及龍津

銅雀津は竜山驛の東南十町余渡船場の在る所漢江の水遠く東より下り松坡を過ぎて山野漸く豁然たり天門中斷し茲に至りて碧流緩漫にして兩岸の揚柳垂れ短亭長亭相接せり江は文祿の役加藤清正の渡りし所其上流なる竜津は行長の渡りし所なり當時小西行長は南大門より清正は東大門より相前後して京城に進撃したり而して此時行長の清正に先つこと僅かに四十分餘なりしと云ふ嗚呼往年兩雄が意氣軒昂肥馬金鞍に鞭ち勃々たる滿腔功名の念抑ふるに術なき數千の勇將猛士を率ゐ威風堂々馳騁の優劣を競ふて一鞭直に國都に向ひし所爾來風すさび雨漲ぐこと幾百歳ぞ英魂今いづ

この邊りをか渡り行く落花飛びて杜鵑鳴けども白馬江頭に嘶かず聞かまほしきわ兵
 どもが夢の跡さあれ此水此山や年を加へて改めず人去りて其姿を變へず暮雲蒼々轉
 た人をして忍ぶに餘りあらしむ我愁然としてその昔タイハア河畔古都の荒涼に泣き
 たる西歐の詩人の心それは知らねどもしばし幻影の如き人生の果敢なきに泣きぬ有
 縁無縁幾千の人が死を送りて此橋を渡りつる吾は言はず今こゝを渡れるは皆詩の友
 なり風流の友なり淋しく懐しき追懷の幻を追ふもの豈に只我のみかわ噫！

部合待客旅に並 宿旅等高



玉突大弓遊戯部

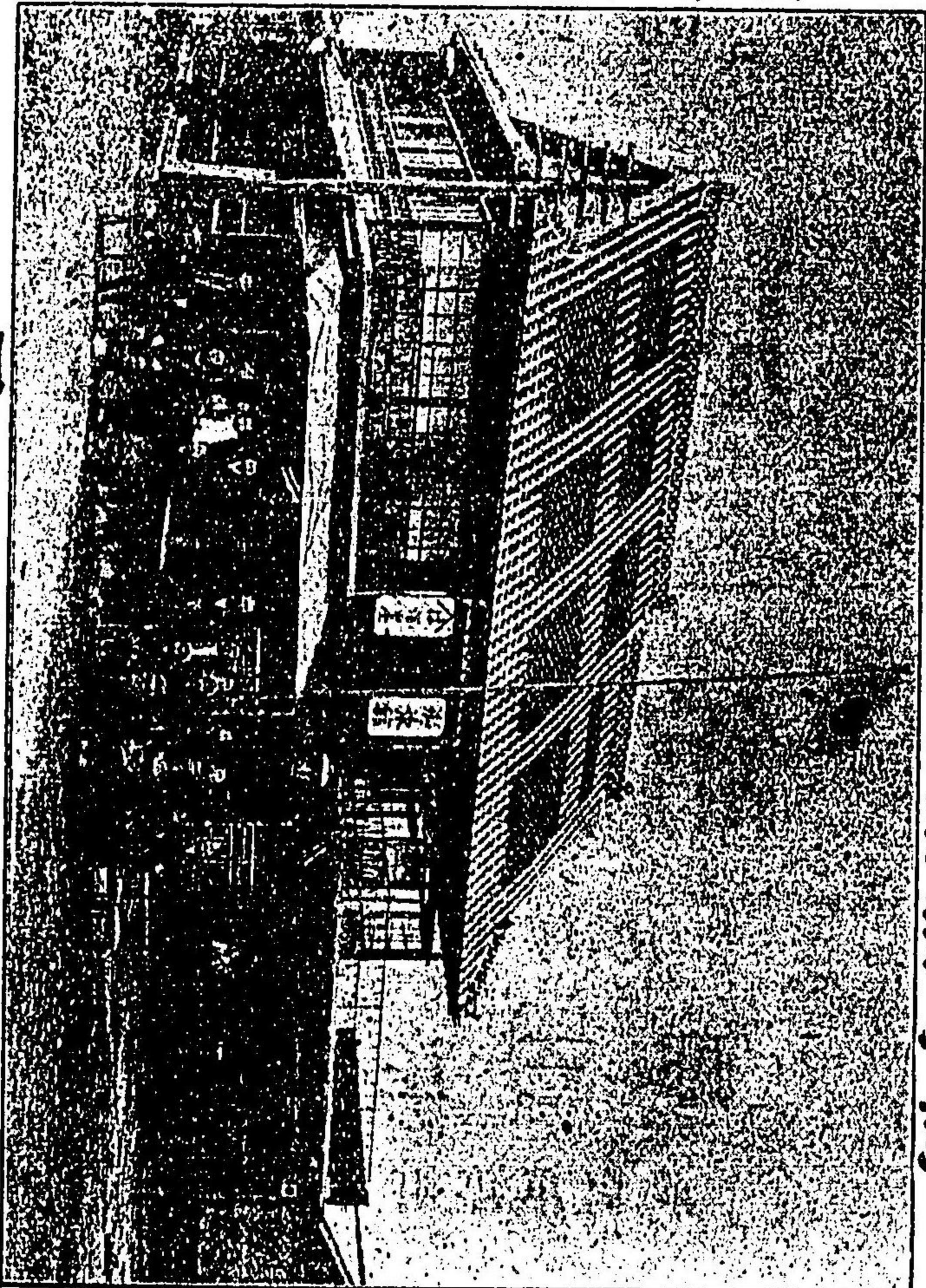
屋 田 濱

#1

卸雜 小貨、米、酒、鮮 朝 部 賣 部 永登浦驛前
 合 中 川 幸 三 郎 電話四番

この邊りをか渡り行く落花飛びて杜鵑鳴けども白馬江頭に嘶かず聞かまほしきわ兵
 どもが夢の跡さあれ此水此山や年を加へて改めず人去りて其姿を變へず暮雲蒼々轉
 た人をして忍ぶに餘りあらしむ我愁然としてその昔タイハア河畔古都の荒涼に泣き
 たる西歐の詩人の心それは知らねどもしばし幻影の如き人生の果敢なきに泣きぬ有
 縁無縁幾千の人が死を送りて此橋を渡りつる吾は言はず今こゝを渡れるは皆詩の友
 なり風流の友なり淋しく懐しき追懐の幻を追ふもの豈に只我のみかわ噫！

部合待客旅に並館旅等高



玉突大弓遊戯部

卸雜 小貨、米、賣、酒、朝、鮮、永、登、浦、驛、前
 合 中 川 幸 三 郎
 電 話 四 番

屋 田 濱

運送店

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲	▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
永登浦郵便局	朝鮮勸業會
永登浦警察署	朝鮮鐵道
永登浦大塚醬油醸造所	朝鮮聯合會
朝鮮皮革株式會社	朝鮮聯合會
朝鮮永登浦農業者組合	朝鮮聯合會
陽川金浦通津行	朝鮮聯合會
兼業 和洋菓子	朝鮮聯合會
兼業 土地賣買	朝鮮聯合會
兼業 委託配達	朝鮮聯合會
兼業 骨內賣買	朝鮮聯合會
兼業 牛骨賣買	朝鮮聯合會

三浦寬次郎

電話二十一番

中三

日用雜貨商

朝鮮永登浦本町

荒谷商店

電話二十二番

浦田旅館

待合並洋食

浦田庄三郎

永登浦本町停車場前

中二

材木
朝鮮永登浦京町
金物商
內山嘉藏

諸官廳工場御用達
諸新聞賣捌部

朝鮮永登浦京町二十六番戶

雜貨商
村田喜一

電話
振替京城
一五番
三九五番